

その男、復讐者なり

雪原野兔

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神の部下のミスにより、死ぬはずでない時に死んでしまった者がいた。

肉体は既に火葬され、望む世界へと特典を得て転生する事となる。新たな世界へと生まれ落ち、成長していくある日・・・突如として今までの日常が奪われる。

男は嘆く、何故自分なのだと。

男は恨む、姿無き悪意を。

そして男は傭兵となり、姿無き悪意への復讐を目指す。

肉体がどうなろうと、『人間』として・・・

：まあ、主人公の記憶は抜け落ちているんだがな！

というわけで何番煎じかも分からないFate系特典をもつての転生物語です。

基本三日置きに投稿、書けなかった時は気まぐれに投稿します。

追記：三日置きじゃなくて大体五日置きになりそうです、仕事が：忙しすぎる！

さらに追記：行き詰ったので不定期更新となります。

目次

第0章 転生入試のリンカーネーション

第0話 転生 | 1

第1話 襲撃 | 5

第2話 別れ | 8

第3話 傭兵稼業と出会い | 11

第4話 我儘娘 | 18

第1章 旧校舎のディアボロス

第5話 墮天使騒動その1 | 25

第6話 墮天使騒動その2 | 31

第7話 墮天使騒動その3 | 36

設定紹介 オリジナル編 | 45

第2章 戦闘校舎のフェニックス

第8話 不死鳥の縁談 | 49

第9話 格付遊戯VS不死鳥その1 | 54

第10話 格付遊戯VS不死鳥その2 | 62

第11話 敗戦後、二人の想い | 68

第3章 月光校庭のエクスカリバー

第12話 狂信者 | 73

第13話 教会の戦士との手合わせ | 80

第14話 問答 | 86

第15話 歪んだ世界 | 91

第16話 決戦 | 95

第17話 目覚め | 99

第4章 停止教室のヴァンパイア

第18話	再会	105
第19話	授業参観	114
第20話	駒王会議その1	122
第21話	駒王会議その2	127
第22話	襲撃者	135
第23話	協力者	144
第5章	冥界合宿のヘルキャット	
第24話	夢、そして冥界行き列車。	150
第25話	グレモリー邸来訪	154

第0章 転生入試のリンカーネーション 第0話 転生

ふと目が覚めると、俺は見知らぬ黒い空間にいた。

言葉で表現するなら入口を封鎖された洞窟の中の様な世界。

ただ一つ違うとすれば隣に知らぬ男が、そして自身の姿とその男の姿がはつきりとわかる。

A 「ん、んん…ここは、どこだ？」

B 「ぐっ、確か俺はいきなり何かが頭に当たって…。」

そう口になっている途中、頭がはつきりとしてくると互いに思ったことを口に出す。

A & B 「つて、お前は誰だ？」

祐樹 「俺は相良祐樹、お前は？」

大輔 「あー、俺は秋本大輔…で、ここはどこだ？」

祐樹 「さあ？どこだろうな、分かるのは明らかにここが家の中とかじゃないという事だな。」

?? 「ここは転生の間…お前たち二人は既に死んでしまった為にここに来ている。」

話している最中、後ろから唐突にその声が聞こえ、振り返ってみると中性的な男が立っている。

その男に一人は驚き、一人は残念そうにうなだれる。

祐樹 「っ！いきなり後ろに!？」

大輔 「まじで！俺達死んで転生…なんだよ、絶世の美女な女神じゃないのか…。」

?? 「そこまで露骨な欲望を言いながらがつくりされると何とも言えないなあ…まあ良いさ、俺は転生を司る神だ。」

大輔 「はあーそつすか…で、こんなところに来るって事は若くして死んだからーとか部下がミスをやらかしちやってーとかなんですよ？」

神様 「後者だがそういう事だ、だからこそ…お前たちには別の世界

へと転生してもらおう。」

祐樹「ええつと、元の世界に戻すのは出来なんでしょうか？」

神様「それは出来ない、ここで目覚めるまでには時間が掛かる、その間に既に死亡認定され火葬が済んでしまっているからな。」

祐樹「そうですか…。」

神様「…さて、お前たちには転生する世界を決めてもらう。互いに話し合うと良い。」

大輔「ん？それぞれ好きな世界に行くんじゃないやねえのか？」

神様「そうしたいのだから、コンマ数秒のズレ無しに同時に死んでしまったから別々に送ることができないんだ、こういう風に同時に対応することなど本来ないからな。」

大輔「ほーう…じゃあハイスクールD×Dの世界で良いよな、はいけってーい！」

祐樹「強引な決め方だが…まあ、特に思いつかなかったからそれで構わないさ。」

神様「そうか、そう言うのならその世界に送ってやろう。」

大輔「なあなあ！もちろん特典をくれるんだよな！」

神様「ああ、それはもちろんだ、若くして死んだ奴は基本1個だが…お前らの死に関しては俺の部下のミスもある、二つまで許可してやる。」

大輔「まじで?! いやっほう！俺様最強の人生を…。」

「いや、待てよ…? こいつも確か転生するんだよな…もし、そうもしも俺が狙っている女達を取られるとか癪だな…安全な時にさっさと消した方が良いな…。」

神様「…どうした？互いに情報を知られぬように個人面談をするぞ。」

大輔「え、ああはいはい、気にしないでくれ、じゃあいこうぜ神様。」

神様「祐樹と言ったな、お前には少し待ってもらおう。」

祐樹「分かった、待ってれば良いんだな。」

神様「ああ、では行くぞ、大輔とやら。」

そう言った瞬間、神と大輔はその場より消える。

別の場所、空のような世界へと二人は転移する。

大輔「うおっ、すっげえなこんな風に移動するのか。」

神様「さて、欲しい特典を言おうと良い。」

大輔「どんな特典でも良いんだよな!?!なら王の財宝をくれ!あ、後
はもう一人の…祐樹だったか?あいつを転生後に捜せる能力をくれ
よ!」

神様「…何故、そんな能力を望む?」

大輔「え、そ、そんな別に良いじゃねえかよ、知ってるやつがい
ないより知ってる奴と群れる方が良いことだってあるだろ?」

神様「…そうか、まあ良いだろう。『王の財宝』とその人探しの能力
を授ける…が、探した後もずっと探し続けるのは感覚的に迷惑だろう
?探したのを開始してから終わるまでの1回限りにしておいてや
る。」

大輔「お、まじで?ありがてえ!じゃあ決まった事だしちやちやつ
と転生させてくれよ!」

神様「…ああ、では、転生させるぞ。」

「…こいつ、はぐれた場合のを考えずに言ったか、発言の途中で止めて
何かを考えていた、それにこの能力…介入することにならねば良いが
な。」

そう言った瞬間、大輔の足元に魔法陣が展開し、光りに包まれ始め
る。

大輔「目指すはハーレム!頑張るぜハハハ!」

神様「…新たな世界でも頑張れよ、それと『王の財宝』を望んだか
ら渡すのは宝物庫だけだ、中身が無いのは流石にどうかと思うから一
般的な武器はいれてある。」

大輔「は、ちよ、おい待て!?!天の鎖は!?!乖離剣とか本来の中!」

そう言っている途中、その場から消え去る。

神様「貴様が望んだのは『王の財宝』だろう?中身は別物だ、欲し
かったら英雄王の能力とでも言うんだったな。さて、ではもう一人を
呼ぶとするか。」

第1話 襲撃

どこかの町の公園、そこで子供たち3人は遊んでいた、一人は茶髪のツンツン頭、一人は栗毛色のショート、一人は黒髪のポニーテール。3人は仲良く遊び、時間は経っていき夕方となる…。

茶髪「あれ？もうカラスが鳴いてるー。」

栗毛「ほんとだ！カーカーって鳴いてるね。」

黒髪「もうそんな時間かー…今日はもう帰らないとお母さんに怒られちゃうね。」

茶髪「そうだね、じゃあまた明日あそぼうな！」

黒髪&栗毛「うん！」

そう言い、3人はそれぞれの家へと戻っていく。

視点は黒髪の男の子へ移り…自宅へと帰宅後の夜、父と共にベランダにて空を見る。

そして晩御飯を食べ、風呂に入り、家族と共に眠りへとつく…。

如何なる音も聞こえない夜、眠りについた黒髪の少年、近衛玲士は夢を見る…。

真つ黒な空間、そこに居るのは白と黒、交互に反転する赤い模様が入った服を着た綺麗な女の人。

その女性は少年へと語りかける。

女性「初めまして『あの人』の力を得た人…私は『あの人』の力に依りそう願いであり呪い…。」

玲士は声が出せぬまま、ただ女性の話を聞いていく。

女性「今まで、あなたは幸せに過ごしていた…それも代償を支払わずに…でも、それももう限界に近いわ…あなたは『あの人』ではない…この幸せと呪いは『あの人』の為に存在する物…。」

そう話している時、女性の足元から少しずつ消え始める。

女性「私が消えた瞬間、あなたは今までの幸運の代償が降りかかるわ…だけれど、あなたの様な幼い子を、死なせたくない…とても、とても苦しいと思うわ、どうして自分がと思う事もあるでしょう…でも、それでも…強く生きてほしいの、生きることを…諦めないで…い

つか、希望の光が、あなたを照らしてくれるはずだから…。」
「そう言い残し、女性の姿が完全に消える…。」

その瞬間、体全体が唐突な激痛に襲われ、跳び起きようとする…が、起きることができない。

玲士「うつ、あ…なに、これ…。」

目を覚ますとそこに映るのは一筋の光、星の空が映る隙間。

玲士少年は何が起きたかも理解出来ず、動かせる右手を隙間へと伸ばす。

玲士「父…さん、母…さん…どこに、行ったの…?」

そう言った瞬間、目を閉じ、意識を失う…。

しかし、意識を失う瞬間、誰かがその伸ばした右手を握った気がした…。

…再び目を覚ますと、彼はどこかかも知れぬベッドの上にいた。

左目を開けるが何かに遮られている様で黒しか見えない。

???「おお、気づいたようだな。」

その声を聞き、首をゆつくりと動かして向くとそこには一人の髭を生やした白髪の男が立っていた。

玲士「おじい、さん…誰…?」

???「俺か?俺は…そうだな、オールドとでも呼んでくれ。」

玲士「…オー、ルド…さん?」

オールド「そうだ、さて、今は休むと良い…。」

玲士「うん…。」

そう言っただけ目を閉じ、再度眠り始める…。

その後、再び目を覚ますと体は動かせぬまま、男の話を聞いた。

あの夜起きた事、自分の両親が消え去った事、そして瓦礫の中から助け出してくれたことを…。

しかし幼過ぎた、厳しすぎる現実を受け止めるには幼過ぎたのだ…。

玲士少年は泣き、怒り、わめき…数日間時間を置きながら発狂し続けた…。

何故自分の家だけが狙われたのか、何故自分だけ助かったのか、何故自分も一緒に死ねなかつたのか、何故、何故、何故何故何故と…。

日数が過ぎ…ある程度落ち着き始めた時、助けてくれた老人、オールドから一つの提案をされる。

オールド「…なあ少年、俺の息子になつてみないか…？」

たったそれだけの提案、しかし両親を失つた幼き心、寄り添える存在が必要な年代の彼にはとても暖かなものであり、彼はすぐにたった一言、小さな動きで返事をした。

玲土「うん…。」

それからは共に、生活をするようになった。

心の傷は癒えるまでの道は長く…オールドがどこへ行くにも必ず後ろをついて行った。

運命は回り廻る、分かれた運命はいずれ重なり合う…それが例え、衝突しあう運命であろうと…。

第2話 別れ

それから時が過ぎ、1年が過ぎたころから断片的に、ガラスの破片の如く、ごく短時間だが夢を見る。

夢に出た女性の面影を持つ少女と共にいる巨大な男に挑む赤い外套の男の姿を。

花の花弁の様な物で青い槍兵の投擲を防ぐ姿を。

幻影として現れ、誰かを鼓舞する為に挑発する姿を。

一人の少女の平和を願い、送り出す姿を。

燃え盛る街の中、誰かに抱えられて生きていることに感謝している男の姿を。

：そして、幾万もの死体の先にいる女性を殺した男の姿を。

そうして夢を見ていく6日間が過ぎた時、少年に一つの変化が訪れる。

唐突に体が高速で動けるようになり、すぐに筋肉痛に苛まれた。

玲士「：痛い。」

オールド「大丈夫か？玲士よ、いきなり倒れたから心配したぞ。」

玲士「：ごめん、でも、いきなり早くなった、これは、何？」

オールド「：そうだな、理解できないこともあるだろうが教えるでしょう、お前がいきなり早くなったのは恐らく神器と呼ばれる物だろう、名はそうだな…『正義の味方』オールドズ・フュイトとでもしよう。」

玲士「：神器？」

オールド「ああ、若くして発現したからか体が性能に追いついていないのだろう、治ったら体を鍛え始めるぞ。」

玲士「：うん。」

そう言つて、目を閉じる…。

その後は、夢を見る事も無く、起きれば体を鍛え、ある時は勉強に謹んだ。

体を鍛えるうちに、さらに新たな能力を発現していった。

対象を解析する力、物を複製する力、物を改造する力、対象に集中

を惹きつける能力。

：そして、世界を上書きし、展開する能力を。

しかし、その能力を発現した瞬間、再度自身の体に異変が生じる。体の中より銃が生えて串刺しになったのだ。

その後、すぐに治療を施されて事なきを得るが、展開する能力の使用は禁止される。

使いこなせていない身では危険だからだ。

そうして鍛え続けていくうちに安定していき、使いすぎると串刺しになるが展開の能力を使う事も出来るようになった。

しかし：別れの時もすぐ来てしまおう、13歳のある日、唐突にオールドが倒れたのだ。

ベッドに寝るオールドの傍に立ち、二人は話し合う。

玲士「オールド、大丈夫か？」

オールド「：いや、大丈夫じゃないな、もう限界の様だ。」

玲士「：そうか、だが、体に病気が巣食っているわけでもない、何故だ？」

オールド「そうだな、今まで黙っていたが：俺はこの世界の住人ではない。」

玲士「あの世の住人ということか？」

オールド「あー、まあそんな感じだ、あの時お前を助けたのは偶然ではなく、必然だった。」

玲士「なら、どうして両親は死んだんだ？」

オールド「たどり着くのが遅かった、という事だ、お前の両親も助けたかったが俺が向かった時には既に崩壊した後だった。」

玲士「そうか、なら犯人が誰かも知っているんだな？」

オールド「ああ、知っている：知っているが、知らないんだ。」

玲士「：どういうことだ？」

オールド「簡単な話だ、俺が知っている姿とは別の姿になっている、だから知っている知らないという事だ。」

玲士「なるほどな、俺を育ててくれたのは何故だ。」

オールド「お前の能力を知れば狙う奴がいる、だからそいつらから

身を守るために育てたからだ、俺はもうこの世界にいけないからな。」
そう言った瞬間、体が薄くなっていく。

玲士「オールド、体が透けてきているぞ。」

オールド「時間、だな、一人暮らしする術などは全てお前に叩き込んだ、後は傭兵を続けて暮らす事だ、危険な職だが、長生きすることを期待しているぞ、じゃあな。」

「そう言い終わると、完全に姿が消えさる。

玲士「ああ、あんたからは沢山の事を教わった、頑張ってみるさ。」
「そう言い残し、部屋を後にする…。」

第3話 傭兵稼業と出会い

別れから1年が過ぎた時、玲士は若くも有名な傭兵何でも屋となっていた。依頼に正当性があれば絶対に引き受け、必ずこなすルーキーとして注目を集めている。

世界にある傭兵組織から仲介されて、今日もまた彼へと依頼が来る。

仲介者『へーいお疲れさんよ！ゴースト！報酬は既に銀行に振り込んであるぜえく。』

玲士「ああ…で、お前がそんなにハイテンションって事は変な依頼でも来たのか？」

仲介者『応ともさ！今度のターゲットは魔法使いだつてよ！』『魔法使い』その単語を聞くがふざけているのかと唾然する。

玲士「…は？」

仲介者『ふざけているわけでもないんだわこれが！依頼者は2名、片方はその魔法使いに娘を辱められた親御さん、もう片方は存在を一般人に露呈させた事を罰したい自称魔法使いのお偉いさんからだ！』
玲士「…ふむ、だがその依頼をこなした後お前も危険じゃないのか？」

仲介者『問題ない問題ない！既に呪いの契約は済ませてあるからな！俺やお前を口封じに消そうとしたらそいつらの組織全部が消え去るからな！』

玲士「それを相手はよく受け入れたな。」

仲介者『まあな！だが依頼後に俺から記憶を消す、という条件付きだがなーちえく。』

玲士「なるほどな、まあ良い、親御さんの恨みは分かったから受けてやる。」

仲介者『オーケイ！じゃあいつも通り情報料を報酬から差し引いて情報を送るぜー。』

その言葉と共に端末へと写真が送られてくる。

玲士「…なんだこのふざけたやつらは。」

そこに映っているのは3人組の女、デブ、ノツポ、チビと個性的な面々だ。

仲介者『俺に聞かれても困るぜ！名前はドグ、マグ、ラグ、どれがどれだかは知らんがまあ問題ないだろう！』

玲土「おいおい：まあ良い、こいつ等を処分すれば良いんだな。」

仲介者『イエス！奴らが最近の行動をする予定の場所はこここの泉だそうだ、何をするのかは分からないがまあ次の犠牲者が出る前にやった方が良さだろうな！『正義の味方』！』

玲土「その呼び名じゃなくゴーストと呼べと言っているだろう。」

仲介者『ははは！ふざけたやつらだが強さは本物らしい、真正面から戦わないように気を付けろよ！』

その言葉と共に通信が切れる。

玲土「魔法使い：か、まあ良い、どんな相手だろうと殺す、それだけだ。」

そう言い、男はバイクに乗り、走り始める。

場所は森の前、樹が鬱蒼と生え、これ以上バイクでの移動が出来ないと分かりバイクを下りる。

玲土「：ここか、だが、なんだこの感覚は？何か変な気配がすると共にここに立ち入るなど脳に語りかけるような感覚があるな。」

そう言いながら、森の中へ足を進めていく。

玲土「しかし樹が邪魔過ぎるな、これでは射線が通らん。」

愚痴をこぼしながら歩いていくと、声が聞こえ始めてくる。

それは女の声で何か揉め事であることは即座にわかる。

玲土「：グググの3人組か？だが声の数は8近く、争っているから敵対しているのだろうか：『パキッ』しまった：。」

木の陰に隠れて近づいて行くが、声に気を取られすぎて足元にあった小枝を踏みつけてしまい、音が出る。

??「誰だ！隠れてないで出てきな！」

その声に小さく舌打ちをし、両手を上げて泉の広場へと出る。

そしてそこで目に映った光景、3人の女が4人の白い羽が生えた女

を人質にしているであろう姿とその反対側に人質と似て白い羽が複数枚生えている言葉通り絶世の美女が下着姿でいる光景だった。

一瞬だけだがその完璧な肉体に目を奪われるが即座に3人組の方へ目を移す。

デブ「あはは！男かい：男、よね？」

玲士「ああ、顔つきは女に見えるとよく言われるが男だ。」

その言葉を聞き、絶世の美女である女性を除き人質の女性たちは顔を青ざめ、「そんな」という言葉が聞こえてくる。

それに対し3人組の歓喜に極まった顔をしてこちらを見ている。

ノツポ「ふふ：ねえそのあなたサ？私たちのお願いを聞いてくれるサネ？」

玲士「：なんだ？」

ノツポ「そう警戒しなくても良いことサ、むしろお前にとってメリットしかない相談だからサ。」

その言葉を聞くと共に人質の女性たちが暴れ始める。

人質「や、やめなさい！それだけは！それだけ」

チビ「うるさいよ！」

人質「うぐ：。」

騒ぎ始めるが即座にチビが叩き黙らせる。

美女「ああ：やめてください。」

デブ「それはこつちが決める事だよ！こいつらが勝手に騒ぐのが悪いのよ！」

玲士「：俺に何をさせたい。」

ノツポ「ふふ：簡単な事サ、そこにいる女を狂い狂って性行為しか考えられない牝になるまで犯してほしいのサ！」

その発言を聞いた美女は驚き、顔を俯かせる。

玲士「：少し距離が離れすぎているな、近づくために乗る振りをするか。」

「ほっ？」

ノツポ「お前にとってメリットしかないだろう？つと、お前らは騒ぐんじゃないよ？騒いだら：刺すサネ？」

そう言い、首にナイフを突き立てる。

美女「やめてください…彼に、彼に犯されるので皆さんを解放してください…。」

ノツポ「ふ、ふふ…！ええ良いでしょう、ガブリエル、お前が狂った牝豚になったら解放するのは約束するサ！これでも約束だけは絶対に守るのが取り柄だからサ！」

ガブリエル、そう呼ばれた女性は玲士の方へ振り向き。

ガブリエル「おねがい、します…私を、犯してください…。」
そう、震え声で告げる。

玲士「…ああ、良いだろう。」

そう言い、玲士はガブリエルへと近づく。

人質の女性たちが小声でやめてくれと呟く中、玲士はガブリエルの目の前にたどり着く。

玲士「まだ遠いな、もう少しか」

「…ふむ、なあ、美人な背の高い女性。」

ノツポ「あら？美人だなんてお世辞でもうれしいサ、どうしたサネ？」

玲士「そいつらを更に絶望させるために更に近い場所で性行した方が良いと思うがどうだろうか？拘束ぐらい容易いのだろうか？」

チビ「あつはつは！良いね！良い提案だ！」

デブ「確かに遠めで見るのもつまらないね！近くで天界一の美女がイキ狂うのを見るのも良いね！」

ノツポ「ふふ、その提案に乗るサネ！ドグ、ナイフはあんたに任せるサ、ラグ、あなたは私と一緒に拘束魔法を強度を上げるサネ。」

そう言うデブにナイフを渡し、チビがノツポの傍に行つて手を人質にかざす。

玲士「ふつ、感謝する、ガブリエルと言ったな、行くぞ。」

「デブがドグ、チビがラグ、ノツポがマグか…。」

ガブリエル「…はい。」

悲しそうな目をするガブリエルと共に、7人の前へと歩み寄る。
人質は怨嗟の涙目で玲士を睨み、そして二人は互いに向き合う。

ノツポ「ふふ！はははは！さあ、始めていいサ！」

玲士「ああ、始めるとしようか。」

そう言つて腰へと手を伸ばし。

玲士「時のある間に薔薇を摘め…真名解放！ファンタズム・パニッシュメント 神秘轢断！」

その言葉と共に玲士の姿が消える、瞬間。

ラグ&マグ&ドグ「へ？が、ぎやああああああああ！」

泉に3人組の絶叫が響く。

ガブリエル&人質「…えっ？」

特徴的な3人組は仰向けに倒れ、既に息絶えている。

分かるのであれば腕に刺し傷がある程度で死ぬとは思えない傷である…。

玲士「依頼完了…さて、帰るか。」

そう言い、森の方へ体を向けた瞬間、声をかけられる。

ガブリエル「ま、待ってくださいー！」

焦りもあるがふんわりとした発言、その声を聞き、玲士は歩を止めて振りむく。

玲士「どうした？」

ガブリエル「えっと…どうして助けてくれたのですか…？」

玲士「…その3人を殺すことが俺の目的だったからだ、お前らを助けたという事実はその副産物にしかすぎん…それと。」

ガブリエル「はい？」

玲士「…せめて服を着てから話しかける、さつきから下着姿で目やり処に困る。」

そう、遭遇してから極上の女体が、どんな行動であろうと揺れる胸に目のやり場に困っていたのである。

ガブリエル「あ、あら？すみません。」

人質だった女性「ガブリエル様！服！服！」

そう言つて玲士は後ろを向き、ガブリエルは急いで服を着始める。

ガブリエル「着替え終わりました。」

その声を聞き、再度向き直る。

玲士「その様だな…で、それ以外に何か用があるのか？」

ガブリエル「はい、お礼を言ってますんでしたので。皆さんを助けてくれてありがとうございます。」

そう言い、丁寧にお辞儀をする。

玲士「…副産物と言っただろう。」

ガブリエル「それでもです、もし、私が出ることによろしければ何かお礼がしたいのですが駄目でしょうか？」

女性達「「ガ、ガブリエル様!?!」」

玲士「…そうか、なら話を聞いていてくれないか？」

ガブリエル「はい？構いませんが…。」

玲士「ああ、では…。」

玲士はガブリエルの前まで行き…両手を頭の両端に当てて回転させ始める。

ガブリエル「あう！痛い、痛いです！」

女性「き、貴様ガブリエル様に何をする！」

玲士「黙つてろ！貴様はバカか！俺は貴様らがなんなのかは知らん！だがお前はそいつらの上司なんだろうが！あんな風に言いなりになつて馬鹿なのか！無理をしても、犠牲が出ても助けやがれ！」

ガブリエル「で、ですがわ、私が犠牲になれば」

玲士「お前が犠牲になつて牝に成り下がればそいつらは自分らのせいでそうなつてしまったと後悔するだろうが！ああいう悪人共は約束を果たしたとしても正しい意味で解放するとは限らねえんだよ！殺して生から解放したなどと抜かされてしまいだ！」

ガブリエル「う、うう…。」

玲士「立場を考えろ！遺された者がどう思うかを考えろ！全く…。」
そう言つて頭から手を放す。

玲士「俺も、お前も、そいつらも世界に一人しか存在しない、どんな存在であろうと後悔は存在する、だから、永遠に引きずり続けるよ
うな後悔だけはさせるな…。」

ガブリエル「うう、はい…。」

玲士「ふん、じゃあな。」

そう言つて背を向けて歩き始める。

ガブリエル「あ、あの、あなたの名前は…？」

その声を聞き、一度立ち止まり。

玲士「俺の名前か…そうだな、近衛、玲士だ。」

そう告げて立ち去っていく。

ガブリエル「コノエ…レイジさん…。」

女性「ガブリエル様、あの女3人組の遺体は処理を終えましたが先ほどの狼藉者の処分はどうしますか？」

ガブリエル「彼は何の御咎め無しで構いません、先ほどのものも、私たちの事を考えて叱ってくれたのですから。」

女性「了解しました！」

そう言い、玲士が去った方向にもう一度一礼し、ガブリエルは女性たちを連れてその場を去る…。

第4話 我儘娘

泉での一件から数か月後…玲士はいつもの様に傭兵稼業をこなす日常を送っていた。

違う事があるとすればあの日からフードを被り、さらにマスクを付けて顔を隠して仕事をするようになった事だ。

仲介者『今日の仕事も順調に終わったようだな、お疲れさん、ゴースト。』

玲士「ああ、しかし今回の依頼は傭兵というか何でも屋な仕事だったな。」

仲介者『ははは、そうだな。良質な毛皮が欲しいって市場には無かったのかね。』

玲士「それで、何か依頼は来ているか？」

仲介者『ん〜1件だけ来ているが人探しだな。』

玲士「人探しか、誘拐でもされたのか？」

仲介者『うんにや、文字通り探してほしいようだ。姿は白い肌で女性っぽい顔立ちの黒髪、上着の下へ続くほど長いそうだ、服は全体的に黒くて名前は確か…コノエレイジって名前か、日本人みたいな名前だな。』

その名を聞き、玲士は驚きながら目を細める。

玲士「…そうか、他に特徴は？」

【依頼してきたのは…あいつか。】

仲介者『ナイフで戦ってるという事らしい、それ以外は本人も分からないそうだ。依頼人の名はジブリアル…って、そういうばお前さんの容姿も…』

玲士「…お前の想像通りだ。」

仲介者『…そうか、それで、依頼人には伝えるかい？』

玲士「…伝えなくて良い、俺の目的の為に女にかまけている暇は無いからな。」

仲介者『…了解、じゃあ他を当たってくれて伝えておくとするよ。それと…安心してくれ、お前さんの情報だけは『絶対』に他人には売

らん。』

その言葉に耳鳴りが聞こえる。

玲士「…お前…すまん。」

仲介者『気にしなさんな、お前さんは俺にとっても大切な相方だしな。』

玲士「ふっ、じゃあ通信を切るぞ?」

仲介者『ああ、また依頼が来た時に連絡を入れるぜ。』

そう言い終わると同時に通信を切る。

玲士「…俺の名を知っているのは仲介者にあいつらとその知り合いのみだろう…だが、今に思えば何故俺はあの名を使った…? 偽名でも使えばよかつたのにな…。」

そう思案しながら森にある切り株に腰掛けていると唐突に誰から声を掛けられる。

???「貴方がゴーストね? 見つけたわ。」

女の声、その声を聞いても反応せず無視して座り続ける。

???「ちよつと! 無視しないでよ!」

その声を聞くと上から一人の女が降りてくる、その背中には蝙蝠の羽が生えている。

玲士「俺の事か…誰だ?」

???「やつと反応したわね? 私はリアス・グレモリー、あなたの主になる者よ。単刀直入に言うわ、私の眷属になりなさい。」

玲士「頭が狂っているな、まるで自分が全てを思いどおりに出来ると思っている話し方だ、だがすまん、あいにく知り合いに医者はいない。」

リアス「私は病気じゃないわよ! 生意気な人間ね…まあ良いわ、眷属になつてもらうわよ。」

玲士「断る、俺は誰かの下に付き続ける気は無い。ましてやお前の様な常識知らずの下に付くことなど絶対にな。」

リアス「なんですって!?! 人間の癖に生意気ね! 一度殺してから眷属にして賤けてあげるわ!」

そう言うと同時に飛び上がり、赤黒い魔力を玲士へ向けて放つ。

それに対し玲士は前転して回避し、振り向きながらハンドガンタイプの双銃剣を投影し、構える。

それからは敵の動きを見続けるが、一つの結論に至る。

玲士「この女、箱入り娘か、戦闘のせの字すらも知らないレベルの雑魚…だが飛び続けられると面倒だな、叩き落してから抑えつけて…殺す。」

リアス「この…！当たりなさいよ！」

次々と赤黒い魔力弾を飛ばし続けるが当たらず、樹に命中して粉碎していく。

玲士「I a m t h e b o n e o f m y s w o r d : : 。

そう言つて白い刃がついた銃剣を弾丸へと改造し、装填する。

木々が粉碎された時に発生した煙に身を隠し、新たにナイフを投影し、鎖へと改造して粉碎されて残されていた樹へと刺す。

リアス「どこに逃げても無駄よ！早く出てきなさい！」

玲士「なら出てきてやる。」

そう言つて飛び出し、リアスの直下を駆け抜ける。

リアス「下を走り抜けたからって逃げられるとは思わないこ」

玲士「馬鹿が、貴様はその目で何を見ている。」

そう言い、右手につないでいた鎖を背負い投げの要領で肩にひっかけ、思いつきり引つ張る。

瞬間、繋がれた木の残骸が引つ張られ、リアスへと向かい飛んでいき。

リアス「何を言つてうぐあっ!？」

リアスは気づくことなく背中へと木が命中し地面へと墜落する。

リアス「あの男…ッ!？」

すぐに目を覚まし、起き上がろうとした瞬間。

玲士「チエツクメイトだ。」

リアス「がはっ!」

腹部を玲士が踏みつけ抑え込み、顔に向けて銃を構える。

リアス「わ、私にこんな事をしてどうなるか分かっているの!」

玲士「知らん、貴様が何者であるかも、殺したらどうなるかも知ら

んし知ろうとも思わん。殺そうとしたなら自身が殺されても文句など言えん…まあ、死者は喋れんがな。」

そう言い、引き金を引き始める。

それに対しリアス・グレモリーは涙を浮かべ、泣き始める。

リアス「い、嫌…死にたくない！私はまだ『王』になっただけなのに！まだ何もしていないのに…！」

玲士「…貴様、まさかまだ未成年か？」

リアス「うう…そうよ、私はまだ15よ…！」

玲士「…ちっ。」

そう舌打ちをし、足をどけてどこかへ向けて歩き始める。

リアス「…えっ？」

玲士「何をするのも貴様の自由だ、だが、常識を知れ。俺は貴様の眷属にはならん、次襲つて来たなら…今度こそ殺す。」

そう言つてその場を立ち去る。

玲士「…ちっ、むかつく女だ、親もどんな教育をしてやがる…。」

そう思いながら足を進めていると、唐突に来た方向より爆発の音が聞こえる。

玲士「あの女が怒りに身を任せて破壊活動でもしてるのか…？いや、男の声が聞こえるだど？こんな所に女も男も本来なら来るわけがない…。ちっ。」

思案した後、足を翻して先ほどの場所へと走り始める。

走り続けるとリアスと名乗った女と見知らぬ飛んでいる男が相對し、男がリアスに向けて大型の魔力弾を向けているのが分かる。

玲士「…殺されかけているとはな…見逃した傍から殺されては癪だが…間に合はんか。」

「時のある間に薔薇を摘め！」

そう唱えて高速移動をし、リアスを蹴り飛ばす。

リアス「うあっ！」

玲士「ごぶっ…。」

しかし…回避までには移行出来ず、リアスを狙った魔力弾の直撃を喰らい、腹部の右腹半分が消し飛ぶ。

男「…なに？ぐっ！」

唐突の出来事に、その場にいた二人は唾然とし、その隙を逃さず、玲士は黒い銃を男に向けて1発だけ撃ち込む。

しかし腕で防ぎ、貫通して胴体への命中には至っていない。

男「ふん、そんな玩具で俺を殺せるとは思うな、その傷は既に致命傷だ、そこで死んでいろ、下等生物が。」

玲士「死ぬのは…貴様、だ…貴様が、外道なのは気配で分かる…惨たらしく、絶命しろ…！無限の^{アンリミテッド・ロストワークス}■製！」

男「は？貴様、何を『ブチッ』ガハッ…体の中から剣が次々と…ぐ、が、あああああ！」

男が喋っている最中、体より剣が生え始め、次々と生えていき男が爆散する。

瞬間、別の風景に切り替わるが即座に元の風景へと戻る。

玲士「…ちっ。」

舌打ちをし、そのまま仰向けに倒れ、玲士は息を引き取る。

リアス「ちよ、ちよつと!?ゴースト!？」

倒れるのを見たリアスは一連の出来事に呆気にと取られていたがすぐに正気に戻り、玲士の元へ駆け寄って行く…。

それから少し経った後…玲士は再び目を覚ます。

玲士「…ここは、あの森か、生きているだと…?？」

リアス「起きたみたいね。」

その声を聞き、声が出た方へ振り向くとリアスが切り株に腰掛けている。

玲士「…何故俺は生きている？」

リアス「簡単な話よ、あなたを私の眷属として、悪魔に転生させたからよ。」

玲士「勝手に転生させたのか。」

リアス「た、確かに勝手に転生させたけど既にあなたが死んじゃってたから…。」

玲士「…はあ、生き返らせた、という点に関しては感謝する。俺は

まだやるべきことを果たせていないからな…。」

リアス「果たせていない、事…?」

玲士「気にするな、だが眷属になったのは認めんがな、俺は一人で行動する。」

リアス「え、ちよ、ちよつと待って、眷属は『王』の傍にいるもの」
玲士「俺の知った事ではない、こっちの許可を取らずに眷属にしたくせに偉そうにするな。感謝はする、が貴様の言う事を聞く気など無い。」

リアス「うう…お、お願い…お兄様に紹介するからついてきてほしいのよ…初めての眷属が言う事を聞かないではぐれ認定されたらお兄様にまで迷惑がいつてしまうの…。」

玲士「…なら、その兄に俺が独自に動く権利を貰えば良いという事だな?」

リアス「え、ええそうよ、そうすればあなたも傭兵としての仕事を出来るし自由に歩けるわ。」

玲士「分かった、では行くとしよう。」

そう言つてどこかへ向かつて歩き始める。

リアス「ちよ、ちよつと!貴方どこにお兄様いるのかわかつてるの!?お願いだからこういう時は私についてきて!」

玲士「…それもそうだな、死んで蘇ったという事実はまだ気が動転していたようだ。」

リアス「え、ええ…じゃあ一旦駅まで行くとしましょう、冥界へ向かうにはそこから電車に乗らないといけないからね。」

電車に乗って冥界へ行く、その事実玲士は啞然とする。

玲士「冥界というのが驚いたがそこへは電車で行くのか…。」

リアス「ええ、魔方陣でも移動できるけど眷属と一緒にそれをすると色々とうるさいのよ。」

玲士「そうか…。」

リアス「じゃあ行くわよ、動かないで頂戴。」

そう言い、魔方陣を展開し二人はその場より消える。

その後、冥界で魔王とひと悶着あった後に許可を取ったのは魔王が
シスコン故当然の出来事だったそうなの…。

第1章 旧校舎のディアボロス 第5話 堕天使騒動その1

何処かの薄暗い森の中……玲士が残された蝙蝠の翼を見ながら一人
呟く。

玲士「…依頼完了、力に溺れ、はぐれ悪魔となった男ホーラム、人間界に混乱をもたらそうとしたことを後悔するが良い。」

そう言つて羽を処分し、森から出るために歩き始める。

玲士「はぐれ悪魔バイサーを処刑してからすぐにこの始末、全く悪魔共は何をしているんだ…む？グレモリーから連絡か…。」

連絡を確認し、耳に手を当て、通信を開始する。

玲士「どうした、魔王から何か呼び出しでもあったか？」

リアス『いや、そうじゃないわよ、ちよつと管理地に堕天使が好き勝手しているから手伝つてほしいのだけれど構わないかしら。』

玲士「…はあ、何故処分しない、貴様が管理していることぐらい知つて侵犯してきているのだろう、まさかとは思うが…犠牲者が出ていないんじゃないだろうな？」

リアス『うっ…え、ええ…そうよ、で、でも勝手に殺したら。』

その言葉を聞き、先ほどよりも長くため息を吐く。

玲士「はああああああ…話は終わり、後で説教だ、プライドだけで上に報告しようとするらしい無能め、今からそっちへ向かう。」

リアス『うう…分かったわ、あまり乗り気じゃないけれど…待ってるわよ。』

玲士「ああ。」

そう言つて通信を切り、魔方陣を展開する。

玲士「…全く、いつまで経つても自覚が足りぬやつだ。」

そう言いながら転移し、その場を後にする。

場所は駒王学園のオカ研部室、リアス・グレモリーが顔に手を当てながらため息をついている。

一誠「あ、あの部長…大丈夫ですか…?」

リアス「ええ、大丈夫よ…ただ、後でうるさく言われるのが確定しちゃって…ね。」

??「一体誰なんすか?部長がそんなに嫌そうにする奴って。」

リアス「私の初めての眷属よ…ええ、眷属のはずよ…。」

木場「あ、あはは…彼は基本部長に厳しいからね。」

一誠&??「ええ…。」

その反応に二人が困っている時、部屋に魔法陣が展開され、一人の男が現れる。

??「っ!?侵入者!?堕天使の仲間か!死ねえ!」

【多分その眷属だろうが事故に見せて殺ししちまえば…!】

リアス「っ!?待ちなさい慎士!彼は仲」

そう言うが大量の武器が男へと向かって射出されるが…。

玲土「チツ、熾^{ロ!}天覆^アう七^イつの円環^ス!」

その言葉と共に7枚の花弁の様な壁が展開され、武器たちを防いでいく。

防いでいくうちに1枚、また1枚と割れていく。

玲土「…で、俺はいつまで防げばいいんだ?。」

その花弁の盾を見惚れていたリアスはすぐさま制止に入る。

リアス「っ!そ、そうだったわ、やめなさい!慎士!」

慎二「…わ、分かった!」

【チイツ!殺し損ねた!しかもロー・アイアスだと!?こいつ…無限の剣製を特典に選んだ転生者か!あの時殺し損ねてただと!!】

そう言い、名を呼ばれた男は武器の射出を停止させる。

玲土「…明確な殺意を持って攻撃したことは追求せん、グレモリー、要件はなんだ。」

リアス「え、ええ…堕天使が勝手な事をしているからこれ以上の勝手を許さないように街で見張ってほしいのよ。」

玲土「了解した…しかし、貴様はこの地の管理者の仕事を任されておきながら何だこの体たらくは。」

リアス「うぐ…。」

そう言い、リアスへの説教が始まり、残された眷属は各々話を始める。

朱乃「あらあら、始まってしまいましたわ。」

一誠「え、まだ何も話されてはいないっすよね？」

小猫「彼の使い魔はこの街全部を見張っていますので何が起きたかは彼が戻ってきたときに即座に把握できるのです。」

一誠「ま、まじかよ…。」

慎二「だけどよお？主に説教だなんて盾突いて反逆してるようなもんじゃねえのか？」

木場「それは違うよ、部長の家族が説教するのを認めているし、それに：彼は部長を主とは認めてすらいないからね。」

一誠「認めてすらって、どういう事なんだ？」

その言葉を聞き、説教を終了したため息交じりに一誠の方へ振り向く
玲土「：はあ、まったく、俺はその女にこっちの了承なく眷属に転生させられた、分かったか？」

「…こいつ、あいつに似ているな…。」

一誠「あ、ああそうだったのか…って、了承なく？」

玲土「そうだ、我儘な女でいきなり現れたかと思えば私の眷属になりなさい、これは決定事項みたいなことを言っただけだからふざけるなと反論すれば逆上して殺そうとしてくる始末、拳負けて殺されそうになると死にたくない泣き喚く。」

リアス「ちよ、ちよつと！喚いてはいないわよ！」

眷属、s 【泣きはしたんですね…。】

玲土「まあ、そんな感じのごたごたの後に色々あつてこいつの眷属にさせられたんだ、俺の了承なく、な。」

リアス「そ、そんなに何度も言わなくても良いじゃない…。」

一誠「う、うわあ…。」

玲土「さて、新入りがいるようだから改めて自己紹介をさせてもらう。俺はゴースト、傭兵をしているが、勝手にこいつの眷属にさせられて駒の使用数は『兵士』の変異の駒一本だとか言っている、眷属になつたつもりなど無いがな。」

慎二「ちよつと待て！お前が変異の駒使用だ?!」

リアス「ええ、そうだけどそんなに驚く事かしら？」

慎二「そりや俺が眷属になる時に使ったのが変異の駒じゃないんですか!」

リアス「あなたは何も変哲もない兵士の駒一本だけよ？」

慎二「そ、そんな…。」

小猫「…部長、そもそも変異の駒について彼に説明したのですか？」

リアス「ええ、どんな駒があるのか聞かれてそれで教えたわ。」

一誠「どうか部長、こいつ呼びわりされているんですが反応しないんですね…。」

リアス「もう、慣れたわ…さて、慎士、一誠あなたたちも自己紹介しなさい。」

慎二「へーい、鎌瀬慎士だ、俺の神器は王の財宝、さつきみたいなお攻撃を得意とするぜ。」

一誠「うつつ！俺は兵藤一誠っていうんだ！神器は龍の手つてやつで身体能力を2倍にするらしい！夢は上級悪魔になってハーレム王になる事だ!。」

玲士「そうか、俺の神器は『正義の味方』だ、複製したり高速移動したりと色々出来る神滅具だ。ロンギヌス」

【本当に、一誠だったか…だが、まだ顔を見せるわけにはいかないな…。】

一誠「神滅具?じゃあ俺達の神器と違うのか?」

玲士「ああ、神器の中でも神すら滅ぼせる事が出来ると言われていて、異なる能力を二つ以上持っている特別な14種の神器らしい、さらに所有者が死なぬ限り同じ能力を持つ神器は存在しないそうだ。」

木場「僕も彼と似た神器で魔剣創造というのを持っているんだけどどこっちは魔剣を作るだけ、だからね。」

リアス「そして彼の場合はさつき言った通り『作成』『内包』の二つに加え『改造』や『展開』、『高速移動』に『敵意集中』などがあるわ…と言っても『展開』とかがどういう意味なのかは私も知らないのだ

けれどね…。」

一誠「す…すげー…理解しきれなかったが凄いつてのはよく分かったぜ…。」

玲士「まあな、敵意集中以外に関してはグレモリー、一度だけお前に見せたことがあるのだがな。」

リアス「え、私見せてもらったことないわよ？」

玲士「はあ…まあ、そういうならそれで良いだろう、さて、俺は見回りに出かけてくる。」

リアス「あ、待ちなさい、聞きたいことがあるわ。」

玲士「む、どうした？」

リアス「大公より依頼が来たのだけれどはぐれ悪魔バイサーって知っているかしら？」

玲士「ああ、あの女の悪魔か、あいつは5日前に既に処刑済みだ、一般人を喰おうとしたからな。」

一誠「え、しょ、処刑って…殺したのか…？」

玲士「ああ、因果応報だ、既に別の街で何人か食い殺しているらしいからな。」

リアス「そう…でも、なんで知らせてくれなかったのよ…。」

玲士「奴が侵入したのは一週間前だ、それほど時間があつたというのに貴様はその痕跡すら見つけられずにいたから聞かれなければそれで良いと思っただけだ、現にこの街の一般人に被害も出てないからな。」

リアス「うう…まあ分かったわ…じゃあ敵の見張りはお願いね…。」

玲士「任せろ、ではな。」

そう言い、玲士は転移を使い部屋を後にする。

一誠「…な、なんかすごい人でしたね。」

小猫「…上に対しても臆さずに自身の言いたいことを言い、さらに間違っている事ははっきりと告げる方ですからね。」

慎二「ちっ、気に食わねえ…一番最初に眷属になったからって自分勝手に言いやがって、あいつを処刑した方が部長に良いと俺は思いますけどね。」

小猫「：明らかに明確な敵意を感じます、なんでそんなにあの人に敵意を持つんですか：？」

慎二「だつて部長にあんな言い方するんだぜ？敵意持たない方がおかしいつての。」

一誠「確かにあんな言い方するのはどうかと思うけど：部長の為に言っているつてのは何となく分かるから敵意を持ってないんだよなあ：。」

木場「口は悪いけれど裏を返せば足りない所を指摘しているからね。」

リアス「私も頑張っているんだけどね：まあ、彼は昔よりは態度が軟化している：はずよ。」

朱乃「彼は彼なりに優しいですもの、見捨てないで指摘しようとするあたりね。」

慎二「な、なんだよ：みんなしてあいつを擁護して：。」

小猫「：あなたが一方的に敵意を持つてるからそう思ってるだけです。」

一誠「そういえば、ゴーストさんはなんで室内でも仮面をつけてフードを被っているんですか？」

リアス「傭兵として顔バレをしないようにするためと：そうね、こつちを完全に信頼していいないということとで私やみんなにも顔を見せないのよ。眷属にする時からこれまで一度も：ね。」

慎二「：眷属にする際に顔を見たんじゃないんですか？」

リアス「なんとなく直感で悟つたのよ、顔を見たら転生した後には消されるつて：ふう、それじゃあ私たちもいったん解散しましょう。」

そう言った後、オカ研部員たちはそれぞれの帰路へとつく：。

第6話 墮天使騒動その2

リアス達と別れた後…玲士は一人、一誠が殺された公園へと来ていた。

玲士「…ここ、か。」

「一誠が殺された理由はあの籠手を持っていたからか…ほんと、墮天使に悪魔は屑しかないな。」

使い魔『ナアーオ。』

一人、物思いにふけている最中、彼の使い魔が影より報告をする。

玲士「…そうか、引き続き奴らの見張りをしてくれ。」

「今回は墮天使共は教会だが…あいつがこっちに向かってきているか。」

使い魔『にや。』

その報告を聞き、玲士は干将莫邪を投影し、銃へと改造する。

そうして待っていると微妙かに足音が聞こえてきて…。

白髪「ギャハハハ！間抜けな悪魔は首チョン『タタタン！』つてうおああ!？」

飛び跳ねながら玲士に斬りかかろうとするが銃口が既に向けられており、3発の弾丸を撃ち込まれる。

玲士「…咄嗟に銃と剣で防いだか、流石は問題行動を起こしながらも数多の悪魔を葬ってきた男だな、フリード。」

フリード、そう呼ばれた男は一回転して着地しながら玲士を見据える。

フリード「ちいつ…クソ悪魔の気配がすると思っできてみればまさかてめえだったとはな…ゴーストさんよお。」

玲士「そうだな、元気に悪魔を殺そうとしている様で何よりだ。」

フリード「けっ、うっせえよ！くそ、お前相手じゃ分が悪いつてレベルじゃねえぞ…。」

玲士「ふっ、逃げるのなら逃げれば良い、今回はお前らの監視だ、今日以降この街で好き勝手しようとするれば迎撃する、しないなら見るだけにしかすぎん。」

フリード「チイツ！覚えてやがれ！」

そう言い遣し、フリードは高速でその場を走り去って行く。

玲士「…まったく、あいつが今回の件に関わってるとはな、今ので引いてくれれば良いんだが。」

???「見いちまったぜこの裏切り者があああああ！」

唐突に聞こえたその言葉と共に無数の武器が玲士へ向かってくる。

しかし、最低限の動きを以てその武器達を回避していき、解析する。

玲士「…裏切り者か、どういう理由で裏切り者なのか説明を求めないとな？鎌瀬。」

慎士「そつちで呼ぶんじゃねえ！わぎわぎ敵が出てきたのに殺さずに逃がしやがって！完ツ全に裏切りじゃねえか屑野郎が！」

玲士「はあ…おまえは依頼の内容すら聞き取れないのか？グレモリーの依頼の内容は『これ以上の勝手を許さないように街で見張ってほしい』だ。」

慎士「うるせえ！てめえはやっぱり死んで当然だ！死にやがれくそやろうが！」

玲士「はあ、これ以上の対話は無駄か、貴様が仲間と思わんなら手加減は少しで良いな。」

そう言つて慎士へと走り出し、それに対し慎士は射出を以て迎撃する。

しかし、武器に当たることとはなく両者の距離は詰まってい行き。

玲士「命中精度すら悪い神器だな、眠っておけ。」

慎士「な、ちきしよ『メシヤツ』う、が…。」

顔面へと拳がクリーンヒットし、慎士は仰向けに倒れ気絶する。

玲士「さて、グレモリーに連絡でもするか…。」

そう言つて慎士を簞巻きにし、引きずつてオカ研部室へと向かい始める。

リアス『私よ、どうかしたのかしら？ゴースト。』

玲士「鎌瀬の奴が俺を裏切り者と称して殺そうとしてきた、次の夕方に来た事を報告するからオカ研部室で待ってる。」

リアス『ちよ、ちよっと待って!？慎士があなたを殺そうとしたで

すって!？」

玲士「ああ、鎌瀬はオカ研部室に簀巻きにしておく、朝は先にオカ研部室に行つて拘束を解いてやれ。じゃあな。」

リアス『待っ』

リアスの言葉を聞ききることなく、通信を切る。

玲士「…顔を合わせた時からこいつは俺を明確に殺そうとしてきた、だが、それを追求しようにもコイツの神器とグレモリーが邪魔だな…。まあ良い、いつか判明するだろう。」

そう言い、玲士は夜の街を引きずりながら歩いていく…。

時は過ぎ、次の夕方。オカ研部室には2名を除き眷属達が集まっている。

慎士「そいつは裏切り者だ!とつとと処刑した方が良い!殺されるぞ!」

一人、そうわめき散らしながら玲士を指さす。

リアス「…はあ、朝からこの調子なのよ。ゴースト、昨日何があったのかしら?」

慎士「話を聞く必要なんざねえ!早く殺『ドゴオ』ごぶう!」

小猫「…黙っていてください。」

そう喋っている最中、小猫が腹部に一発、拳を入れ、強制的に黙らせる。

玲士「はあ、うるさい奴が黙ったから簡単に説明をするぞ。昨日、人間だった兵藤が殺された公園を見に行った際にフリードが強襲してきた。」

木場「確か一昨日、一誠君が遭遇したはぐれ悪魔祓いだね?それでどうしたんだい?」

玲士「奴とは互いに噂だけは耳にしている様でな、俺がゴーストだとすぐに理解して戦意が収まったから警告して見逃した。」

朱乃「あらあら、『処刑』はしなかったのかしら?」

玲士「俺がグレモリーから依頼された内容は奴等の『見張り』だ、見張りの対象を殺す、というのは依頼内容に矛盾しているだろう?」

リアス「まあ、そうね…でもそれがなぜゴーストが裏切り者ってことなのかしら？」

玲士「『敵を見逃した』から裏切り者とも判断したんだろう？」

木場「それは…確かに部長は見張りを依頼しただけだから裏切りじゃないね。」

玲士「そういう事だ。グレモリー、こつちとしても仕事の邪魔をされたら迷惑だ、そいつが俺を殺そうとしたら…殺させてもらう。」

慎士「なっ!？」

リアス「ま、待つて!?!彼にあなたの仕事の邪魔をしない様に言えば良いだけじゃないかしら!？」

玲士「…そいつは一度ならず二度までも俺を殺そうとした、それに俺の使い魔はそいつが俺を尾行していることも把握している。行動を含め信用出来ないのは当たり前だ。」

リアス「…で、でも…。」

玲士「それを決めるのはお前だ、警告はしたぞ?次狙ってきたら…そいつは殺す。」

そう言い残し、玲士は部屋を後にする。

朱乃「あらあら…どうするのですか?リアス。」

リアス「う、うーん…。」

慎士「部長、俺は部長のためを思って…。」

小猫「…なら、ゴーストさんの邪魔をしない事です、それが部長の為になります。」

木場「彼は明言したことはしっかりとするからね、次狙えば確実に…殺されるよ?」

慎士「俺が奴より弱いっていうのかよ!」

朱乃「ええ。」 木場「うん。」

小猫「…不意打ちしてもなお手加減されて負けておきながらよくそんな言葉が出ますね。」

慎士「即答かよ!くそ!部長も俺があんな奴に負けるっていうんすか!?!」

リアス「…そうね、絶対に負けるわ。もうあなたは警戒されてるか

ら不意打ちもさせてもらえずに攻撃したら即座に殺しにかかってくるでしょうね…。」

慎士「そんな…。」

リアス「お願いだから彼を攻撃しないで、あなたを失いたくないのよ…。」

慎士「う、ぐ…分かりました、あいつには攻撃しないようにします…。」

【殺す、絶対殺してやる…！あんの屑絶対について、強くなつて誰も助けが無い場所で殺してやる…。】

その後、慎士は一人部屋に残り、ゆがんだ顔で呪詛を履き続ける…。

第7話 墮天使騒動その3

再度、リアス等と別れた玲士は教会がある公園の全範囲が見られるビルの屋上へと来ていた。

玲士「…で、今は別の依頼を受けているがどうした？」

仲介者『多分だがそつちが今受けてる依頼と同じ町での依頼だから掛け持ちするのはどうかかなと思ってな、内容は聞かない？』

玲士「ふむ…まあ、内容だけでも聞こう。」

仲介者『おつけい！今回の依頼は墮天使からだな、名はシャムハザイで依頼内容は墮天使一人の連れ戻しだ。』

玲士「ふむ、対象はどんな奴だ。」

仲介者『名は…ミッテルトっていうやつだな、墮天使としてはまだ若いが事務仕事の出来が良かったから死なせるには惜しいそうだな。容姿は金髪の少女、何やらフリフリとした黒と白の服を着ているらしい、確かゴスロリとか言う奴だな。』

玲士「…ゴスロリか、よく分からんが金髪で白と黒のフリフリした服を着た女だな？」

仲介者『そういうことだ、今受けてる依頼と被ってるか？』

玲士「いや、被っていない、今受けてるのは監視だからな、タイミングが良かった感じだ。」

仲介者『おおそうかそうか！良かったぜ、じゃあ依頼については了承したって事を伝えておくぜ！』

玲士「ああ、頼むぞ。」

仲介者『そういうえばゴースト、お前さん、悪魔陣営になったのに墮天使から受けても良いのか？』

玲士「悪魔の奴が何を言おうと知った事ではない、俺は『人間』で『傭兵』なんだからな。」

仲介者『ははは、そうかそうか、まあ、お前さんのお陰で俺も報酬ウハウハだからな、お前さんの担当でほんと良かったぜ。』

玲士「それはこっちの台詞だ、お前の情報にはいつも助けられる。」

仲介者『俺は仲介してるだけさ。さて…じゃあ頑張れよ、ゴースト！つと、その金髪の子にはこの紙を渡してくれって事らしい、通信が切れると同時にそっちに送るからな。』

玲士「ああ、分かった。」

そう言い、通信を切る。

それと同時に紙が落ちてき、玲士はそれを拾って懐へとしまう。

玲士「…さて、一誠を殺したチームの奴だが…更生させてから再利用するというなら依頼を優先させてもらおう。」

そう1人、思っているとグレモリーから通信が入る。

玲士「…どうした？グレモリー。」

リアス『墮天使への攻撃が決まったわ、あなたにも手伝ってほしいけれど構わないかしら？』

玲士「構わん、だが、少し前に墮天使関連で一つ依頼が入った、あつちが先だからそっちを優先させてもらおうぞ。」

リアス『え、ちよつと待って!?!なんで墮天使から依頼が!?!』

玲士「どうせ悪魔から依頼を受けるとかいう話がどつかから漏れて俺に依頼が来たんだらうな。」

リアス『…悪魔が墮天使の』

玲士「俺は『人間』だ。」

リアス『うぐ…そう、それでどんな依頼なの？』

玲士「…本来依頼は誰であろうと漏らすものではないが…話しておかないと間違つてやられても面倒だしな。墮天使1名の保護、見逃せという話だ。」

リアス『私の領地で好き勝手した墮天使を逃がすわけ』

玲士「あ…?」

リアス『な、なんでもないわ…それでその墮天使は一誠を殺した墮天使なのかしら?』

玲士「いや、金髪の少女だから違うな、一誠が出会ってたアーシアという少女でもない。」

リアス『…そう、分かったわ。先にあつちが依頼したならしようがないわね。』

玲士「ああ、それで俺はどいつを攻撃すれば良い？」

リアス『教会の外にいる奴等をお願いするわ、私と朱乃があなたと合流、一誠達が教会の内部に突撃すると言った感じだわ。』

玲士「了解した。一誠達が教会内部に突撃するのに合わせて外にいる敵へ接敵する。」

リアス『ええ、お願いするわね。』

そう言い、通信を切る。

玲士「…はあ、シヤドウ。」

そう言った瞬間、玲士の影の肩に猫の影が映る。

使い魔『ニヤフ？』

玲士「小猫、木場達の動きと外にいる墮天使チームの位置を随時俺に知らせろ。」

使い魔『ナアーオ。』

玲士「…そうか、あつちは数が多いが何とかなるだろう。頼んだぞ？」

使い魔『ニヤッ。』

その言葉と共に猫の影がほかの影に溶け込んでいく。

玲士「…既に突撃準備は完了していたか、こちらも接敵するとしよう。『時のある間に薔薇を摘め』…！」

一旦屋上の端に移動してから教会へ向けて走り出し、そのまま屋上から跳んでいく…。

場所は教会近くの公園…そこで3人の墮天使が教会の方から聞こえた音に反応している。

コート男「今の音は何だ？グレモリー共が攻め込んできたのか？」

青髪「分らん、だが、敵襲というのは確実だろう、儀式は悲鳴以外聞こえるはずがないのだからな。」

金髪「じゃあ急いで向か…?!な、なにか風切り音が聞こえるっす！」

その言葉と共に、3人の近くに一つの影が着地し、滑ってくる…。
玲士「…墮天使3人か、俺の相手をしてもらおうぞ？」

コート男「はっ、まさか悪魔が一人で来るとはな？」

青髪「赤いフードに仮面…なるほど、貴様がフリードが言っていたゴーストか。」

玲土「ああそうだ、ドーナシーク、カラワーナ、そしてその金髪がミッテルトで合っているな？」

ミッテルト？「ふっふーん、そうっすよ！名前を知ってるだなんて勉強家な悪魔っすね！」

ドーナシーク「ふん、相手が誰であろうと我ら墮天使の相手ではない。」

玲土「御託は良い、行くぞ。」

その瞬間、玲土の姿が消え側面より双剣を構えてカラワーナと呼ばれた女へと斬りかかる。

カラワーナ「ツ!?くっ…！この速さ…神器か！」

それに対し咄嗟に光の剣を出し、防ぐが強烈な一撃に弾かれ、後ずさる。

玲土「答える筋合いはない。」

ドーナシーク「だが隙だらけだ！死ぬがいい！」

そう言い、背後の上空より光の槍を展開し、玲土へと攻撃を仕掛ける。

玲土「貴様がな。」

そう言った瞬間、玲土の姿が武器を投げ捨てながら消え、ドーナシークは地上に降り立ちながら空振り、態勢を立て直そうとする。

ミッテルト「う、後ろっす！」

ドーナシーク「しまッ…ガハッ…。」

玲土「まずは一人…。」

しかし、即座に背後に現れ、双剣と同じ柄の両刃剣を以てドーナシークを上下に真つ二つにする。

カラワーナ「ドーナシーク！くそっす！」

ミッテルト「そこっす！あぐうあ!？」

玲土「遅い…！」

ドーナシークが斬られた事に驚き、即座にミッテルトが突撃するが

槍を振る直前に掌底で反撃し、突き飛ばす。

カラワーナ「ミッテルト! くつ、ただ好き勝手やられている我らでは」

玲士「…終わりだ。ブローケン・ファンタズム壊れた幻想!」

カラワーナ「なに…ッ! あぶな『ドオン』」

側方より最初に持っていた双剣の片方が飛んできたのを確認し、即座に後ろに下がって回避するが顔面目の前にきた瞬間に爆発し、飲み込まれる。

ミッテルト「う、うう…っ! か、カラワーナまでやられたっす!」

玲士「そうだ、残りは貴様だけだ。」

ミッテルト「う、うう! や、やってやる! 私一人でもやってやるっすよ!」

明らかに恐怖しても武器を構え突撃しようとしているミッテルトの姿を見て溜息を吐く。

玲士「…はあ、貴様と敵対するつもりは無い。」

ミッテルト「…へっ? ド、どういう事っすか?」

玲士「一度確認するために聞くぞ? 貴様の名はミッテルトで、その服はゴスロリというもので合っているか?」

ミッテルト「そ、そうっす、自分はミッテルトって名前でこの服もゴスロリってファッションスタイルっす。」

玲士「そうか、お前には連れ戻しの依頼が出ている、名は明かさぬが…この紙を見ればわかるだろう。」

そう言い、懐から取り出してミッテルトに近づいて手渡す。

ミッテルト「え、えつと…ッ!? え、え!?! こ、これは本当っすか!」

玲士「知らん、その紙を渡してお前を見逃す、それがこの依頼を達成する条件みたいなものだ。グレモリーには既に報告してある、あつちが攻撃してきた場合貴様を撤退させるまでグレモリーと敵対しても逃げるのを手助けしてやる。」

ミッテルト「レ、レイナー様は…。」

玲士「そいつについては何も言われてない…が、既にこの町でこんな企てをした事、脅威になるかもしれないという理由で一般市民を殺

した事で既に見逃すことは出来んしグレモリーも見逃すつもりは無
いだろうな。」

ミッテルト「うう…そうっすか…。」

玲士「裏切ったと思われると思っっているのか。」

ミッテルト「そ、そうっす…。」

玲士「…割り切れ、としか言えんな、貴様を評価してくれている奴
がいる、そいつの評価を裏切らぬように頑張る事だ。」

ミッテルト「…レイナーレ様、ごめんっす…。」

そう言い、ミッテルトは羽を広げて飛び始める。

ミッテルト「あ、悪魔に礼は言わないっす…でも、あの御方からの
これを届けてくれた『人間の傭兵』であるお前には感謝するっす。」

そう言い残し、飛び去って行く。

玲士「…誰かの為にという想いは良い、だが、過程を誤ればそいつ
らのようになる…お前はまだ取り返しのつく範囲だからな、次はま
もな生き方をする事だ。」

そう言うと同時にリアスと朱乃が空から降りてくる。

リアス「終わったかしら？」

玲士「ああ、目的の奴は既に逃がした、堕天使の2名も処刑済みだ
から残りは兵藤を殺した堕天使のレイナーレとはぐれ悪魔祓いフ
リード、その他はぐれ悪魔祓い複数のみだ。」

朱乃「あらあら、そうでしたか。」

リアス「っ！この力は…！」

玲士「…兵藤、か、急ぐぞ。」

リアス「私は地下に、ゴーストは教会正門から、朱乃は羽の処理を
頼むわ。」

玲士「任せろ。」朱乃「任せてくださいな。」

リアスは魔法陣を展開して祐斗たちの場所へ、玲士は足で教会へ向
かっていく。

場所は教会…玲士が到着した時には既に終わっており、玲士は現在
レイナーレを引きづってきている。

玲土「今到着した、こいつがぶつ飛んできたから引きづってきたがそれで良かったか？」

そう言つてリアスの前へ投げる。

リアス「ええ、ありがとう。ゴースト。…さて、初めまして、墮天使レイナーレ。私はリアス・グレモリー、グレモリー家の次期当主よ。」

レイナーレ「グレモリー一族の娘か…！」

リアス「どうぞお見知りおきを、短い間でしようけれど…それとゴースト？」

玲土「…はあ、レイナーレだったな？貴様の配下である墮天使3人は既に処刑してある、助けが来るとは思わない事だな。」

「…ウソではあるが、アフターサービスだ、ミツテルト。」

そう言つて羽根を3枚、レイナーレに向けて放り投げる。

レイナーレ「幽霊風情が…よくも…！」

玲土「ふん…しかしグレモリー、兵藤の籠手の形が変わっているがそれは本当にトワイス・クリティカルなのか？」

リアス「あら？…へえ？赤い龍…そういうことなのね。」

レイナーレ「赤い、龍…ツ!?ま…まさか…！」

リアス「貴方も気づいたみたいね？この子、兵藤一誠の神器は14種の神滅具の一つ…赤龍帝の籠手、ブーステッド・ギアよ。」

レイナーレ「そんな…そんな子供なんか…！」

リアス「…さて、あなたには消えてもらうわ、好き勝手しすぎた代償よ？」

その言葉を聞いた瞬間、レイナーレは姿を変える。

レイナーレ「い、一誠くん…た、助けて…あ、あんなことを言ったけれど墮天使の役目を果たすため仕方無かったの…！」

その姿を見た一誠は動揺し、後ずさる。

一誠「ゆ、夕麻ちゃん…。」

レイナーレ「ほ、ほら、その証拠にこれ…捨てずに持っていたの…！忘れてないわよね…あなたに、買ってもらった…！」

一誠「なんでまだ…そんなもの持つてんだよ…！」

レイナーレ「どうしても、捨てられなかったの…！だって、あなたが好きだから…！」

その言葉を聞いて、一誠はレイナーレの近くへと歩いていく。

木場「拙い…小猫ちゃん！」

小猫「…うん。」

そう言つて二人は駆けだそうとするがリアスに制される。

レイナーレ「私を助けて！」一誠くん！」

一誠「お前…どこまで…！」

そう言つた後、背中を向け…。

一誠「部長、頼みます…。」

玲士「そこまでだ、何をしている？兵藤。」

一誠がそう言い切つた時、剣を投影、銃へと改造し、一誠へと向ける。

一誠「ゴ、ゴースト…？何を？」

レイナーレ「ゴ、ゴースト！あなた私を助けガフツ…！」

レイナーレがゴーストの方へ向き直ると同時に顔面を踏みつける。

玲士「貴様の因縁を他人に任せるつもりか？たわけが。」

そう言つて一誠の足元に銃を投げ捨てる。

一誠「えっ…？」

玲士「それを拾つてこいつを撃て。」

リアス「ゴースト！一誠はまだそんなことをした事が。」

玲士「黙っている、悪魔になったからにはいつかこうする事になる。」

一誠「う、うう…。」

そう唸り、銃を手に取りとうとするが手に取ることが出来ず、握りこぶしを作る。

一誠「ごめんゴースト…俺には出来ない…。」

玲士「…そうか、だがいつか、こうしなければならぬ時が来る…それだけは覚えておけ。」

そう言い、もう片方の銃で左胸に銃弾を撃ち込む。

それと同時にレイナーレは絶命し、体は消えて羽だけが残る…。

一誠「…ごめん、ゴースト…。」

玲士「…気にするな、汚れ仕事は慣れている。グレモリー、俺は先に戻らせてもらう。」

「…一誠、お前がその選択をして安心もしている。お前は俺の様にはなるな。」

リアス「分かったわ、ありがとね、ゴースト。」

玲士「…ああ。」

そう言い、玲士はその場を後にする…。

設定紹介 オリジナル編

名前：近衛 玲士（コノエ レイジ）

年齢：原作開始の時点で17歳 性別：男

設定：

転生者の一人、相良祐樹の新たな肉体。

転生特典は『エミヤ』の能力と武器、つまり過去の英雄たちが使った武器の記憶。

これにより様々な武器が使えるようになっていく：が、もちろん剣以外の性能は下がる。

エミヤの内容は様々なFate世界線のエミヤであり、切嗣、士郎、アーチャー、オルタの宝具など。

ただしEXTRAのアーチャーは入っていない、だってあれエミヤって確定していないので：曖昧すぎるんす。

容姿モデルは艦隊これくしょんの矢矧、なんか黒髪ポニーの男っぽいですつごい脳内に浮かんだので、胸は無いからね！男だからね主人公！

コードネームはゴースト、復讐の為に自身を死んだ者とする為にそう名乗るようになった。

ゴースト＝近衛玲士という事実は現在仲介者のみ知っている、知らない中で一番確信に近いのはガブリエル。

リアスもゴーストという人物を知った際の容姿はガブリエルと遭遇した後からするようになったエミヤアサシンスマイル＋仮面。

得意武器は特に無し、どんな武器であろうと使え、真正面からの不意打ちだろうと出来る。

リアス・グレモリーの『兵士』の変異の駒にて眷属悪魔化しているが本人は絶対に認めない。

趣味は料理に裁縫、女っぽい趣味を持っている。

口調は仕事人状態の時は厳しく、一人称も俺で声が低かったりするが普段着の状態の時は優しいめの口調で一人称も私、声も高くなるというか性格変わってる？

私生活の時はよく男にナンパされたりするが自身の性別を明かさずにやんわりと断る。

一誠、イリナとは幼馴染だが血に汚れすぎたこと、復讐に憑りつかれている為に迷惑を掛けぬように敬遠している。

信頼度に関しては最大100だとして仲介者が90で。

リアス眷属Ⅱ50 一誠Ⅱ75 慎士Ⅱ20 サーゼクスⅡ40
オールドⅡ90 ガブリエルⅡ70

リアスⅡ10 (第4話) ↓40 (第5話オカ研に行く前) ↓500 (第5話オカ研到着後) ↓

600 (第9話) ↓900 (第12話)

となっている。リアスの信頼度が無い理由は無能、プライドの塊である事であったが、一誠が死んだという事実、そして眷属にした理由の為にとてもなく嫌悪感を持っている。

ただし一応代理クライアントである為に声を掛けられたりしてもちゃんと毛嫌いせず対応はする。

しかし、一誠がリアスを選んだという事実には嫉妬も含め、感情的になり、必要以上の関係を持たぬようになった。

一時の感情であったため、コカビエル戦後は収まり一応は代理クライアントとして対応を再開した。

ガブリエルのオカ研来訪によつてリアスらに本名が露呈したが基本的には仕事着ではゴーストと呼ばせるように、オフ衣装では玲士か近衛と呼ばせるようになった。

ただし純血の悪魔には絶対に名前を呼ばせない。

玲士「まあ、そんな感じだが仮面に関しては様々だ、私生活時の俺もある程度物語が進んだら出るようになるから楽しみにしてくれ。」

名前：シャドウ 種族名：影猫

年齢：玲士よりは上だが自身も把握していない 性別：そもそも性別が無い

設定：

元々は冥界の森にひっそりと棲む希少生物だったがはぐれ悪魔を

処刑するために来た玲士と出会った。

最初は狩る為に玲士を狙ったが影である事を逆手にとって対応され、自身を初めて負かした相手という事で影に潜みついていく事に。

玲士は影猫がどういうものかを知らなかったがついてきていることは把握しており、その時のはぐれ悪魔を餌としたりなどして一応は世話をしていた。

その後、玲士がリアスに使い魔についての説明を受けた際に自ら姿を現して自分から志願して玲士の使い魔となった。

能力は影に潜んでいる事と影内での行動が肉体にも反映させること、GGXrdのザトーのデストロイみたいな感じ。

たまに完全に実体化して撫でると要求してくる。

影に潜んでいる間は無敵で光で完全に影が消え去っても死ぬことはない。

飯は適当な生物の影、ただし玲士にどれが食って良いかはしつかり聞く。

影であるならばどこへでも潜むことができる為に情報収集にも長けており、攻撃に関しても敵の影に対して攻撃を仕掛ける為、対処法が分からない場合は抵抗も出来ずやられる。

対処法は自身の影を他の影に隠す事、玲士はとっさにフレアガンで自身の影を隠してはぐれ悪魔の元まで向かって依頼を遂行した。

この移動中に『自分が初めて食べれなかった生き物Ⅱ自身を初めて負かした相手』と認識しついでいき始めた。

使い魔化の難易度は除き、前述の能力と躰のしやすさ、餌の払いやすさとお手軽である為に悪魔の使い魔にしたい生物でもトップ4に入るほどである、なお残りの上位はドラゴン。

ただし気配がない為、完全に影に隠れて光であぶり出す事も出来ない為に玲士を除き使い魔にした者はいない。

そして玲士の使い魔になった後は森に来て残りの影猫たちに自身の唯一の弱点を伝え、さらに捕獲しにくくなった。

玲士との仲は良く、周りに誰もいない時は頭の上に寝ていたりする、影の中でも実体化してても。

玲土「まあ、シャドウにはよく助けられているな、随時周辺状況を知らせてくれるから仲介者の情報と合わせて奇襲の対処もしやすい。」

名前：仲介者（決まってる）

年齢：いくつなんだろ？20〜30ぐらいな印象だが。 性別：男
設定：

傭兵としての玲土の相方、若い為にゴーストの相方として選ばれたがその結果、傭兵組織でもトップクラスの稼ぎ頭になっている。

神器持ちで神器は『強制自己証明』セルフ・ギアス・スクロール、能力は互いに了承した瞬間に破ったら所持者の望んだ呪いが発動する呪いを掛ける。

仲介者の居場所は基本不明、顔も判明されておらずいつもどこかへ移動している為に三大勢力にすら把握されていない。

情報収集に長けておりゴーストのサポートする以外にも情報屋として他傭兵に情報を売ったりしている。

基本的に情報は報酬の3分の1、これはゴースト自体がお金に無頓着の為、受ける際の依頼料は基本的に仲介者が決めている。

よく他傭兵から引き抜きを掛けられているが馬鹿みたいな内容でいつも蹴っている。

最初は金ヅルにもならないと思っていたが仕事っぷりに目を見張り、ある事情で金にとっても困ってしまった際に全額譲ってもらった為、『ここまでされちゃあしっぴかり返さねえとなー』と言った感じに絶対的な信頼をしている。

ゴーストの事情を理解している唯一の人物で犯人捜しを手伝っている：が、犯人が当時小学生低学年の子供だとは思わず難航している。

玲土「仲介者にもよく助けられているな、どこから仕入れるかは知らないが凄い情報量でな、人外や魔法使いとかのような特殊なものを除けば細かく教えてくれるんだ。」

仲介者「へへっ、まだまだ若いんだが良い相方だ、景気よく報酬も払ってくれるし仕事の成功率も高い、大切な弟分でもあるぜ。」

第2章 戦闘校舎のフェニックス

第8話 不死鳥の縁談

墮天使騒動から数日が経ち、特に依頼が来ることも無く、バイサーがいた廃墟に滞在して己の鍛錬に励んでいた。

玲士「…で、何の用だ？グレモリー、俺は鍛錬をしているんだが？」
リアス『ごめんなさいゴースト、実は明日オカ研部室に来てほしいのよ…。』

玲士「…はあ、俺は貴様の眷属であるつもりは無いんだがな…で、縁談の日程が明日という事か？」

リアス『え、知っていたの!?!』

玲士「シャドウにこの町全体を見張ってもらっているからな、お前が吠えているのを聞いて報告されている。」

リアス『…そう、貴方の予想通り概ねそういう事よ、相手はフェニックス家の三男、ライザーよ…でも私はあんな奴と』

玲士「お前の気持ちなど知った事ではない、政略結婚が嫌なら名を捨てて夜逃げでもしてろ。」

感情に任せ、リアスが愚痴を言おうとした時に割り込み、言い捨てる。

リアス『ツ…！私は、私はリアス・グレモリーよ！名を捨てるなんてしないわ!』

玲士「知った事ではない、政略結婚なんぞ貴様ら貴族の『普通』なのだろう？元よりそうなった際への対処法を作らなかつた貴様の責任だ、シトリーはしつかりチェスという自衛手段を用意していたのだからな。」

リアス『うつ、ぐ…。』

玲士「そういえばあいつがライザーとやらの眷属にいたな…。」

ライザーという単語に反応し、通信に声が入りきらない程度に呟く。

リアス『…どうしたのかしら?』

玲士「気にするな、明日そつちへ向かえば良いんだな？キッチンを借りるぞ。」

リアス『え、ええわかったわ。』

玲士「ではな。」

そう言い、通信を切る。

玲士「…自業自得だというのにまったく、自分勝手なやつだ…。」
そう言い、投影の鍛錬を続けていく…。

次の日、オカ研部室に一度顔を出し、その後は玲士は一人、別室にあるキッチンにて料理を開始する。

料理をしていく途中、時間になったのか口論の声が聞こえ始めてくるが気にせず作った料理をデコレーションしていく。

玲士「…ふむ、完成したな。さて…持っていくとするか。」

出来た料理のケーキを切り分け、1ホールのまま持ってキッチンを後にする。

兵藤「…なんざ必要ねえ！この場で全員倒してやる！『Boost！』。」

ライザー？「…ミラ。」

玲士「…うるさいな、全く。」

部屋の前まで到達すると女性たちの罵詈雑言が聞こえ、それに対し聞き覚えの無い男の声とそれに反応した一誠が突撃しようとしていることを悟る。

玲士「失礼するぞ、あとうるさいぞ貴様ら、ここで暴れるな大馬鹿共が！」

ドアを蹴り開きながらそう言い、開いている右手に銃を出して中心で構えている二人の間に向けて構える。

一誠「ゴ、ゴースト!？」

ライザー？「…ちっ、下がれミラ。」

ミラ「はっ。」

玲士「…はあ、グレイファイア、ルシファーから言われてここに来ているんじゃないのか？なんだこの騒ぎは、悪魔の縁談というのは

眷属同士で戦わせるのが常なのか？」

グレイフィア「…いえ、そういうわけではございませんが互いに矛が収まらないご様子でしたので静観していたのです。」

玲土「…はあ、1, 2回程度しか戦闘したことが無い素人が戦闘を経験した事があつて構えてるやつに勝てるわけないというのに…まあいい、俺のいる理由は別だ、レイヴェル、いるか？」

「そう言いながら金髪ドリルの娘に近づいて行き、左手に持っていたケーキを差し出す。」

レイヴェル「あら、いつもありがとう、ゴースト。」

玲土「気にするな、お前が時々注文してきているからな、最近そういう依頼が来なかつたから作つただけだ。」

レイヴェル「ふふ、そうでしたわね。」

ライザー「レイヴェルの奴が時々ケーキを届けてもらつていたがお前がその出どころだったのか、ゴースト。」

玲土「ああ、そうだ。」

ライザー「…ほう、レーティングゲームで勝つたら貴様を我が家のパティシエとして雇つてやろうじゃないか。」

リアス「な!?ゴーストは私の眷属よ!好き勝手言わないで頂戴!」
玲土「お前の眷属になつたつもりも無いがパティシエについても断る、こういうのは毎日食べるよりも日を置いた方が飽きないからな。」

ライザー「…そういうものなのか?まあ良い、レイヴェルが気に入っているのだからそうなのだろうな。だが、リアスの眷属では無いのか?」

玲土「自分から望んで転生したわけでも無いのでな、俺はこいつの眷属だとは微塵も思っていない。」

リアス「ゴースト…。」

ライザー「ふ…はははははははは!眷属からそう言われるとは次のレーティングゲームも勝つたも同然だな、ゴーストだけが懸念材料だったか主と認識すらしていないとはな。」

リアス「うっ…ぐ…。」

ライザー「さて、帰つて10日後を楽しみに待つておくでしょう!

はははは！」

「そう言い、炎を放つ魔法陣を展開しながら自身の眷属と共に部屋を後にする…。」

グレイファイア「…では、今回の件をサーゼクス様に報告するために戻らせてもらいます。リアス、頑張ってくださいね。」

「そう言い、グレイファイアも部屋を後にする。」

リアス「ええ、頑張るわ…それとゴースト…。」

玲士「安心しろ、お前を主だとは認めていないが依頼主ではある、レーティングゲームで決着をつけることに決まっていたみたいだが欠席することはない。」

リアス「…そう、合宿をするけどあなたは来るかしら？」

玲士「いつ依頼が来るかもわからないから行かん、だがアドバイスぐらいはしてやる、姫島、小猫は自身のプライド、恐怖から目を逸らすな、それと木場…セオリー通りに動かないようにすることと創造する際は見た目ばかり重視するな。鎌瀬と兵藤、グレモリーは基礎と戦法を鍛えろ。アーシアは…すまん、特に思いつかない。」

その言葉に朱乃と小猫は顔を曇らせ、木場と兵藤は苦笑いをする。

慎士「うるせえ！てめえの指図は受けねえんだよ！」

玲士「それならそれで別にかまわん。」

リアス「私だつて滅びの魔力があるから問題は無いと思うのだけれど…。」

玲士「自身の才能だけで慢心して背中に木をぶつけられた馬鹿はこの誰だったか…。」

リアス「うぐっ…。」

兵藤「え、えーと…基礎は分かるんだが戦法って…?」

玲士「それについては木場らへんに聞けば良い、簡単に言うなら愚直に突撃しようとするなわけ、俺が止めなかつたらお前直進して殴りに行こうとしていたな？」

兵藤「な、なんでわかった!？」

玲士「…単純すぎるんだ、お前は。」

アーシア「え、えつと私は…?」

玲士「…すまん、お前は性格的に戦闘に向いてなさすぎるんだ、そういうタイプへのアドバイスをどうすれば良いか分からないんだ…。」

リアス「ま、まあゴーストは基本単独の傭兵だもの、この子についてはもう考えているから大丈夫よ。」

玲士「そうか、10日後どこに行けば良いかぐらいは連絡しろ、それじゃ俺は帰るぞ、ではな。」

そう言い、玲士は部屋を後にする。

慎士「くそつ、なんだよあいつは…！人の気持ちを考えずに！部長！あんなこと言うんですから自信があるんでしょ!?ならあのホスト野郎に特攻させてやれば良いでしょう!？」

リアス「…正直それが一番良い戦法なのよね、彼がレイヴェルと知り合いだったのは驚いたけどそれなら対処法を知っているはず…でも、ワンマンゲームは評価が下がるのよ。」

兵藤「えつと、そうなんですか？」

木場「あくまでゲームだからね、観客を魅せないといけない点もあって、ゲーム終了までの過程が重要なんだ。」

リアス「朱乃と小猫も、無理に気負わなくて良いわ、どう特訓するかはあなた達に任せるけれど一誠達の特訓の際は手伝いをお願いするわね。」

朱乃「うふふ、任せてくださいリアス。」

小猫「…はい、任せてください。」

リアス「さて、それじゃあ明日からの合宿を頑張りましょう、頑張つてライザーを倒すわよ!」

眷属、s「はい!」

そして一時解散し、次の日リアスとその眷属達はリアスの別荘へと向かっていく…。

第9話 格付遊戯VS不死鳥その1

縁談からの10日後…レーティングゲーム当日に玲士は一人、ある場所へ来ていた。

玲士「…この場所へ来るのは10年ぶりかな…懐かしいですね…。」
そこは何一つない空き地、玲士はそこで一礼し、ただ空き地を見続ける。

そしてそうしている時、不意に話声が聞こえてくる。

一誠「もうそろそろで着くよアーシア。」

アーシア「はい、昔の幼馴染さんの場所なんですよね?」

一誠「ああ、仲良かったんだけど…10年前にな…。」

アーシア「一誠さん…。」

玲士「一誠…覚えていたのですね。だけど、今は会うわけにはいかない…。」

そう思い、空き地へと入って行って向かい家の塀へと魔法陣を展開し、その中へ入って消えていく…。

そして時間は経ち…前日に言われていた時間に近くなりオカ研部室へと転移する。

リアス「っ!来てくれたのね、ゴースト。」

玲士「ああ…それで、強くなったか?」

そう言い、他眷属達の方へ顔を向けるが約2名、顔を逸らす。

リアス「ええ!みんな修行してとても強くなったわ!一誠も魔力を扱えるようになったんだから!」

玲士「…そうか、で、作戦はどうするんだ?」

「…トラウマ、プライドは克服出来なかったようだな、お前の人生が懸かった試合だというのに全力を出さない眷属が二人…眷属の事すら把握できないのか無能め。」

リアス「そうね…とりあえずそれはゲームの場へ移った時に決めるわ。」

玲士「…分かった。」

「…戦いとは始まる前から決まる、もはや何も言えんな。」

慎二「はっ！てめえの出番はねえぜ。俺が全て倒してやるからよ！」

一誠「任せてくれゴーストさん！俺たちも強くなったんだ！」

玲士「…ああ、頑張れよ。俺は俺で指示通り動く。」

リアス「ええ！絶対に倒して見せるわ！」

そう話していると、白い魔法陣が展開されてグレイファイアが現れる。

グレイファイア「皆さま、準備は出来ましたか？」

リアス「ええ、いつでも良いわ。」

グレイファイア「開始時間になりましたら、この魔法陣から戦闘用フィールドへと転送されます。」

一誠「戦闘用フィールド…？」

朱乃「ゲーム用に作られる異空間ですわ。使い捨て用のフィールドですからどんな派手な事をして大丈夫、うふふ…。」

一誠「は、はあ…。」

グレイファイア「ちなみにこの戦いは、魔王ルシファー様もご覧になられますので。」

リアス「…そう、ゴーストについては何か言ってたかしら？」

グレイファイア「はい、『今回のゲームでは彼の行動はリアスに任せろ』との事です。」

リアス「っ！そう、分かったわ。」

そう話していると白い魔法陣は赤く変わり、光り始める。

グレイファイア「そろそろお時間です。」

リアス「行くわよ、みんな。」

その声を聞き、リアスとその眷属達、そして玲士は魔法陣に乗る。全員が乗り、静止した瞬間、一人ずつ転送が始まる。

一誠「…あれ？」

アーシア「なにも、変わってませんね…。」

玲士「外の空をみてみる、二人共。」

一誠&アーシア「えっ？」

その言葉を聞き、二人は窓の方へ行き、外を見る。

一誠「そ、空の色が!？」

空の色に驚いているとどこからともなくグレイファイアの声が聞こえてきて、現在の世界について、ルールを説明していく。

説明が終わり、リアスらは作戦会議へと移る、眷属の6人との会議を部屋の端で玲士はただ見つめてる。

そうしていくうちに眷属のうち、朱乃、木場、小猫、慎士が部屋を後にし、リアスはゴーストへと目を移す。

リアス「さて：ゴースト、あなたも出来る限りの範囲でこの学園を把握しておきなさい。」

玲士「了解。」

そう言い、玲士は窓より部屋を後にし、屋上へ向かっていき、そして一番高い木へと跳び移り頂点に立って全体を見回していく。

玲士「…これが一誠が通う学校か：綺麗な所だな、朴浴も出来る…。」

そう思っている時、朱乃が近くを滞空する。

朱乃「：ゴーストさん、今回の戦い、勝てますか？」

玲士「姫島か：はつきり言って無理だな、人の人生が懸かった戦いなのに全力を出さないやつが二人、そして鎌瀬と兵藤は強くなったが所詮つけ焼き刃だ、木場は確かに戦法が微妙に変わったが言葉通り微妙に、だ。」

その言葉に朱乃は顔を逸らす。

朱乃「：あなたは、リアスを助けたいとは思わないのですか？」

玲士「思わんな。だが、傭兵として依頼されれば助けるつもりでいた：いたんだが。」

朱乃「：：？」

玲士「魔王ルシファーは欲張りすぎてほぼ確実に縁談を破棄できる道を潰した。」

朱乃「えっ：：？」

玲士「グレモリーはプライドが高くてこの戦いも評価を良くしながら縁談を破棄したいなどと欲張った、そしてルシファーもだ、妹の評

価を良くして破棄したいと思ってやがる。『二兎を追う者は一兎をも得ず』、奴らが選んだ道はこれだ。俺はフェニックスを殺せる手段があるが…グレモリーは俺にフェニックスを倒させるといふ考えが一切無い、俺はあの女の指示通り動くだけだ。あの女には王としての心構えも戦術も足りない、エンターテイナーになろうとしている三文役者だ。』

朱乃「…あなたは、リアスが嫌いなのですか？」

玲土「ああ嫌いだ、大っ嫌いだ。だが傭兵は好き嫌いなどとしてはいいけない、自害や無理な特攻以外の依頼主の要望に応える、それだけだ。』

そう会話しているとリアスから通信が入る。

リアス『全員準備は出来たかしら？』

眷属、s『『はい！』』 朱乃「ええ、出来ましたわ。』

玲土「地形の把握も終えた、いつでも行ける。』

リアス『分かったわ、なら、作戦通りライザーを叩き潰しなさい！』その言葉と共に各眷属は所定位置へと移動を開始する。

リアス『ゴースト、あなたは小猫と一誠について行ってあげて。彼らに頑張らせてあげてちょうだい。』

玲土「了解した。』

そう言い、木から跳び下りて一誠達と合流する。

朱乃「…ゴースト、あなたは変わりましたわ…最初に出会った時と違い、リアスへの感情が私に父に対する感情と同じに…何故…？」

そう呟き、朱乃は体育館の方へと向かっていく…。

場所は体育館、小猫、一誠、ゴーストの3人は舞台裏から慎重に進んでいた。

小猫「…います、数は4人…。』

玲土「あつちは既に気づいているようだな。』

そう小声で話している時、体育館の明かりがついていき、声が聞こえてくる。

??「そこに隠れているのは分かっているわ、出てきなさい！』

その言葉を聞き、3人は姿を隠すのをやめて姿を現すとそこには4人、敵であるライザー眷属が立っているのが目に映る。

チャイナ女「まさかゴーストも一緒だとは予想外ね。」

玲士「安心しろ、俺はワンマンゲームをする為に来たわけでは無い、お前らの相手はこの二人だ。」

ミラ「えっ?そんな私に簡単に負けたやつと小柄なルークが相手ですって?」

チャイナ女「舐めているのかしら...?」

玲士「舐めてるのだろうな、お前らなんぞ俺一人でライザー含め殲滅するのはたやすいのにも関わらずワンマンゲームをするなって言っただけだから。」

双子A「生意気だー!」

双子B「ライザー様を倒せるわけないよ!」

玲士「俺については聞いているだろう?...なら、

『不死を殺せる武器を出せる』と言えばどうだろうか?」

ライザー眷属、s「「ッ!」」

その言葉にその場にいた玲士以外の6人は驚愕の表情を浮かべる。

一誠「ほ、本当なのか!?ゴーストさん!」

小猫「...初耳です。」

玲士「さて、どうだろうか?」

そう言い、杖の様な、鎌の様な剣を投影し、くるくると回転させる。

玲士「まあ、グレモリーからは俺に活躍しすぎるなと言っただけだから、言われた通りにするだけだ。...倒せるな?二人共。」

小猫「...行けます。」

一誠「ああ!任せてくれ!」

そう言って二人は舞台より跳び下り、玲士は舞台の端の柱に身をゆだねる。

そして戦いは始まり、小猫がチャイナ服の女性、『戦車』の雪蘭と。

一誠が『兵士』のミラ、双子のイルとネルの3人との戦闘を開始する。

その姿を見ながら玲士はリアスへと通信を掛ける。

玲士「こちらゴーストだ、体育館にてフェニックス眷属と戦闘に入った。」

リアス『分かったわ、引き続きお願いするわね。』
玲士「了解。」

通信を切り、戦闘に目を移すと一誠が3人の攻撃を避けながら体にタッチしているのが目に入る。

玲士「…ん？タッチした場所に魔法陣が…何をする気だ？」

一誠「行くぜ！俺が考えた必殺技！『洋服破壊』ッ！」

その言葉と共にパチンツ！つと指を鳴らすと同時に『兵士』の3人の服が弾け飛び、裸体が展開される。

3人「イ、イヤアアアアアアアアアアッ！」

3人は叫びながら咄嗟に手で裸体を隠し、うづくまる。

玲士「…は？」

【…は？】

その光景を見てゴーストは素っ頓狂な声を上げながら唾然とし、持っていた剣を銃へと改造する。

一誠「ふっはっはっは！どうだ見たか！脳内で女の子の服を消し飛ばす妄想を延々と、そう延々と妄想し続け！俺は持てる魔力の才能全てを女の子を裸にする為だけに使ったんだ！これが俺の必殺技！洋服破『タアン』あつぶなあ！」

必殺技の名前を叫ぼうとした時足元へ銃撃され、遅いながらも避ける行動をする。

玲士「…兵藤、とりあえずこっち向いて正座しろ。」

一誠「ゴ、ゴースト!?ま、待ってくれまだこの子たちの裸を脳内メモリーのフォルダに」

玲士「二度は言わんぞ？」

一誠「は、ははははいー！」

銃を向けられている事を察した一誠は振り向きながら即座に正座する。

玲士「…兵藤、作戦としては、戦いとしてはその行動は合っているだろうな、敵を羞恥心で動けなくするのは良い方法だ、だがな…その

まま倒さずに裸のままにしておくのは人として流石にそれはどうかと思うぞ…?」

そう言いながら左手に数枚マントを投影し、3人へ投げる。

3人「二…えっ?」

玲士「その3人、それでも纏っておけ。」

3人「二…え、えつと…ありがとう?」

玲士「そして兵藤、この戦いはグレモリーの人生が懸かった大切な試合なのに…『くどくどくどくどくどくどく』」

そう説教している間に既に小猫は敵の戦車、雪蘭を倒し、一誠へ軽蔑の視線を送る。

その時3人へグレモリーから通信が入る。

リアス『小猫、一誠、ゴースト、状況は?』

小猫「…はい、ライザー眷属の4人と戦闘、全員倒しました…が。」
リアス『っ?どうしたの小猫?他の二人から返事がないのだけだ。』

小猫「…現在先輩は必殺技が酷かった為にゴーストさんから説教されています。」

リアス『え、ええ…?と、とりあえず朱乃の準備が整ったわ、作戦通りお願いね。』

小猫「…分かりました。ゴーストさん、説教はそこまでお願いします。」

玲士「ああ、聞こえていた。立て兵藤、行くぞ。」

一誠「え、まだ脳内メモリーに」

玲士「行くぞ、小猫。」

小猫「…はい。」

そう言つて二人は出口へ走り出し、一誠も遅れて二人の後を走り出す。

一誠「ま、待っておいでかないでくれー!」

雪蘭「に、逃げるの?!重要拠点を捨てる気!?!」

そして一誠が外へ出ると同時に特大の雷が体育館へと落ち、消滅させる。

一誠「うおおあああ!?わっぷ…。」

玲士「大丈夫か?」

【…爆発音が二つ聞こえた?…まさか。】

雷の着弾による爆風で吹き飛ばされた一誠を玲士は受け止める。

一誠「あ、ありがとうございます。」

そして立たせている時にグレイフィアより連絡が入る。

グレイフィア『ライザー様の兵士3名、戦車1名戦闘不能。リアス様の騎士1名、兵士1名戦闘不能。』

小猫&一誠「…えっ?」

グレイフィアのアナウンスにはライザー側の4人以外にもこちら側の二人がリタイアした事が伝えられ、一誠と小猫は啞然とする。

玲士「…さっきの爆風の時、別の音が聞こえた気がしたがやはりか…。」

一誠「ど、どういう事だよ!?あの二人がやられただって!」

そう話している時、リアスから通信が入る。

リアス『…今のアナウンスは聞いたわね?一誠と小猫とゴーストは運動場へ移動して。木場たちが遭遇した眷属がそっちに移動しているわ、恐らく集まっている…ゴーストあなたにも戦ってもらいわ。』

玲士「了解した。」 小猫「…了解。」 一誠「りよ、了解つす。」

そう言い、3人は運動場へ向けて走り出し。

玲士「…ツ!跳べ!」

小猫「ツ!」 一誠「うえっ!」

そしてすぐさま3人はそれぞれ別方向へと跳び、小猫と玲士は前転し、一誠は滑る。

??「あら残念…やはりゴーストがいては奇襲は無理みたいねえ?」

3人はその声の方へと向き、構えると。

そこには…青い服を身にまとったケバい女が飛びながら妖艶な笑みを浮かべていた…。

第10話 格付遊戯VS不死鳥その2

突如強襲してきたケバいい女、その女を警戒しながら3人は相対する。

一誠「お、お前はあの時あのホスト野郎とあんなことをしてた女！降りてきやがれ！」

女「ふふ…相手の得意な場で戦うわけないじゃない、あなた達二人は地に足がつかないと力が上手く出せない格闘術が武器なら空中で戦うのが普通よねえ…？」

玲士「…グレモリー、運動場では無いから戦えん、あいつはどうすれば良い？」

そう言い、リアスへと通信を掛けながら言うが…。

通信機『ザ：ザザザ：ザザ：』

通信が繋がらず、ノイズのみが聞こえてくる。

玲士「グレモリー？…ちっ、ジャミングされているだと…？」

小猫「…投擲物になる物も近くに無い…敵しいですね。」

女「ゴーストはここで戦闘行為をしない指示を受けてるみたいだし…さあ、行くわ…ツ!?くっ…！」

そう言いながら右手を構えた瞬間、電撃が飛んできてそれを回避する。

朱乃「あらあら、私を忘れてもらっては困りますわ？」

その声と共に朱乃が4人の間に入り、電撃が走る右手を構える。

一誠「朱乃さん！」

朱乃「3人とも、ここは私に任せてくださいな。」

玲士「行くぞ、兵藤、小猫。」

小猫「…はい。」

一誠「は、はい！朱乃さん！木場と慎士の仇、お願いします！」

その言葉とともに3人は運動場へと走り出し、朱乃と女は空中を移動しながら戦闘を開始する。

3人が運動場の中心へと来た瞬間、外周が炎に包まれる。

一誠「え、な、なあ!？」

玲士「…やはり待ち伏せされていたか。」

「…ジャミングされていたらとなると敵の目的は…グレモリーとフェニックスの…。」

レイヴェル「ふふ、ええその通りよゴースト。」

その声と共に6人が一誠らの周りに降り立ち、レイヴェルを含めた4人が周囲に滞空する。

小猫「…囲まれた…!」

玲士「10人…残りの戦力全員か。」

レイヴェル「ええ、足止めをする為に今いる全戦力を以て対峙させてもらいますわ。私は観戦してるだけだけれどね。」

一誠「足止め…?まさか、部長!」

玲士「なるほどな…ライザー本人をグレモリーにぶつける作戦か。」

レイヴェル「ええ、そうですね…さあ、総員、構え!」

ライザー眷属、s「はっ!」

玲士「…ちつ、流星にそう易々とは…やらせん!」

そう言い、ドリルのような剣を投影、銃と一緒に球体へと改造して

校舎側の炎へ投げつける。

玲士「壊れた幻想!」

炎の壁の中心ぐらいに来た瞬間に爆発し、その爆風が炎を吹き飛ばす。

玲士「時のある間に」

一誠「よしっ!炎が消えた!待っててください部長!行こう小猫ちゃん!ゴーストさん、すみませんここはお願いします!」

小猫「…はい!」

玲士「ツ!?待て、お前らくっ…!」

炎が消えた瞬間に一誠は小猫を引き連れて走って行き、玲士がそれを制しようとするが炎が飛んできて妨害される。

玲士「…ちつ、やらかしたな。ライザーを倒す手段を持っているのは俺だけだというのに全く…。」

レイヴェル「ふふふ、理解してるみたいですね。あの二人が行っ

た所でお兄様を倒す手段は無い。誰も3人を足止めするだなんて言ってませんもの、あなたさえ足止めすればこのゲームは勝ったも同然ですわ。」

玲士「…はあ、なら指示通りお前らを倒すだけだ、レイヴェル、貴様は観戦するだけだな？」

レイヴェル「ええ、指示は出しますけれど基本観戦しているだけですわ。」

玲士「そうか…お前以外を倒させてもらおうとしよう。」

「…持ち前の爆弾は2つ…2人は倒せるな。」

レイヴェル「近接戦闘の6人は高速移動に気を付けなさい！美南風、マリオン、ビュレントは6人の援護を！」

玲士「まずは空中にいる奴を倒させてもらおう！」

「アンカーセット…！この中で防がれずに倒せるのは…あいつらか。」
そう言い、腰に付けた手榴弾二つをアンカーを付けながら取り外し、ピンを取って空中にいるメイド2名に向けて投げつける。

ビュレント「その程度の手榴弾を喰らうわけないでしょう!？」

マリオン「遅すぎます!」

手榴弾の進行ルートから避けるように飛んで手榴弾を回避し、玲士へと向けて炎を出した右手を構える。

玲士「言葉を信じすぎだ、たわけ。」

そう言いながら腕をクロスし、伸びているアンカーで引っ張られて別の二人へと高速で飛来する。

レイヴェル「なっ!?あのコースは…ニイ、リイ!避けて!」

ニイ&リイ「え!?うにゝや…ッ!しま『ドオン』」

手榴弾がニイ、リイの顔面に命中し、怯んでいた隙に爆発して二人を顔面から爆風が飲み込む。

それによつて二人は光となつて消えていく。

玲士「まずは二人を撃破…『時のある間に薔薇を摘め』!投影、開始!」

そう言つて手に銃と短剣を、他沢山の武器を空中に投影する。

レイヴェル「気を付けなさい!武器が飛んできますわ!」

玲士「そこだ…！工程完了、全投影、待機！」

美南風「させません！矢よ！剣を穿て！」

ビュレント&マリオン「私達も剣を弾きますわ！炎よ！」

カーラマイン「1対多は騎士道に反するが…イザベラ！シユリヤー！シーリス！」

3人「了解！」

地上戦の4人が連携しながら玲士を攻撃し、空中の3人が投影された武器を弾いていく。

玲士「…やはり連携がとれているな…だが、これならどうだ？」

銃をリロードすると同時に体を回転させながら連射し、シーリスと呼ばれた女へ向くと同時に銃を固定し突撃する。

シーリス「グツ…！だがその程度この大剣で防げる！」

玲士「足止めが目的だからな…！」

シーリス「何っ!?『ドスツ』…ゴフツ…短剣だと…!?出すところは見ていたはずなのに…見えなかった…!？」

そう言い、光となって消えていき、場には武器が残される。

イザベラ「背中がから空きだ！動きさえ止めてれば」

玲士「速度が二倍速だけだと思うなよ？」

後ろからイザベラが蹴りかかるが玲士は前方へと跳び、振り返りながらイザベラへと向かっていく。

玲士「人数が3人になればこっちの出番だ、緩急ある動き、貴様らはどこまで捉えられる！」

加速、減速を含めた動きで移動し、それぞれ3人を攻撃していく。イザベラ「う、ぐっ…敵の攻撃が、動きが…見えているはずなのに…！」

シユリヤー「反応、出来ない…！」

カーラマイン「何故だ…緩急ある動きだけなのに…！」

マリオン「レ、レイヴェル様！ど、どうやって狙えば!？」

レイヴェル「ご、誤射しないように放ちなさい！そうすれば動きぐらいは制限できるはず…！」

玲士「1つ、2つ…！適当に撃ちすぎだ、だからこうなる！」

シュリヤー「ライザー様…すみません…！」

イザベラ「早すぎる…！」

カーラマイン「あっ…矢の射出を止め…。」

シュリヤーとイザベラを背後から刺し、カーラマインを足払いして矢が向かってきている方へと背負い投げる。

それにより二人は光となって消え、カーラマインも複数の矢で射抜かれて同様に消えていく。

美南風「し、しまった…！」

レイヴェル「動揺しないで！一瞬でも隙を晒したら」

玲士「こうなるという事だ。」

3つ、コンテンドーを投影し3人へと撃ち込む。

3人は避けるのは遅れたが防ぐことはでき、腕で防ぐ…が。

ビュレント「ゴブツ…防いだ、ハズなのに…。」

美南風「どう、して…？」

マリオン「ライザー、様…。」

3人は吐血し、吹き飛びながら墜落して光となりながら消えていく。

レイヴェル「…まさか9人全員が傷を与える事も出来ずに倒されるなんて…。」

玲士「連携は良かったが…同士討ちぐらい考えておけ。」

そう話していると、アナウンスが流れる。

レイファイア『ライザー様の僧侶1名、戦車1名、騎士2名、兵士

5名リタイア。リアス様の女王1名、戦車1名リタイア。』

玲士「…小猫と朱乃もやられたか…女王が来ないのを見るとグレモリーの所に向かつて不意打ちで小猫を撃破したって所か…。」

レイヴェル「…行きますの？」

玲士「…時間が足りん、貴様らの作戦勝ちだ。」

そう言った瞬間、再度アナウンスが流れる。

レイファイア『…リアス様の降参^{リサイン}を確認。このゲームはライザー・

フェニックス様の勝利です。』

玲士「…全く、兵藤のリタイア宣告がされてないのに降参するとは

な…。」

レイヴェル「確かに、『王』としてはいけない行動ですわね。ねえゴースト、あなたは結婚披露宴には来るのかしら？」

玲土「行くわけないだろう？俺は雇われ傭兵なんだからな。」

レイヴェル「そう、残念…あなたの料理を楽しみにしていたのだけれど…。」

玲土「…俺はシェフか、いや傭兵は何でも屋でもあるがな…特別な行事以外の時に依頼でもしてくれ、そうすれば俺の料理で良ければいくらでも振る舞ってやる。ではな、レイヴェル。」

そう言い、玲土は魔法陣を展開しフィールドを後にする…。

第11話 敗戦後、二人の想い

レーティングゲームの翌日、玲士はオカ研部室へと来ていた。

リアスの眷属達は3名を除き冥界へリアスと共に向かい、兵藤は現在もなお、目を覚まさないままである。

玲士「…無茶をしたな、一誠。籠手が更に変化したらしいがそれでも不死鳥を倒すには足りん…。」

そう1人思案していると、部屋に紅い魔法陣が展開され一人の男が転移してくる。

男「既に来ていたみたいですね。」

玲士「呼んだのはお前だろうか？ルシファー。」

ルシファー「そうだね…。」

返事をするとともに目を細め、魔力が漏れ始める。

玲士「殺したところで結果は悪くなる以外存在しない、貴様らの欲張りすぎが原因なのに八つ当たりするのは流石『悪魔』だな？」

ルシファー「…ふう、冗談さ、君の気持ちも分かったからね。それよりも君に頼みたい事があるんだ。」

一息吐き、すぐに魔力を消して玲士へと視線を移す。

玲士「ほう…まさかとは思いが披露宴に乗り込めなどではないだろうな？」

ルシファー「いや、流石にそれはないさ、君に頼めば確実に達成してくれるだろうけれどそれはゲーム中に君が言った通り、評価が下がるからね。」

玲士「そうか、ならばなんだ？」

ルシファー「これを赤龍帝の彼に届けて欲しいんだ、彼ならきっと、リアスを助けてくれるだろうからね。」

そう言い、魔方陣が描かれた紙を取り出し、玲士へと手渡す。

玲士「…これを兵藤に渡せば良いんだな？」

「そうやって、貴様ら悪魔は一誠を利用するのか…。」

ルシファー「ああ、彼なら乗り込んできてくれるだろうからね。」

玲士「…そうか、渡しておく。」

ルシファー「頼んだよ、ゴーストくん。」
そう言い、ルシファーは魔方陣を展開しその場を後にする。
玲士「…とりあえず家に行つて兵藤の部屋に侵入するか。」
そう呟いて、部屋を後にする…。

翌日の夜：玲士は魔法陣で兵藤一誠の部屋へと転移する。

一誠「ツ!? つて、ゴ、ゴーストさん!？」

玲士「む、起きていたか。」

一誠「は、はい、それでゴーストさんはどうしてここに…?」

玲士「…なに、少し話がしたくてな、兵藤も何か話したいことがあるなら話せば良い。」

一誠「そうだったんですね…。」

その言葉を聞くと同時に一誠は顔を俯かせる。

一誠「ゴーストさん、戦いは、レーティングゲームはどうなったんですか…?」

玲士「…分かっているだろう?俺とお前がまだ戦えるのにも関わらず奴が諦めて降参して負けだ。」

一誠「そんな、嘘ですよね!?自ら負けを認めるなんて部長に限って…!」

玲士「口伝てで聞いただけがライザーがお前を殺そうとしたから他の眷属の頑張りを無駄にしても降参したそうだ。」

一誠「そ、そんな言い方…!」

玲士「事実だ。」

一誠「ぐっ…なんで、なんでライザーを倒してくれなかつたんですか!ゴーストさんはライザーを倒せる手段があつたはずでしょう!」

そう言いながら、両手で玲士の胸ぐらをつかみ、睨む。

玲士「…貴様がその可能性を潰したくせに何を言っている。」

一誠「えっ…?俺が、潰した…?」

玲士「運動場で囲まれた時、俺がグレモリーの元に向かつてライザーと対峙すれば倒せていた、なのに貴様はグレモリーを心配するあまり、勝手に小猫を連れて俺にあいつらを押し付けたらどう?貴様

が、その可能性を潰したんだ。」

一誠「お、俺は部長が心配で…。」

玲士「…心配だからと感情的になって行動するのは集団戦において愚策中の愚策だ。」

一誠「う、ごめん…それなんですが…部長は、どうなったんですか?」

玲士「あの戦いの後、アジアとお前を置いて他の眷属と共に冥界へと向かった、結婚披露宴の準備をする為にな。」

一誠「そう、なんですね…。」

その言葉を聞き、一誠は涙を流し始める。

一誠「ゴーストさん、俺…俺、なんて弱いんだ…部長に大見得切っておきながら…あんな無様に負けて…縁談を無しに出来る道を自分から潰して…俺は…。」

玲士「…落ち着け、一誠。」

一誠「…はい。」

玲士「そんなに、あんな奴が大事なのか? お前にはアジアがいるだろう? お前を転生させた理由もお前じゃなくその神器が欲しいから転生させたからだ。…それでも、奴を助けたいと思うのか?」

一誠「ゴーストさん…。」

一度目を瞑り…涙を拭いてゴーストを見据え。

一誠「それでも…それでも俺は部長を助けたいんです! 部長は家に縛られて…いつもグレモリーの名がついて回って、部長は一人の個人として見られてこなかった…! 例え、部長が俺の神器だけが目当てで転生させたとしても! 俺は! 部長の力になりたいんです! あの時、俺が無様に負けた時…部長が泣いていた…泣いていたんです…! 例え家が決めた事であろうと…部長が嫌がっていることを嫌々するのを、俺は見たくない…見たくないんです!」

玲士「…そこまで、そこまでなのか…これ以上俺は介入できない…考え直してくれなかったか…。」

そう思い、玲士は懐より一枚の紙を取り出す。

玲士「…兵藤、そこまで言うなら最後のチャンスをくれてやる。」

そう言いながら、その紙を一誠へと手渡す。

一誠「えっ？ゴーストさん、これは…？」

玲士「披露宴会場傍まで行く転移魔法陣が刻まれた紙だ、グレモリーの兄からお前に渡してくれとな。」

一誠「俺に、部長の披露宴に付き添えって言うんですか…部長の兄さんは…！」

玲士「たわけ、乗り込んで来いって事だ。グレモリーの兄には何か作戦があるようだ、お前は乗り込んでグレモリーは俺の物だとか言えば良いんだろうよ。」

一誠「俺が、乗り込む…ゴーストさんがじゃなくてですか？」

玲士「俺が乗り込めば確実に縁談を破棄できるだろうな、だが…そんなことをすればグレモリーの評価はダダ下がりだ、そこでグレモリーを想っていて最近眷属になったお前に白羽の矢が立ったというわけだ。」

一誠「…俺が、部長を…。」

玲士「行くのであれば準備していく事だな、どうあつてもライザーとの戦いは免れないだろうからな。もし部長を取り戻せたなら紙の後ろの魔法陣を使えとの事だ。」

一誠「ゴーストさん…。」

玲士「武器は貸さん、俺が手を貸したって事が広まるからな…だが、これぐらいはくれてやる。」

そう言い、懐から星の絵柄が描かれた角ばった球形のオレンジ色の小さなストラップを取り出し、一誠へと手渡す。

一誠「え、これって…！」

玲士「…投影品だ、お前がこの本を読んでいたのを見てな、投影しようとしたがうまくいかず角ばってしまった。」

「…今の俺には必要の無い物だ、お前が持つておけ。」

一誠「え、あ、ああそうだったんですね、ありがとうございます、ゴーストさん。」

玲士「…準備を怠るなよ？それじゃあな、頑張れよ。」

そう言い、魔方阵を展開して部屋を後にする。

一誠「…ゴーストさん、俺…頑張ります！」
そう言いながら懐にストラップをしまい、握りこぶしをつくり、一人呟く…。

場所はバイサーがいた廃墟…玲士はそこへ転移する。

玲士「…あとは兵藤の頑張り次第か…。その紙は無駄になったようだな、グレイフィア。」

そう言うと、白い魔法陣が展開してグレイフィアが現れる。

グレイフィア「ええ、その様ですね。ちゃんと渡してくれたようですよ。何よりです。」

玲士「あいつの本音も聞けたからな…あとは兵藤次第だ。」

グレイフィア「…聞きたいことがあるわ、何故あなたはリアスを嫌うのですか？」

玲士「…無能だからに決まっているだろう？ 出会った時からずっと無能無能無能無能…眷属の事すら把握もしようとしない奴など俺は嫌いだ、依頼でなければ助ける気すらおきん。」

グレイフィア「…そういう事にしておきましょう。」

玲士「…話は終わりか？」

グレイフィア「ええ、これからもリアスを助けてあげてくださいね、傭兵として、眷属として。」

玲士「眷属としては断る、俺は『人間』だ。」

グレイフィア「…そうですか、まあ良いでしょう、それでは失礼します。」

そう言って魔法陣を展開し、その場を後にする。

玲士「…この拠点もそろそろ潮時か、そろそろ退去するか。」

そう言いながら、家具を一つずつ消していき始める…。

第3章 月光校庭のエクスカリバー

第12話 狂信者

縁談騒動から数日後：玲士はアーシアが磔にされていた地下室にて通信をしていた。

玲士「…それは本当か？」

仲介者「ああ、マジの大マジだ、教会の方でも最近はそれに関してどたばたしてるらしいぜ。」

玲士「…そいつの目的は判明しているのか？」

仲介者「多分だがな。シャムハザイに連絡したら呟いていたのだが、恐らくそいつの目的は三勢力での戦争再開だ、場所は分からんが…可能性としては駒王町か京都で俺の予想レートは8：2だ。」

玲士「…レヴィアタンとルシファーの妹達か。」

仲介者「そういう事だろうな、シャムハザイに『依頼するか?』と聞いてみたら、古の大戦でも前線で生き残った歴戦の武闘派だから荷が重いだろからやめておくとのことだ。」

玲士「そうか、他に何かあるか？」

仲介者「…お前に長期契約の依頼をしようとしていた奴がいるんだが…正直奴らの行動的にお前は受けないだろうな。」

玲士「ほう？」

仲介者「依頼者名は奸雄…依頼内容は『共に人外に対し限界を試したい』とのこと…だが、問題はここからだ。」

玲士「奴等の行動、と言っていたな何をしている奴等だ？」

仲介者「…人の拉致だ、拉致された人物がどうなったかは分かっているか？」

玲士「…なるほど、確かにそれは受けるわけにはいかないな。」

仲介者「まあ、そういうことだ。ああそうだ、いつもの通りジヴリールから依頼も来てるぞお？」

玲士「はあ…断っておいてくれ。」

仲介者「ははは！おーけい！いつも通り断っておくぜ。じゃあさっ

きの二人には気を付けてな、ゴースト！」

そう言うと同時に通信が切れる。

玲士「…ふう、まったく…あいつ依頼主の姿を知った瞬間からからかうようになってきたな…。」

そう言っているとき目の前の自身の影の頭に猫の姿が現れる。

使い魔『ニヤツフ。』

玲士「む、シャドウか…なに?…待て、それは本当か…?」

使い魔『ニヤツ…。』

使い魔からの報告を聞いた玲士は顔をしかめる。

玲士「…チツ、厄介なことになったな…それで、奴等がどこに隠れているか分かっているか?」

使い魔『ニヤウウ…ニヤフ、ニヤフ…。』

玲士「…そうか、奴らの動きには気を付けてくれ、特にあいつは好き勝手に人を殺そうとするからな。というかもっと事前に知らせてくれ、木場が襲われてるだろう…。」

使い魔『ニヤウ…ニヤニヤツ!』

その言葉を聞くと同時に影に溶け込み、玲士はグレモリーへと通信を開始する。

玲士「…グレモリー、今は大丈夫か?」

「…フードを被った女二人…あいつの予想はほんと当たるな…。」

リアス『あら、ゴースト?丁度良いタイミングね。』

玲士「…なに?」

リアス『教会の戦士たちが明日話がしたいそうだから部室に来てほしいの、予定は大丈夫かしら?』

玲士「問題はない…が、俺からも報告することがある、十中八九それ関係でな。」

リアス『分かったわ、明日一緒に聞くわね?』

玲士「いや、今報告を…くそつ、あいつ通信を切ったか。…現在のルシファアの指示内容は『グレモリーの言う事を聞いてくれ』だからな…まあ、指示に従うとしようか。」

そう言うと同時にベッドに横になり、そのまま眠りにつく。

翌日、オカ研部室へと魔法陣にて転移すると、教会の戦士だと思いき二人が即座に剣を構える。

青髪「ツ！誰だ！」

玲土「…グレモリーの傭兵、ゴーストだ。貴様らが教会の戦士か？」

栗毛髪「え！あなたがゴースト!？」

リアス「遅かったわねゴースト、何かしていたのかしら？」

玲土「…時間指定しなかったのはお前だろう？それと指示通りお前はシャドウの監視対象から外してあるしな。いつ行けば良いか言わなかった貴様の責任だろう？」

「…こいつらからはあいつらと同じ気配がしない、あいつの部下から言伝で伝わった感じか？」

リアス「そ、そういえばそうだったわね…。」

青髪「…ガブリエル様の依頼を受けないと狼藉者だと思えばまさか悪魔に成り果てた屑だったとはな。」

玲土「俺は『人間』だ、あとそいつは別の名前で俺に依頼しようとしている…本名を出すなたわけ。」

栗毛髪「え、そうなの!？ちよ、ちよっとゼノヴィア!？」

玲土「…はあ、で？貴様ら2名がこの町に来た内容はなんだ？タイミング的に…堕天使に奪われた聖剣か？」

ゼノヴィア「ほう、状況を把握しているなら話が早い、私たちの目的は奪われた聖剣の奪還、そしてお前たち悪魔には不介入を約束してもらおう事だ。」

リアス「そう言う事よ、ゴースト。でも不介入とはいえこの町の安全の為の見回りは貴方をお願いする事になるわ、一般人の守護をお願いするわね。」

玲土「了解した。」

ゼノヴィア「さて、話自体は終わっていたから行くとしよう、時間を取らせてすまなかった。」

そう言うと二人は立ち上がり、ドアへと向かい…ゼノヴィアと言われた青髪の女がアシアの方へ視線を向け立ち止まる。

ゼノヴィア「…兵藤一誠の家を訪ねた時、もしやとは思ったが…
アーシア・アルジエントか？」

アーシア「あ、は、はい…。」

ゼノヴィア「まさかこんな地で、魔女に会おうとはな。」

アーシア「…ッ！」

栗毛髪「ああく！あなたが魔女になった元聖女さん？墮天使や悪魔をも癒す効果を持っていた為に追放されたとは聞いていたけれど…悪魔になっていたとはね。」

その言葉、アーシアはスカートの裾を掴み、震え始める。

アーシア「あ、あの…私は…。」

ゼノヴィア「しかし聖女と呼ばれていたものが悪魔とはな、堕ちれば堕ちるものだ。」

一誠「てめえ！いい加減にしろお前ら！」

そう言つて飛び出そうとするが小猫に腕を掴まれ、齒を食いしばつてその気持ちを抑える。

ゼノヴィア「まだ我らの神を信じているのか。」

栗毛色「ゼノヴィアく彼女は悪魔になったのよ？」

ゼノヴィア「いや…背信行為をする輩でも、罪の意識を感じながら信仰心を忘れられない者がいる。その子にはそう言う匂いが感じられる。」

栗毛色「ほえく？そうなの、ねえ、アーシアさんは主を信じているの？悪魔の身になってまで。」

アーシア「…捨てきれないだけです…ずっと、信じてきたから…。」

ゼノヴィア「ならば今すぐ私達に斬られるとい『バアンツ』ッ！…何を…？ゴースト。」

剣を手に取り、アーシアへ近づこうとした瞬間、眼前を弾が通り、壁に小さくクレーターを作る。

その弾丸を発射した人物、ゴーストの行動にその場にいる全員が驚き、視線を向ける。

玲土「黙れ、今貴様がしようとした行為は悪魔への敵対行為だ、アーシア・アルジエントはリアス・グレモリーの眷属になった、だという

のに貴様らの勝手な理由で断罪だと？何も理解していない狂信者共め。」

ゼノヴィア「なんだと!? 貴様、我らを侮辱するか!」

リアス「ゴースト! やめなさい!」

玲士「黙れ無能! 自身の眷属の危機すら静観する気か!? 屑が!」

リアス「ツ!? ゴ、ゴースト...?」

玲士「アーシアは聖女と呼ばれ、友を作ることすら許されぬまままるで道具の様に扱われていたそうだな...ふざけるな! 聖女である以前に一人の少女だろうが! 教会というのは自組織の意向に沿わぬやつを掌返して蔑み追い出し...挙句自分勝手な理由だけで命を奪うというのか!」

栗毛髪「そういうあなただつて金をもらつて命を奪っているじゃない!」

玲士「そうだな、ああそうさ! だけどな...俺だつて金を貰う以前に誇りがあるんだよ! 『依頼主の要望が悪でない事』、『人型の殺害対象が悪である事』などを条件に俺は依頼を受けてるんだよ! 無差別に悪魔だからなどという理由で命を奪おうとする貴様らと一緒にするな! 誇りも無くただ言われたままだけに敵を斬る貴様ら狗なんぞに斬る資格なんてないんだよ!」

一誠「ゴーストさん!...そうだ! ああそうだ! お前らにアーシアを斬る権利なんてねえ! お前らがアーシアを斬るというなら俺はイリナだろうとお前らを敵に回してでも戦つてアーシアを守ってみせる!」

そう言い、一誠はアーシアの前に立って戦士に向かって構える。

玲士「...イリナ...だと? そうか、あの栗毛色の髪...やはりイリナだったのか...」

ゼノヴィア「...ほおう? それは私達教会全てへの挑戦か? 一介の悪魔共が大口を叩いたな!」

木場「...ちようどいい、それなら僕が相手になろう、ゴーストから使い魔伝手で教えてもらったがタイミングが良かったようだ。」

ゼノヴィア「...誰だ? 貴様は。」

木場「…君たちの先輩だよ。ゴースト、すまないがその女は僕に任せてもらおうよ。」

玲士「…良いだろう、なら俺はイリナとやらを相手にする、アドバイスを一つだけくれてやる、復讐心だけで神器を使うな、負けるぞ?」

木場「…大丈夫さ、問題ないよ。」

ゼノヴィア「…ふん、裏庭を借りるぞ、リアス・グレモリー。行くぞイリナ。」

イリナ「うん!今更逃げて遅いからね!」

そう言い、二人は部屋を後にする。

リアス「…ゴースト、なんてことをしてくれたの…。」

玲士「そうだな、だが…貴様が眷属をどう思っているかはつきりと理解したぞ?所詮貴様はコレクション程度にしか思っていないのだな、だからアーシアを殺すと奴らが明言した時に即座に対応しなかったのだろうか?」

リアス「違う!剣を取ったら私だって攻撃したわ!まだ剣を取っていなかったから」

玲士「貴様の詭弁など一切耳に持たん、これからは単独で行動する、貴様は俺に『どのように、どうするのか』だけを伝えろ。それ以外の下らん言葉はいらん。行くぞ、木場。」

木場「ああ、分かったよ、ゴースト。」

そう言い、玲士と木場は窓から部屋を後にし、裏庭へと向かっている。

リアス「私は…私は…。」

その背中を見て、リアスは崩れ涙を流し始める。

一誠「部長…大丈夫です、俺らがついてます…。」

【ゴーストさん…一体どうしちゃったんだよ…。】

アーシア「そうですよ部長さん…。」

【…ゴーストさん、どうしてそこまで部長さんを…?】

慎士「許さねえ…あいつあんなこと言いやがって…!」

【チイツ…今のままじゃ無様に返り討ちだから攻撃出来ねえ…しかもガブリエルと知り合いだったとはなあ…!】

小猫「…ゴーストさん…。」

【…嫌悪感の他に…これは、嫉妬…?】

朱乃「…リアス、とりあえず裏庭へ向かいましょう。」

【…ゲームの時よりもさらに嫌悪が激しくなっていますわ…。】

リアス「…ええ、そうね…急がないと、行くわよみんな!」

眷属、s「はい!」

そう言い、ぐずりながらだがすぐに泣き止み、急いで裏庭へと向かっていく…。

第13話 教会の戦士との手合わせ

旧校舍裏庭：そこでゼノヴィアと木場が、ゴーストとイリナが互いに向き合っていた。

木場「：僕は宣言通り青い髪と戦わせてもらうよ、ゴーストさん。」
玲士「ああ、なら俺は左腕に武器を変身させているツインテールとだな。」

イリナ「っ！驚いたわ、確かあなたあの時いなかったはずなのに擬態の聖剣を見破っているなんて！」

玲士「戦士が何も持っていないのにアクセサリなんてつけてるとは思っていないからな。それに貴様らの聖剣の情報を俺は全て持っている、そこから可能性で割り出しただけだ。」

ゼノヴィア「：優秀な情報屋が相方だと聞いていたが本当だったとはな。」

玲士「さあな：野次馬も来たようだ。」

そう話しているとリアス達が遅れてやってくる。

リアス「まだ始まってないみたいね：戦うのは構わないけれど殺しちゃダメよ？ 兩人共。」

ゼノヴィア「ふっ、分かっている。」

イリナ「はい！」

しかし返事をしたのは教会の戦士だけで木場と玲士は一切返事をせず相手を見据える。

一誠「木場！ゴーストさん！頑張れよ！」

朱乃「うふふ、なら私が合図をしますわ？ 戦闘、始めてくださいな。」

その声と同時に互いに味方と離れ、戦う相手と向き合い。

木場「『魔剣創造』！」

玲士「まずは様子見だな：投影、開始。」

そう言つて、木場は周囲に様々な魔剣を生成、玲士は夫婦剣を投影し敵を見据える。

イリナ「さあ、行くわよ！アメン！」

その言葉と共に聖剣を刀へと変身させて玲士へと直進、小さく跳

び、落下すると同時に袈裟斬りをしかける。

それに対し玲士はわずかな動きで避け、バックステップで距離を取ろうとする。

イリナ「さあ！それそれえ！逃がさないわ！」

距離を取ろうとしている玲士に対し即座に追う様に跳び、連続の斬撃を以て肉薄していく。

玲士「…罅迫り合いはイリナが一瞬見せた変身能力からして危険だが…流石にこれであの堕天使と戦わせる気か…？戦闘の腕が無謀すぎるぞ…。」

イリナ「ふふん！私の強さに手も足も出ないみたいね！」

玲士「…いや、弱すぎて心配になっているだけだ。」

イリナ「な、なんですってえ！私は弱くないわ！」

その言葉に激昂し、唐竹割りを仕掛けるが…。

玲士「…こうすれば終わりだ。」

それに対し玲士は即座に左手の黒い剣で聖剣を防ぎ、右手の白い剣を手と罅の間に刺しこんで上に振り上げ聖剣を弾き飛ばす。

イリナ「あっ!?!あうっ…。」

玲士「そこまでだ、こっちは俺の勝ちだな。」

弾き飛ばされたことに驚き、即座に拾いに行こうとするが首に剣を突き当てられ、動きを止める。

イリナ「うう…！なんでそんなに強いのにガブリエル様の依頼を引き受けないのよ…！」

玲士「…戦闘系の依頼じゃないからな、それと…。」

武器を消し、拳を握りしめ、挟むように構えながらイリナへと近づいて行き。

イリナ「な、なに…？待って、その手の構え嫌な予感しかしない待って待って待っていだだだ！」

そしてイリナの頭を拳で挟み、ゴリゴリと回転させる。

玲士「うるさい！なんだあの動きは、武器の特性も理解せずただ刀に変身させて戦ってただけで、変身能力があるのに宝の持ち腐れだろうが！」

イリナ「だ、だつてゴーストが罅迫り合いさせてくれなかったんだもん！罅迫り合いしたら変身能力使つて攻撃したのに！」

玲士「駄々をこねるなわけ！お前が変身させた一瞬でどんな状況になれば一気に不利になるか即座に理解したから罅迫り合いをさせないように回避し続けていた！敵に有利な状況を作らせないのが戦いだ！」

イリナ「いだい！いだいって！分かったから手を放して！」

玲士「…ちっ。」

舌打ちしてイリナから手を放し、イリナは聖剣を拾いに行つてすぐ戻つてくる。

イリナ「うう…じゃあどう戦えば良いっていうのよ…。」

玲士「そんな事すら思いつかないのかお前は…剣で攻撃しながら別の形に変身させて敵の動きを制限させていけば良い、時には鞭のように紐状で攻撃したりとかな、わざわざ一つの形で戦う必要無いということだ。」

イリナ「な、なるほど…！」

玲士「おい教会の戦士…。」

感心しながら話を聞くイリナに頭を抱える中、剣と剣がぶつかり合う音とは別の鈍い音が聞こえる。

玲士「…あっちも終わったみたいだな。」

そう言つてゼノヴィア、木場の方へ目を向けると木場が地に倒れ伏しているのが目に入る。

玲士「…だから感情的になるなど言つただろう…しかも横目で見たが…真正面から打ち合う能力じゃないだろうに、お前は…。」

ゼノヴィア「次は冷静になつて挑んでくることだ、先輩…さて、ここまでだな。」

そう言いイリナと共に脱ぎ捨てたローブを取り、再び着なおす。

玲士「…待て、ゼノヴィアだったな？」

ゼノヴィア「なんだ？次は私と戦えというのか？」

玲士「違う、はつきり言つて貴様らは弱すぎる、それで今回の主犯格と戦うつもりか？…死ぬぞ。」

ゼノヴィア「…だろうな、それぐらい私たちも分かっている。」

イリナ「…覚悟の上よ、既に一人仲間が殺されてるし…。」

ゼノヴィア「墮天使に聖剣を使われるぐらいならこの身に変えても消滅させてみせるさ。」

玲土「…そうか、ならこれ以上は何も言わん。」

「…いくら狂信者に落ちたとはいえ…絶対に殺させはせんぞ、イリナ…。」

ゼノヴィア「片目で見てたが貴様の方が強いのは分かった、悪魔で無かったら教会を経由しても協力してほしかった所だ。」

玲土「俺は『人間』だと言っている。」

イリナ「それじゃあね！一誠くん、裁いてほしかったらいつでも言つてね！」

その言葉を残し、教会の二人はその場を立ち去っていく。

一誠「いやいやいや、自ら殺してくれなんて言いに行かないからな！？」

リアス「アーシア、急いで裕斗の治療をお願い。…ゴースト、私は…。」

玲土「俺は拠点に戻る、弁解など聞かん、指示だけをよこせ。」

そう言い、玲土は魔法陣にてその場を去って行く。

リアス「あつ…ゴースト…。」

慎士「良いんですかあんな勝手なことを許しても！」

リアス「…分からないわ、分からないのよ…私は眷属を大切にしている、彼も私の大切な眷属なのに、どうして理解してくれないの…。」

小猫「…部長、提案があります。」

リアス「どうしたの、小猫…？」

小猫「ゴーストさんは『指示だけをよこせ』と言っていました、なら…どうしてそのような態度を取るのかを聞けば良いのではないかと、指示であるなら話してくれるはずですよ。」

朱乃「後は今回の墮天使についてもですわね、彼は既に情報を持っているみたいでしたし。」

リアス「そうね…そう言う方法があったわね…。」

朱乃「でも、絶対に『眷属であることを認めなさい』なんていう指示は駄目ですわ、そんなこと言えば確実に見限りますわよ、彼。」

リアス「分かっているわ、彼の事は眷属であり傭兵である、傭兵として話をしてみるわ。小猫、裕斗を部室まで運んで頂戴。」

小猫「…はい。」

その言葉と共に、オカ研部室へと戻って行く…。

…場所は変わり、白き部屋、そこで一人の男が仕事をし、そこへ一人の女性が部屋へと入ってくる。

男「お疲れ様です、今日も教練を頑張っていましたね。」

女「はい、後悔を残さぬ為に頑張って皆さんを鍛えているんですよ。」

男「そうでしたか、しかし…何故3年前から急に始めるようになったのですか？」

女「3年前、私を助けてくれた方が説教してくれたのです、『永遠に引きづるような後悔だけはさせるな』と、ですから皆さんにも後悔を残させない為に鍛えているんですよ。」

男「そうでしたか、ですが確かその方は…。」

女「…はい、あの方が名乗った名前で調べてみましたが既に故人です…ですが、あの方が嘘をつくとは思えないのです…。」

男「…なるほど、だから傭兵の方にその方に似た容姿の方を捜索してもらおうというのですね。」

女「はい、ですがどの傭兵の方も見つけられず、傭兵の中でもよく名前を聞く方をお願いしようとしているのですが断られているのです…。」

男「…ふむ、別の事で忙しいのでしょうかね？」

女「はい、なんでも現在長期契約をして忙しいとのこと…。」

男「そうでしたか…ですがその方が偽名だとしてもいつか必ず会う事が出来るはずですからそれまで待ちましょう。」

女「ええ、では私は事務に戻りますね。」

そう言い、女性は部屋を後にする。

男「…ふむ、あそこまで興味を持つ方がいるのは驚きましたね。名前的に男の方なのでしょう、今までは少々心配ではありますが…しかし良い傾向なのでしょう、今まで自分から何かをしようとする事は少なかったですからね。」

そう言い、書面とのにらめっこを再開する…。

第14話 問答

グレモリー達と別れた後の夜…玲士は拠点にて軽く仮眠をとっていた。

その最中にグレモリーより通信が入り、目を覚ます。

玲士「…ん、グレモリーから通信か。…指示をよこせ。」

リアス『…ゴースト、私と話をして。』

玲士「…良いだろう。」

リアス『良かった…じゃあまずは今回の墮天使についての情報を頂戴。』

玲士「…ああ、今回この町に潜伏している敵は墮天使コカビエル、過去の三大勢力の戦争を前線で生き残った歴戦の手練れだそうだ。」

リアス『ツ！墮天使コカビエルですって…確か神の子を見張る者の幹部…！昨日、あなたが報告しようとしていた事だったのね…。』

玲士「…そう言う事だ、はつきり言っただけで奴と戦うのは危険だ、魔王ルシファーへの報告を俺は推奨する。」

リアス『…それは出来ないわ、私はこの町の管理者、魔王であるお兄様の手を借りるのは最後の手段よ。』

玲士「…自惚れるな、素人と何度も戦いを超えてきた猛者と戦って勝てると思うなわけ。」

リアス『…そうだけれど、裕斗が一人で敵を倒しに向かってしまったのよ…。』

玲士「そうか、祐斗の護衛をしろ、という事か？」

リアス『…いえ、シャドウで見張る対象に彼を入れてほしいのよ。』

玲士「…了解した。他に何かあるか。」

リアス『今回の敵、他には誰がいるのか教えてちょうだい。』

玲士「…了解、他にははぐれ悪魔祓い数人、中にはフリード・セルゼンの姿もある、後は木場の仇でもあるあの研究の元主任バルパー・ガリレイだ。…だが、フリード以外のはぐれ悪魔祓い数人の姿を見なくなつた。」

リアス『…奴らの目的は？』

玲土「…確定したことは分からん、前回墮天使に関する依頼を出した奴が言うには戦争を再開することだと。」

リアス『…そう、分かったわ。次に…なのだけれど、お願い、切らずに私の質問に答えて。』

玲土「…それが指示であるなら了解した。」

リアス『…じゃあまず、あなたの目的を教えて、あの時はぐらかされてしまったから…。』

玲土「教えん、指示には従う、がどう答えるかは俺が考える。」

リアス『…そう、じゃあどうして私にもそのような態度を取るの…？』

玲土「貴様の無能加減、詭弁に心底見損なったからだ、はつきり言つて、今すぐにも契約を切りたいほどにな。」

リアス『…ツ、そう…どうしてそう思うの？理由を教えて…私には分からないのよ…。』

玲土「…なら問う、木場裕斗、ギヤスパ、兵藤一誠、アーシア…この4人に神器が無かったら貴様は眷属に転生させていたか？」

リアス『…分からないわ、4人とも神器を持っていたから…。』

玲土「…なら質問を詳しくしてやる、もし、神器を持っていない兵藤一誠が墮天使の存在を知った為に口封じとして殺されて、貴様が悪魔稼業として召喚された時、貴様はどうした？そんな時が無かったからだというのは答えにならん、はつきりと、その場面に遭遇したらどう対応したかを答えろ。」

リアス『…転生させず、記憶処理だけして済ませていたと思うわ…。』

玲土「だろうな、貴様はフリードに殺された兵藤の召喚者を生き返らせもせず町の住人の記憶処理だけで済ませた、そんな考えしかできないから…俺は貴様と関わりたくないんだよ。」

リアス『…どうしてそこまで私を毛嫌いするの…？』

玲土「…はつきり聞きたいか？」

リアス『…分からない、でも、気になるのよ…。』

玲土「…そうか、だが教えん、その理由は俺の正体に繋がる事だか

らな。」

リアス「えっ…？ねえ、ゴースト…。」

玲士「なんだ？」

リアス「今、あなたの望みはその目的以外にあるのかしら…？」

玲士「目的以外か、そんなもの決まっている、人間の肉体に戻る事だ。」

リアス「…それは、無理よ…。」

玲士「…だろうな、現在のはぐれ悪魔の問題で貴様ら悪魔が無能だという事も理解出来ているわ。」

リアス『ツ！ゴ、ゴースト…？』

玲士「悪魔の駒…大戦時に著しくその数を減らした蝙蝠共が少数精鋭で戦力を補う為に造り出した自意識過剰な愚策、ライザーやソーナの様は眷属を大切にする悪魔はいるだろう。だが…それは少数で大半は貴様と同様に眷属を道具としてか見ていない、だからこそ元の種族に戻すという機能すらない一方通行の仕様だ。…『人間』から言わせてもらえばふざけるなよ蝙蝠が。」

リアス『…でもそれは悪魔の為に…。』

玲士「悪魔の為にだと？ふん、笑い話にもならん、人が死ねば輪廻転生する、しかしそれを貴様らが遮れば…冥府の奴がどう思うだろうな？その国の神話勢力はどう思うだろうなあ？それに…貴様の場合元の種族に戻す仕様があったとしても戻そうとしないだろう？『優秀な道具を手放したくない』からなあ！」

リアス『それ、は…。』

玲士「それが貴様の心底の考え、本音だ無能…ふん、話は以上だ、他に指示はあるか？」

リアス『…いいえ、もうないわ…。』

玲士「そうか、なら俺は指示を待つ。」

そう言い、通信を切断し、別の作業を開始する…。

時は経ち、その拠点に一人の訪問者が来る。

木場「ここに、ゴーストさんが…。」

玲士より拠点が必要ならここを使えと知らされていた。

向かう先はアーシア・アルジエントが磔にされていた地下、階段を下りていき、木場は一つの扉の前に到着する。

木場「ここ、かな…？失礼するよ、ゴーストさ…ん…!?」

扉を開けた先に目に映ったものに木場は驚く、それは体を拭いている黒髪のポニーテールの上半身裸の美人がいたからである。

木場「え、あ、す、すみません!？」

玲士「おや？ああ、木場くんでしたか。私ですよ、ゴーストです。」

木場「え、ええ!?ゴ、ゴーストさん!?じよ、女性だったのですか!？」

玲士「ツ?…ああ、仮面を外してましたね、よく女性っぽい顔と言われますが私は男ですよ。」

木場「で、でもいつもと声も口調違いますよね!？」

玲士「ああ、それでしたら…。」

そう言い、服を着て仮面を付け。

玲士「これで良いか？木場。」

いつも、グレモリー眷属が聞いている声に戻る。

木場「ほ、本当にゴーストさんだったんですね…でも変声機を使っていたのは驚いたよ…。」

玲士「お前は何を言っている？これも地声だ、仮面を付けている時、付けていない時で俺は意識せず声が変わっている、仕事のオンとオフ時に声で俺が判別されないように声を変えていたらそうなるってしまっとな。」

木場「そ、そうだったんですね…。」

【性格も変わってないかな…?】

玲士「ああ、だが俺の素顔はグレモリー達には言うな、言えば…分かるな?」

木場「…分かっています、それに僕は復讐の為に独断行動をして部長から離れていますから…。」

玲士「そうか…だがお前は一人ではない。グレモリーの眷属の中には感情で行動するお人好しもいるからな、数日以内にお前に無理やりにもかかわってくるだろうさ、グレモリーに内緒にしてもな。」

木場「…だけど、僕は…。」

玲士「お前は俺と違いあの輪の中の一部となっている…まあ、諦めることだ、無理にでも断ろうとすればあつちも無理にでも介入してくるぞ。」

木場「ゴーストさんは違うのですか？」

玲士「…なら、お前は俺について傭兵や能力以外に何か知っているか？」

木場「それ、は…分からない、です…。」

玲士「だろう？俺とお前では奴等との関わり方が違う、今回の騒動が終わった後お前は どうするつもりだ？」

木場「…それも、分からないです…復讐を目的に生き続けたから…。」

玲士「そうか…一生とは道だ、復讐であろうと悲劇であろうとそれは分岐路にしか過ぎない、選んだ道が生存であるなら道は続いていく、終わった後でも良い、目的を果たした後をどうするか、考えておけ。」

木場「…はい。」

玲士「…なら飯にしよう、材料はある、何か食いたいものがあれば言ってくれ。」

木場「え、えつと食べれる物なら何でも大丈夫です。」

玲士「そうか、なら適当に腰掛けて待っててくれ。」

そう言い、玲士は端の方にある調理場に向かい、調理を開始する。

木場「…復讐は分岐路か…復讐を果たせたら、僕は…。」

その姿を見ながら木場は言われたことを悩み続ける…。

第15話 歪んだ世界

リアスとの対話から数日後：墮天使陣営による一般人への害が特に無く、玲士は屋上にて一誠達の動向を見守っている。

玲士「：奴等の目的は戦争再開のはず、だが何故大きな動きをしない：？まさか、3人しか残っていないのか：？」

そう思いながら一誠達を見ていると、新たに一人の老人の姿が目に見える。

玲士「ツ？フリードと話している老人：あれがバルパーか。：ちっ、グレモリーから連絡か。」

突如現れた一人の老人を見ている最中、リアスより通信が入る。

リアス『ゴースト、今大丈夫かしら!？』

玲士「どうした？」

リアス『一誠達は見えてるわね?』

玲士「ああ、見えている、現在接敵中で敵は2名、フリードとバルパーだろう：む、敵の逃走を確認、木場と戦士2名が追跡を始めた、奴等が逃げる先には幹部がいるはず、危険だぞ。」

リアス『そう：指示をするわ、木場達の安全の確保をお願いするわ、私は一誠達を止めに行くわ。』

玲士「了解した、終われば連絡する。」

そう言つて通信を切り、屋上より跳んでハングライダーで滑空を開始する。

玲士「：戦士たちも奴らが逃げる先にコカビエルがいると思っていないのか、いや：あいつらの発言的に分かっても分かっていなくても追うしかないのか：。」

そう思いながら3人の追跡を続ける。

駒王町の中でも外れにある廃墟：3人がそこに入った後から出てないのを確認し：窓より突撃する。

フリード「ツ!?!ちよちよ、誰：ゲエッ!ゴースト!」

玲士「：敵を確認、フリード、バルパー：そしてコカビエルか：。」

「イリナ……まだ息はある……。」

そこにいたのは傷だらけで倒れているイリナ、そしてフリードとバルパー……宙に飛んでいる5対10枚の羽を持つ墮天使、コカビエルであった。

コカビエル「ほう……ゴーストか、今までの影から見られている感覚は貴様が原因だな？」

玲士「……答える義理は無い。」

「やばいな……まずはイリナを逃がするのが最優先か……。」

フリード「……旦那、どうしやすか？ラピッドリイとはいえこいつはきついですぜ……？」

バルパー「ふむ、自在に武器を出せる神滅具か、とても興味があるが……飼い犬に噛み殺されるのは困るから捕縛はできませんねえ……。」

コカビエル「ふん、俺の目的に邪魔になるなら奴は殺すだけだが……奴がここに来ることぐらい想定しているわ、あの無能姫は強い奴を当てれば倒せるだろうとしか思っていないだろうからな。」

イリナ「う、ああ……逃げて……ゴー、スト……。」

コカビエル「その女は逃がしてやるつもりだったが……貴様だけは逃がすわけにはいかんな、今ここで獣たちにその女もろとも食い殺されるが良い。」

そう言い、指を鳴らした瞬間、廃墟内で玲士たちを囲むように獅子の体、山羊の頭、蛇を頭の尾を持つ獣が現れる。

玲士「……キマイラか……。」

コカビエル「別に逃げても構わんぞ？……だが、逃げればその獣たちはどんな行動をとるだろうなあ……？行くぞ、フリード、バルパー。」

バルパー「ふむ、分かった、行くとしようか。」

フリード「喰い殺されるのは見ていかないんですかい？」

コカビエル「ふん、所詮悪魔になった程度の傭兵だ、この数のキマイラを相手に重傷以上で生き残れる訳がないだろう？」

そう言い、廃墟にある穴から飛び去って行く、それに続きフリード、バルパーの2名もその廃墟から消え、玲士、イリナと大勢のキマイラが残される。

玲士「…数が、きついな…シャドウ！」

【影が廃墟の陰に飲まれている奴らが多すぎる…温存しておきたかったがするしかないか…。】

その言葉と共にシャドウが巨大な姿で実体化し、玲士の隣に現れる。

玲士「…イリナを頼んだぞ。」

シャドウ「…ニヤフ、にやう…。」

その言葉を聞き、イリナを啞え、廃墟より跳び去って行く。

イリナとシャドウが逃げる姿を見るや、キマイラ達が一齐にシャドウ達へと襲い掛かる。

玲士「逃げる邪魔はさせん…！ 『こつちを見ろ』！」

しかしナイフを構えながらその言葉を発した瞬間、シャドウに襲い掛かったキマイラは動きを止め、全てのキマイラが玲士を狩りにかかる。

獅子による物理攻撃、山羊の顔からの毒霧、蛇の頭からの魔弾を回避しながら攻撃しているが獅子を殺せたとしても残りの頭が攻撃を仕掛け…じりじりと追い詰められていく…。

玲士「…ここまでか、やるしか、ないな。投影、開始…。」

そう言い、夫婦剣を投影して回避を続けながら更に集中し、詠唱を始める。

玲士「I am the bone of my sword

【お前は誰だ。】

Steel is my body, and fire is my blood

【この人生はお前の人生ではない。】

Not ■一度も理され ■Unknown ■敗もなく、
to Life

【この言葉に意味はない。】

stood pain with inconstant weapons
【この戦いはお前の戦いではない。】

My hands will never hold anything

【これは、俺の、俺達の物語だ。】

I have no regrets. This is the only p

【そしてお前は…。】

So as I pray, UNLIMITED BLADE WORKS

【正義の味方などではない、ただの■■だ。】

詠唱を終えると共に炎が広がっていき廃墟全体を包み…。

そこには歪な空間が広がっていた。

黒き炎が走る暗き雪原、無数に突き刺さる歪んだ武器、奥に見える鎖に封じられて動かない歪んだ歯車、歪みながら動き続ける歯車…その全てが歪んだ世界を見た獣たちは一瞬戸惑うが、すぐさま玲士へと襲い掛かる。

玲士「ぐ、うぐ…一気に殲滅する…！武器よ！敵を穿て…！『ブチッ』」

その言葉と共に手で合図をすると剣が飛翔し、キマイラ達へと襲い掛かる。

武器による制圧射撃、そして爆破による絨毯爆撃ともいえる攻撃にキマイラ達は消し飛んでいく。

1匹、また1匹と消し飛んでは息絶えていき…最後の1匹が息絶えた瞬間、世界は元に戻る。

玲士「ゴフツ…前、よりも消費、魔力量が…上がっている、のか…『ブチ』痛い、な…。だが、まだ、まだまだ…耐えてくれよ、俺の体…！」
体から血が流れていき、血だまりを作り始める。

玲士「…ああ、この状況、使え、るな…。」

そう言い、玲士は服から血を絞り、仮面を投げ捨てて新たな仮面を被り、その場を後にする…。

第16話 決戦

慎士Side In.

慎士「…おいおいおい、こんなん聞いてねえぞ、俺は知らねえぞ…。」
その者の目に映るは巨大な光の槍を構え、滞空する墮天使の姿。

慎士「本来ならもう白龍皇が来てあいつを倒してくれてるだろうがよ…！」

一誠「くそ、くそお！絶対に諦めねえ！いくら巨大になつたとしてももう一回砕いてやる！」

端に映るは絶対に敵わない者に挑もうとする愚か者の姿。

慎士「し、死にたくねえ…やつとあいつが死んだつてのに…やつと邪魔な奴が消えたのに…！」

コカビエル「ふん、女の乳を吸うという約束でそこまで強くなるのは驚いたがこれまでだ。あと4分…待たずに貴様らを葬ってくれる！」

そう言い、墮天使が光りの槍を射出準備に入り…。

コカビエル「さあ、死ぬが『ドゴオ』ツ!?が、あああああああ！！」

リアスチーム「ツ!?」

射出しようとした瞬間何かが羽を削り取り、墮天使を墜落させ、光の槍を消滅させた…。

慎士Side Out.

…少し時間をさかのぼり、ある建物の屋上に男は起きる。

服で隠されてはいるが体から血が流れ落ち、小規模ながら血だまりを作っている。

玲士「間に、あつたか…はあ、はあ…見つかつてはいない、奴を倒すチャンスは訪れる…今は、チャンスを待っただけだ…投影、開始…。」

『ブチ』

そう言い、対戦車ライフルを投影し、構える。

玲士「…我が骨子は、捻じれ狂う…偽・螺旋剣B…。『ブチブチ』」

螺旋状の剣を投影し、弾丸へと改造し、装填する。

玲士「：奴は的だ、敵意を向けるな、的はただ撃ち抜くだけ、撃ち抜く、だけだ：。」

そう言いながらスコープを覗きながら構える。

玲士「：ただ、ただ的を撃ち抜く事だけを考えろ、奴は的だ、動く的：殺そうと思うな、害そうと思うな：ただ、的を撃つ感覚で奴を見る：：！」

そう思いながら見ていると目標は飛び、巨大な光の槍を造り出し、対象へ向ける。

玲士「：このタイミングだ、逃さない：そこ！：『壊れた幻想』！」
狙撃をし、命中したかを確認せぬまま屋上から飛び降りて学園へと向かっていく。

玲士「：投影開始、トドメを完全に刺す：！時のある間に薔薇を摘め：『ザスッ』！ぐ、が、あ：！」

そう言い、赤い槍と短剣を投影し、高速移動しながら学園へと向けて走る。

学園を目前にし、飛び跳ねながら結界に赤い槍の切っ先を当てて消滅させ、短剣を構えながらコカビエルへと飛び掛かる。

玲士「：ッ！」

コカビエル「甘いわ：！『キーン』死にぞこないがああああ！」

しかしコカビエルは即座に両手に光の剣を生成し、短剣を防ぎ、薙ぎ払って吹き飛ばす。

玲士「：ぐ、とれなかったか：！」

コカビエル「ぐ、はあ：はあ：まさか不意打ちで両羽を持っていかれるとは思っていなかったぞ？死にぞこないの幽霊よ。」

一誠「ゴーストさん！良かった：生きてたんですね：！」

玲士「：ああ、一応は無事だが：きついな。」

そう言いながら高速でコカビエルに肉薄し、短剣で打ち合い続ける。

コカビエル「く、ははは！どうした？さっきの槍であれば俺の剣を消せるのであろう？：：：もしかやもう使えないのではないだろうか？

ふん！」

玲士「ぐう……だが、貴様をたおツ、ぐ、ああ……！」

吹き飛ばされ、再度着地し態勢を立て直して突撃しようとした瞬間、激痛が走り、転び滑っていき、コカビエルの前に倒れる。

コカビエル「は、ははは！……どうやらここまで様だなあ……？……簡単に殺してやらん、首を潰してくれる……！」

そう言い、光の剣を消して首を掴み持ち上げる。

リアス「そ、そんな、ゴーストが……！」

一誠「ゴ、ゴーストさん！動いて、動いてくれ！」

小猫「……させない！」

木場「やらせないよ！」

その言葉と共に木場、小猫、一誠が飛び掛かろうとする。

慎士「や、やめろ……！か、勝てねえ！……ぜつてえ勝てねえんだ！死ぬぞ……！」

【ぎ、ひひひ、あのまま殺してくれれば……ひは！……白龍皇が来るまでの時間を稼いでくれよお……？……ゴーストさんよお……。】

しかし、飛び掛かろうとした時に慎士が3人の服を掴み、静止させる。

玲士「ぐ、が……離、せ……離さない、なら……貴様は、負け、るぞ……。」

コカビエル「はつ、その体で何ができる？……貴様はもう死に体だろう？……ははははは！」

玲士「……ふつ、なら、貴様の負け、だ……！『ブチツ、ザシユザシユザシユ』がああああ！」

コカビエル「な、なに!?『ザシユ』ぬ、ぐおおおおおお！」

玲士の体より様々な武器が生え、服を貫いてコカビエルにも突き刺さる。

それによりコカビエルは痛みで玲士を手放し、刺さった箇所を抑える。

玲士「は、はは……倒し、切れなかった、か……。」

コカビエル「き、さ、まああああああ！許さんぞ！二度までも！その仮面ごと顔を握りつぶしてくれるわ！」

激昂し、そう言いながら顔を掴み、力を入れていく。

一誠「やばい！」

慎士「やめろ！一誠！無駄に殺されるだけだ！」

【やめろ！奴を助けたら奴が死ぬチャンスが消えちまうだろうが！】

一誠「離せ！」

その一言と一緒に慎士の手を振り払い、禁手を展開する。

一誠「離せ：『Boost』ゴーストさんを『Boost』：！離せええええええええええええええええええええええ！『Boost！Boost！Boost！Boost！』」

圧倒的な魔力を放出しながらコカビエルへと向かっていき。

コカビエル「なっ!?ぐおおおおお!!」

慣性のままに顔を殴り、コカビエルを吹っ飛ばす。

高速で吹き飛んだコカビエルは学園の壁に命中し、そのまま限界を迎え気絶する。

一誠「へ、へへ：やったぜ：！ツ！ゴーストさん！」

倒したことに喜ぶがすぐに玲士の元へ行き、武器に気を付けながら体を起こす。

玲士「：一誠、か：。」

一誠「ああ！ゴーストさん、やりましたよ：ゴーストさんのお陰でコカビエルを倒せたんですよ：！」

玲士「：そう、か、良く、やった：俺は、少し寝るとしよう：なに、まだ、致命、傷じや、ないから治せば、問題、ないはず、だ：アーシ、アに、頼んで、くれ：。」

そう言い残し、玲士は気絶する：。

第17話 目覚め

コカビエルとの戦いから三日後、旧校舎の一室にて玲士は目を覚ます。

玲士「…ここ、は…？ああ、そうか…気絶していたのか…。」
そう言つて玲士はベッドより身を起こし、自身の確認を行う。

玲士「…服は…ボロボロだがあの時の服か、仮面もつけている…この気配…木場か。」

そう呟いた瞬間、扉より水の入ったお盆を持った木場が部屋へと入ってくる。

木場「失礼しま…ッ！ゴーストさん、起きてたんですね！」

玲士「ああ、先ほどな。…ふむ、晴れた表情をしている、道は選ばようだな。」

木場「うん、ゴーストさんは部長を嫌っているけれど…やはり僕は部長に命を救われた恩がある、僕は部長の騎士として生きていくよ。」

玲士「…そうか。ならあいつを甘やかしすぎない程度に支える事だ、いつまで経つても全く成長しない奴だからな。」

木場「あ、あはは…。」

玲士「そういえばだが、俺の体が綺麗だがお前がやったのか？」

木場「そうですね、体を治すのは生徒会長やアーシアさん達が担当したけど身近な世話に関しては顔を知っている僕が担当したよ、前に顔を見られたくないって言つてたからね。」

玲士「それは助かった、もし顔を見られていけば消しに行くところだったからな。…さて、一応は顔を出しに行かねばな。」

「そう言つて立ち上がり、扉へと向かう。」

木場「すぐに動いて大丈夫ですか？」

玲士「腹は空いているが問題はない、こういう状況には慣れているからな。」

その言葉と共に部屋を後にし、木場と共に部室へと向かっていく。才力研部室、玲士が部屋に入ると一誠が驚き、声を掛ける。

一誠「ゴーストさん！良かった、起きたんですね！」

玲土「ああ、問題ない…が、他の奴等の姿が見えないがどこへ行っている？」

一誠「今は悪魔稼業の時間ですから俺と木場以外そっちに行っているんです。あとゼノヴィアがチラシ配りに。」

玲土「…む？ゼノヴィアと言えば確か青髪の…奴も眷属悪魔になったのか。」

木場「そうだね、実は聖書の神が既に死んでいて、それを知ったゼノヴィアがやぶれかぶれで悪魔になったんだ。」

玲土「…そ、そうか。いや、決めるのはあいつだからそれで良いなら別にかまわんが…。」

そう言っているとリアス、アーシア、ゼノヴィアの3人が部室へと戻ってくる。

リアス「今戻ったわ…って、起きたのね、ゴースト。」

玲土「…ああ。しかし連絡すると言ったのに連絡をしなかったのは謝罪する。グレモリーよ。」

リアス「構わないわ、私も最後までお兄様に連絡しないであの様だったし…。」

玲土「力の差ぐらいは把握しろ…今回だって奴が慢心して油断してたと奴が知らない方法で攻撃したから倒せたようなものだからな。…だが、反省するとは成長したようだな。」

ゼノヴィア「しかしあの攻撃は驚いたな…自身の体から武器を生やすとはな。」

玲土「ああ…だが、あれはただの自滅にしか過ぎん、魔力の使い過ぎによる神器の暴走、ああやって当てれたのも奴が慢心していたからだ。」

木場「…僕もあんな風になったりするのかい？」

玲土「いや、魔剣創造と俺の神器では仕様が違うからあんな事にはならん。…それと、ゼノヴィアはアーシアにちゃんと謝ったんだろうな…？」

ゼノヴィア「ああ、あの時についてはきちんと謝罪してアーシアからも許しを貰ったよ。そうだな、アーシア。」

アーシア「はい！ゼノヴィアさんとも仲良くなりました！」

玲士「そうか、それなら良い。」

ゼノヴィア「そういえばなのだがゴースト。」

玲士「む、どうした？」

ゼノヴィア「仮面の下を見せてくれないか？気になってしまったな。」

玲士「…断る、木場の時はたまたま事故で見せてしまったが俺の素顔は他者には見せんからな。」

ゼノヴィア「むう…そうか。」

一誠「そういえばゴーストさんって悪魔稼業はしないんですか？」

玲士「…悪魔になったつもりなど無いから悪魔稼業などするわけないだろう、それに俺は仕事の依頼とかもあるからな、人間からの依頼もあれば魔王ルシファーからの悪しきはぐれの討伐などもある。最近は騒動の連続でお前らが合宿に行っている時ぐらいしか人間の依頼を受けなかったがな。」

一誠「はぐれの討伐…悪しきって事はそうではないのもいるんですか？」

玲士「ああ、中には不利な条件などで半ば無理矢理悪魔に転生させられた者もいるしな、そう言う奴らの不満が爆発して主に反逆してはぐれになるというのがある。」

一誠「…そんな、ゴーストさんはそうなりませんよね…？」

玲士「俺はそいつの眷属のつもりはないと言っているだろうが…まあ、単独行動の許可などは魔王ルシファーからもらっているから問題はない。」

リアス「…むう。そういえばなのだけれどゴースト、明後日ぐらいにプール掃除をするのだけれどあなたはどうするの？」

玲士「いや、俺は休む、コカビエルの時の無理が祟ったようだ、さつきから筋肉痛が発生していな。」

一誠「え、また体内から…。」

玲士「そっちではない、高速移動のしすぎで筋肉痛になっているだけだ。」

一誠「あ、そ、そうだったんですね。」

玲士「用事があるなら通信で指示をよこせ、俺は拠点へ戻る。」

リアス「分かったわ…って、そうだったわ、アザゼルには気を付けなさい、一誠にも接触してきたからあなたにも多分接触してくるわ。」

玲士「部下の管理は無能だが奴自身は拉致誘拐はせん、話してみたいのとただの勧誘だろう。」

リアス「そ、それでもよ…。」

玲士「…はあ、今すぐにも契約を切りたいとは思っているが俺はルシファーに雇われている、裏切りなど傭兵の評価を下げる元だから契約期間中は絶対に他の奴にはつかん、安心しろ。」

リアス「…出来れば眷属としてずっと一緒に良かったけれど…そう、言ってくれると安心するわ。」

玲士「それと拠点については再度移す、遊びに来る感覚で拠点に客が来られるのは面倒だからな。」

リアス「分かったわ、何かあったら連絡して指示するわね。」

玲士「了解した、それではな。」

そう言い、魔法陣を展開して玲士は転移する。

一誠「…って、そういうえば白龍皇について教えてなかったんですが大丈夫なんですか？」

リアス「…すっかり忘れてたわ、まあゴーストなら大丈夫よ。」

ゼノヴィア「そういうえば木場は素顔を見ていたんだよな、どのような顔だったのだ？」

木場「うーん…ごめん、口止めされてるから教えられないよ。」

一誠「でもやっぱり下の素顔は気になるよな。」

アーシア「はい、でも顔バレは自体は私たちが広めなければ良いだけだと思うのですが…もしかしたら顔を見られたくないのでしょうか…。」

木場「いや、僕が見た時そんな反応はしていなかったよ。まあ、慎士くんが今のところ広めそうな感じだから見せないのだろうけれど…。」

ゼノヴィア「…もしかしたら見せたくない人がいたりしてな。」

リアス「流石にそれは無いはずよ、この中で私に会う前にゴーストに助けられたりした人はいるかしら？」

その言葉に今いる全員は顔を横に振る。

リアス「まあ、そうよね、それじゃあ他の皆が帰ってくるまで話をしていますよ。」

そう言い、グレモリーとその眷属達はそれぞれ会話をし始める…。

場所は変わり、白い部屋…そこで男は映像を見る。

男「…ふむ、慢心していたとはいえあの男をここまで追い詰めるのは、凄いですね。」

女「失礼します。」

そう呟きながら見ると、一人の女性が部屋へと入ってくる。

男「おや、ちようど良い所にきましたね、ゴーストが映っている映像が墮天使側より届いたので一緒に見ませんか？」

女「ゴーストさんの映像がですか？それも墮天使からと言う事は…。」

男「ええ、どうやら彼は悪魔になっているみたいですね、その地の管理者であるグレモリーの方がいますので。」

女「そうでしたか…。」

男「しかし彼は凄いですね、満身創痍の状態でコカビエルを追い詰めているのですから。」

女「コカビエルにですか？それも満身創痍で…見せてもらっても宜しいでしょうか。」

男「ええ、こちらの映像です。」

そう言い、その映像を見ていると女性の顔が驚きに染まる。

女「そんな、これは…まさか…。」

男「どうしたのですか？」

女「あ、あの、ここの部分、彼が持っている短剣を拡大していただけませんか!？」

男「え、ええ、分かりました。では拡大しますよ。」

そう言い、映像の一部分を拡大すると女性の顔が悲しみに包まれ始

める。

女「…そんな、そういうこと、なのですね…。 すいません、魔王ルシファアに連絡を、ゴーストさんに…いえ、レイジさんに会いに行きます…！」

男「ツ！レイジ、ですって？確かその彼は過去にあなたを助けた方の…。」

女「はい…間違いありません、この短剣はあの時に彼が持っていたのと同じナイフです…！」

男「…分かりました。アザゼルからも和平に関しての会議があるらしいのでそれと一緒に。」

女「お願いします…私は少々準備をしてきますね…。」

そう言い、女性は部屋を後にする。

男「…まさか、彼女の恩人が悪魔になつているとは…一体何が…？」

彼が今まで断っていた理由も本人だったからなのでしょう…。」

そう呟くと共に魔王ルシファアへと通信を始める…。

第4章 停止教室のヴァンパイア 第18話 再会

…現在、玲士は仲介者と言い争いをしている…。

玲士「…話は終わりか？」

仲介者「…終わりたくねえがループになるからな…頼むからそんなこと言わねえでくれ…。」

玲士「…すまん、俺はもう人間じゃない、戻る手段すらないからな…。」

仲介者「だけどよ…お前だって今まで我慢してきた分楽しんだっていいだろうがよ…！」

玲士「…死者は土に眠るのが相場が決まっている。」

仲介者「だけどよお！…いや、すまねえ…だけど忘れるな…悲しむ奴だっているんだぞ…俺だってその一人だ…それだけは忘れないでくれ…。」

玲士「…ああ。」

その言葉と共に玲士は通信を切る…。

玲士「…悲しむ奴がいる、か…すまないな、そうだとっても俺の心はもう決まっている…。」

通信を切つてそう思っているとき、リアスより通信が入る。

玲士「…どうした？グレモリー。」

リアス『あ…何か、あったの？何だか声が…。』

玲士「…少し喧嘩をしましてな、それでどうした？」

リアス『え、ええ。今お兄様が来てるのだけれどあなたを呼んで欲しいらしいのよ、来てくれないかしら。』

玲士「…今は特に何も無いからな、了解した、通信を切り次第魔法陣でそっちに向かう。」

リアス『分かったわ、じゃあ待ってるわね。』

そう言うと、リアスは通信を切り、同時に玲士は魔法陣を展開させる。

玲士「直接通信をしてこないとは何かあったのか？…ふざけた事
だったら流石に説教だな。」

そう言い、銃をホルスターに入れながら魔法陣に乗り、オカ研部室
へと転移する。

オカ研部室、魔王ルシファー、グレイファイアの2名が訪問し、現在
はゴーストが来るのを待っている。

リアス「…ふう、すぐにくるわ、お兄様。」

ルシファー「ああ、しかし彼が喧嘩をするだなんて一体何があった
んだろうか…つと、来たみたいだね。」

その言葉と共に魔法陣が展開され、その場へとゴーストが転移して
くる。

玲士「…今到着した、何か用か？魔王ルシファー。」

ルシファー「やあ、久しぶりだね、コカビエルの時は活躍したみた
いだね。リアス達を助けてくれて感謝するよ。」

玲士「…くだらん御託はいい、本題は何だ。」

ルシファー「あ、あはは…実は君に会いたいという人がいてね、ま
だ『敵』同士なんだけれどどうしてもと言う事で会わせたいんだが…
今は問題ないかね？」

玲士「…待て、敵と言ったな？」

ルシファー「そうだね、まだ和平の会議が成立していないから停戦
してるとはいえ『彼女』は敵なんだ。」

玲士「『彼女』だと…？」

【待て、まさか、悪魔の敵で女だと…？まさかあいつか、いつバレた？
何故バレた…？…いや、コカビエルの時にあの短剣を使った…まさか
あれか…？】

ルシファー「うん、今は待つてもらっているけど合図をすればす
ぐにこの部屋に来て」

玲士「…帰ってもらえ。」

魔王ルシファーの言葉を遮り、低い声でそう告げる。

ルシファー「…えっ？」

玲士「…頼むからあいつには絶対会わせるな。」

ルシファア「ゴ、ゴーストくん? どうしてなんだい?」

玲士「…聞くな。」

ルシファア「…しかし、彼女はもう我慢できないみたいで…。」

そう言った途端、オカ研部室の扉が開き、9名の女性が現れる。

一誠&慎士「お、おおお!」

最前列に立つ女性はとても美しく、スタイルが良い為に一誠と慎士が目を浮かばれ、下卑た顔を浮かべ。

近衛兵「ガブリエル様に下卑た視線を向けるな! 悪魔め!」

玲士「その視線を向けるな、バカ2名…!」

その瞬間、後ろに控えていた8人が即座に一誠と慎士に向けて肉薄し光の槍を向け、玲士はホルスターより銃を取り出して後頭部に銃を突きつける。

一誠&慎士「ひいつ!」

リアス「え、え!? ちよ、ちよつと! 話と違うわよ!? 敵対行動はしな
いって言ってたじゃない!」

ルシファア「あ、ああこれは一体どういうことだい? ガブリエル。」

ガブリエル「ご、ごめんなさい! 皆さん、槍を納めてください。」

近衛兵「…はっ。」

その言葉に応じ、近衛兵の女性たちは槍を消し、ガブリエルと呼ばれた女性の後ろへと戻っていく。

一誠&慎士「た、たすか」

玲士「つたと思ってるのか? たわけ共が…。」

一誠「ゴゴゴゴーストさんすみません! 下卑た視線送らないように我慢しますから銃をしまってください!」

玲士「…ちっ。」

その言葉を聞き、舌打ちをしながらホルスターへと銃をしまう。

ガブリエル「…うふふ、やはり、あの時と変わっていませんね。」

玲士「…何のことだ、俺は貴様の事など知らん。」

ルシファア「…え? でも彼女がここに来る前に会わせるなど…。」

玲士「…。」

一誠「え、えつとガブリエルって確か天使の…?」

木場「そうだね、天界の四大熾天使の唯一の女性で天界一の美女と言われているね。」

ゼノヴィア「あ、ああ。ま、まさかガブリエル様が来るだなんて…しかしゴースト、貴様はガブリエル様と知り合いだったのか!? 依頼での繋がりではなかったのか!」

そう問い詰められるが、玲士は問いかけに一切答えない。

ガブリエル「…どうして、答えないのですか…『コノエ、レイジ』さん…。」

玲士「ツ!」

その言葉に、玲士ともう一人、反応を示す者がいる。

一誠「えつ!? ま、待つてください…: どういうことですかガブリエルさん…! ゴーストがレイジって、どういう…! ツ! ゴーストさん、お前は、玲士、なのか…?」

そう言い、一誠は玲士の方へ振り向き、肩を掴んで弱々しく揺さぶる。

一誠「…どうして、どうして答えてくれないんだよ…! 10年も、10年も待つてたのに…! 長い間ずっと…: 心配してたのに…!」

玲士「…余計なことをしてくれたな、ガブリエル…。」

ガブリエル「えつ? あ…ツ! も、申し訳ありません…。」

一誠「ツ! やっぱり、玲士なんだな…。」

玲士「…ああ、今まで黙っていてすまなかったな…: 一誠。」

一誠「玲士…うつ、あ、ああ…。」

その言葉を聞き、一誠は涙を流し始める。

アーシア「イ、イツセイさん、レイジさんって確か10年前に死んだはずでは…?」

玲士「…いや、10年前、俺はある男に助けられて今もこうして傭兵として生きている。」

朱乃「ある男、ですか?」

玲士「もういない奴だ、お前らは知らなくてもいい。」

一誠「な、なあ玲士…: 顔は、顔は見せてくれないのか…?」

玲士「…はあ、分かった、顔を見せればいいんだろう。」

そう言つて、仮面を外し、フードを外してその素顔を明らかにする。

悪魔、s「なっ…!？」

小猫「お、驚きました…。」

グレイファイア「ゴースト様、女性だったのですか…!？」

玲士「いえ、私は男ですよ。よく女性っぽい顔とは言われますけれどね。」

ルシファー「い、いや驚いたよ、性格も変わってしまったてゐるみたいでね。」

玲士「仕事のオンとオフで顔バレしない様にしてたら自然とこうなつてしまつたんです。…もしこの事を流したら…裏切りとみなして殺害するのでお忘れなく。」

ガブリエル「懐かしいですね…あの時は仕事時の口調でしたが。」

玲士「ええ、そうですね…ガブリエルさんもちやんと日々を過ごすようになりましたか？」

ガブリエル「はい、あの時言われた言葉をずっと覚え続け、皆さんも鍛えあげてこのように。」

そう言うと同時に近衛兵の女性たちが羽を広げ、前の4人が3対6枚、後ろの4人が2対4枚の羽を持つている。

リアス「複数枚の羽持ちの天使がこんな…!？」

玲士「あなた方は確かあの時の…とても強くなつたみたいですね。」
天使「ふん、貴様が悪魔になつていゝのがさらに癪だがこれで貴様に頼らなくてもガブリエル様を守れるというものだ。」

玲士「…私は『人間』ですよ。」

ガブリエル「…レイジさん、聞かせてください。どうしてあなたは悪魔になつてゐるのですか？」

玲士「…あなたと出会つて1か月ぐらい後にグレモリーに眷属勧誘され、死んだ後に強制的に転生させられました。」

リアス「待つて、大事な部分はぶられてゐる！絶対勘違いされるからハブかないで!？」

ガブリエル「…無理矢理、転生させたのですか…？」

その言葉と共にガブリエルから光力が溢れ始める。

リアス「ち、違うわ！ハブかれていたけれど旧魔王派の男に殺されそうになったところを庇って彼が死んでそれで転生させたのよ！」

玲士「…確かあの時は眷属にならないと断ったらいきなり激情して攻撃を仕掛けて殺そうとしてきましたね…。」

リアスが弁明するも玲士による追撃でガブリエルはさらに光力が増していく。

ガブリエル「…サーゼクスさん？」

ルシファア「ま、待ちたまえ、それについては私も知らなかったんだ、今はリアスもちゃんとした判断ができるように」

玲士「そういえば眷属の半数が瀕死もしくは死亡した状態からの転生でしたね、さらにその半数が事後承諾によるものでそれ以外の死んでいない2名は半ば破れかぶれの状態の時に勧誘して転生させて」

リアス「お願い！私に恨みがあるのは分かったから今は火に油を注がないで!？」

魔王ルシファアが弁明しているのを遮り、更に火に油を注ぐように玲士が追撃をし、更にリアスが遮って制止させようとする。

そしてその4人の様子を遠巻きに置いてかれた者達は会話をする。

一誠「れ、玲士、なんでそこまで部長を…？」

アーシア「ゴーストさん、怒ってますね…。」

木場「…いや、多分当然だと思うよ…。」

小猫「…はい、これは…その、部長が悪いです。」

ゼノヴィア「…話は分かるんだが何故そこまで嫌っているのかが分からない。」

グレイフィア「確か一誠様はゴーストの幼馴染でございましたね？」

一誠「は、はい。玲士とはイリナと同じ大切な幼馴染です。」

朱乃「彼は正体を明かす前から一誠くんには何かと厳しくも大切に接していましたもの、彼にとっても大切な幼馴染なのでしょう。」

木場「それも、大切な幼馴染がはぐれ討伐依頼を受けて目を離れた隙に悪魔の管理する地で堕天使に殺されていた、となれば今までの部

長に厳しく嫌う態度にも納得できるね…。」

小猫「…さらに悪魔へ転生させたけど当時の理由は神器を宿していたからでしたから…。」

ゼノヴィア「…あく、確かにそれは…。」

アーシア「は、はい…部長さんには申し訳ないのですが何も言えませんが…。」

一誠「最初はそうだったけど今はちゃんと…って、そういえば慎士は…ッ!?し、慎士!?!」

先ほどから一切喋っていない慎士の方へと視線を向けるとそこには醜く、まるで親の仇を見つけたかのような憤怒の形相で玲士を睨んでいた。

木場「し、慎士君!どうしたんだいそんな顔をして!?!」

慎士「え、はっ!?ははは、だ、大丈夫だ、き、気にしないでくれ…。」
そう言われ、自分がどんな顔をしているか気づいた慎士は咄嗟に顔を戻し、苦笑いをして平静を装う。

グレイフィア「…では、そろそろ止めに入りましょうか。熾天使ガブリエル、文句を言うのはそこまでです、続きは三勢力の会議後でお願いします。」

ガブリエル「えっ、あつ、す、すみません。私ったら熱くなっちゃいました…。」

ルシファア「あ、あはは…。」

玲士「…そういえばあなたは何故私に会いに来たのですか?」

ガブリエル「ふえっ…?そういえば何故でしょう…?コカビエルとの戦闘映像を見せて頂いた時にレイジさんだって気づいて…。」

その言葉に本人と約1名を除き全員が呆れ、ガブリエルへと顔を向ける。

ルシファア「…って、おや…ガブリエル、申し訳ないですがそろそろ時間ですね。」

ガブリエル「あら〜そうでしたか…玲士さん、よろしければまた会いに来てよろしいでしょうか?」

リアス「え、そ、それはちよつと…。」

玲士「うーん…会いに来るのはやめてほしいですね。通信で良ければ暇な時の会話相手にはなりますよ。」

ガブリエル「はい！では時々通信させていただきます。それでは失礼しますね、皆さん、行きましょう。」

近衛兵「ハッ！」

そう言いながら一礼し、ガブリエルは近衛兵の天使と共に部屋を後にする。

ルシファー「いやはや…前はほやつとしている感じでしたが部下も含めとても戦力が強化されていましたね。」

グレイフィア「ゴースト様は何か彼女になされたのですか？」

玲士「あの時は…確か自身を大事にしないので説教を致しましたね。」

ゼノヴィア「ガ、ガブリエル様に説教をしたって無礼にもほどがあるんじゃない？」

玲士「その時の私は彼女が何者なのかも知りませんでしたし、これからの態度は変えませんよ。」

一誠「はは…玲士はすごいなあ、あんな美人と知り合いだったなんて、羨ましいぜ。」

玲士「そうでしょうか？私からしてみれば朱乃さんやアーシアさん、ゼノヴィアさんにグレモリーも美人の部類だと思っただけですが。」

一誠「いやまあそうなんだけどさ。」

リアス「…ねえ玲」

玲士「その名で呼ばないでください。」

グレモリーが名前を呼ぼうとした瞬間、即座に遮って拒絶する。

リアス「えっ!？」

一誠「れ、玲士!？」

玲士「…私とあなた達、純血の悪魔の関係は傭兵とその雇い主達です、私の傭兵時の名前はゴーストであり、真名を呼ぶことは絶対に許しません。」

そう言いながら仮面を付けフードを被る。

リアス「…分かったわ、ゴースト。」

一誠「玲士…。」

玲士「どうあつても、一誠が許したとしてもな、俺は絶対に貴様を許さん、貴様の無能な管理のせいで一誠が死んだ、そして転生は一誠の神器目当てだったという事実、裏切りはしないが絶対に許しはしない、それだけは覚えておけ。」

ルシファー「ゴーストくん…。」

玲士「…俺は拠点に戻る、用があれば通信をしろ。ではな…。」
そう言い残し、魔方陣を展開して玲士はその場を後にする…。

一誠「玲士…どうしてなんだよ…。」

グレイフィア「お嬢様、彼には彼の想いがあります、過ぎてしまったことはもう取り返しがつきません。」

リアス「…分かっているわ。」

慎士「…すみません、少し席を外します。」

小猫「…ゴーストさんの事を広めたら殺害されますよ?」

慎士「ちげえよ!それぐらいしつかり聞いてたって小猫ちゃん!」
そう言いながら慎士も部屋を後にする…。

その後、慎士は自宅へと帰宅していた…しかし…。

慎士「ふざけるな…ふざけるなふざけるな!ぜってえぶち殺す、許さねえ…あいつは俺の女だ、殺してやる…あの時あいつを助けやがったクソ無能な野郎もぜってえぶち殺してやる…。」

自室にて歪んだ顔で武器を研ぎ始める…。

第19話 授業参観

正体を明かしてから翌日…玲士は拠点にて魔王ルシファーと通信していた。

玲士「…貴様から通信とは珍しいな、何の用だ。」

ルシファー『そうだね、実は今日なのだけれど駒王学園で授業参観があるんだけど、君も来ないかい？使い魔越しではなくちゃんと自分の目で一誠くんの日常が見れるチャンスだけれど。』

玲士「授業参観か…ふむ、良いだろう、時間は同じなのか？」

ルシファー『いや、1時間遅く始めて授業の時間も3時間分だ。』

玲士「分かった、だが…俺には接触するな、貴様らに名前を呼ばれない。」

ルシファー『分かっているとも、私はリアたんの撮影があるからね！』

その言葉を聞いた瞬間、玲士は足が滑り、思いつきり転ぶ。

玲士「…つつ、唐突にシスコンを出しやがったな…お前が何をしようと思った事ではないが…一応日常でそれはやめてやれ、あいつの顔が真っ赤になるぞ…。」

ルシファー『ははは、ではまた今度、次は恐らく駒王での三勢力会議で会おうか。』

玲士「はあ…了解した、ではな。」

そう言って通信を切り、支度を開始する。

普段着へと着替え、髪をとかし、間違えて武装していないかを確認する。

そしてその準備をしている時、突如通信が入る。

仲介者『いよつすゴースト、依頼が来たぜー！』

玲士「おや、依頼ですか…申し訳ありません、今回の依頼は別の方にお願ひします。」

仲介者『おおう!?この時間でそっちとは珍しいな、今日は何かあるのか?』

玲士「実は幼馴染の授業参観が今日あるらしくそちらへ行きたいと

思ってますして。」

仲介者『幼馴染…ああ、そうかそうか！やつと正体明かして普通に話せるようになったんだな！良かったじゃないか玲士！』

玲士「ええ、ですが私は傭兵ですからこの様な大切な行事以外ではそちらを優先しますからご安心を。」

仲介者『うーん…そうかあ、いや、まあ分かったけどよ、幼馴染との時間も大切にしろよ？』

玲士「ええ、分かっています。それでは失礼しますね。」

仲介者『おう！それじゃあな玲士。』

そう言い終わると同時に通信が切れる。

玲士「さてと、では行きましょうか…ふふ、楽しみですね。」

そう言いながら微笑み、拠点を後にする。

場所は駒王学園…今日は授業参観という行事があるが例年以上に騒がしくなっていた。

女子A「誰あの子…凄く綺麗…。」

女子B「どこの生徒なんだろう…？でもあんな子の噂聞いたことないし…。」

男子A「やつべえ…誰の親戚なんだろう？この学校に転入するのか…？」

一人の訪問によってその場の生徒たちはその話でもちきりであった。

玲士【確か一誠の教室は2階のはず…こちらでしようか？】

その人物、それは普段着の状態にいる玲士であった。

2階への道が分からず、壁に貼られている地図を確認している時一人の男子生徒が声を掛ける。

男子「あ、あの！お困りでしたらお手伝いしましょうか!？」

玲士「おや、よろしいのですか?」

男子「え、ええ！存分に頼ってくださいー!」

玲士「ふふ、ありがとうございます。私の幼馴染の教室を探しているのですが初めてきたものでして、場所が分からないのです。2―B

の教室はどこでしょうか？」

そう微笑みながら質問をし、その表情、仕草で周囲の生徒たちを性別問わず魅了する。

男子「に、2—Bの教室でしたらあちらの曲がり角の階段を昇った先の二つ目の教室が2—Bです！看板にも書かれていますので案内しましょうか!？」

玲土「お気持ちはありがたいのですが階段を昇ってすぐでしたら大丈夫ですね、教えてくださってありがとうございます。では失礼しますね。」

一礼しながらそう言い、男子生徒の隣を抜けて階段へと向かっていく。

男子「あ…ああ、すごい、ふつくしい…。」

その後、声を掛けた男子は惚けてチャイムが鳴るまで立ち尽くしていた。

生徒たちの視線を集めながら2—Bの教室へと到着すると、その扉を開け、中に入る。

その姿に気づいた生徒全員やその生徒たちの親は生唾を飲み込む。

そして玲土を知るアーシアやゼノヴィアはすぐさま立ち上がり、玲土へと近づき声を掛ける。

アーシア「…あつ！ゴ——」

玲土「近衛ですよ、アーシアさん。」

アーシア「はわっ!?!す、すみませんコノエさん!」

自身が危ない発言をしようとしたことに気付き、口に手を当てながら謝罪をする。

玲土「ふふ、アーシアさん達はこちらの教室だったのですね。」

ゼノヴィア「ああ、しかしコノエが来るとはな、今日は仕事は良いのか?」

玲土「ええ、あちらに言っただけ今日は休ませていただきました。」

そう話していると、3人の生徒が近づいてくる。

眼鏡女子「へえ、アーシアちゃん達の知り合い? 私は桐生っていうの、よろしくね。」

坊主「お、俺は松田っていうんだ、よ、よろしくな近衛さん！」
眼鏡男子「ぬ、ぬう!?!わ、分からん…この俺の眼鏡をもつてしてもスリーサイズが分からないだと…!?!」

玲士「ええ、初めまして。私は『一誠の幼馴染』の近衛と申します。」
生徒、s「「え、っ!?!」」

そう言いながら一礼するが、ある言葉を言った瞬間に教室の空気が凍りついていた。

松田「こ、こここ近衛さん、いい一誠のお、おお幼馴染なんですか!?!」

桐生「驚いたわね…ここまでの美人がああ兵藤の幼馴染だったなんてねえ。」

玲士「ええ、7歳まで一緒に遊んだりしていたのですが親の都合で引越すことになってしまって、ついこの間仕事でこちらに来た時に一誠の授業参観があると知り、見に来させていただいたのです。」

眼鏡「ぐぬぬ、分からん…!?!じゃない、一誠の幼馴染だどお!?!許せん!こんな美女が幼馴染だどおおお!」

ゼノヴィア「む?近衛は」

玲士「ゼノヴィアさん。」

ゼノヴィアが真実を喋ろうとした瞬間、口の前に指を持っていき遮る。

玲士「そういえば一誠はどちらへ?是非ともお話をしたかったのですが。」

アーシア「今は少し逃げてしまわれて…。」

玲士「おや、そうでしたか、ではこちらで待たせていただきますしよう。」

桐生「そういえば仕事って言っていたのだけれどどのような仕事しているの?」

玲士「そうですね…国を移動する派遣社員のようなものですね。」

松田「く、国を移動する!?!でも派遣って事はそこまで稼ぎは…。」

玲士「稼ぎに関しては私の相方である仲介の方が言うには良いそうですよ?」

元浜「なん、だと…!?と言う事は体を使ったお仕事…!?」

玲土「体を使う…確かにそうですね、害獣を駆除したり毛皮を集めたりと体を動かしますね。」

質問されている意味を理解出来ず、素直に答えると周囲の生徒からはさらにどよめきが走る。

桐生「…そ、そういう意味じゃないんだけど…狩猟とかもするなんて凄いわね…でもアーシアちゃん達とも知り合いだったなんて驚いたわね。」

アーシア「はい!コノエさんには時々料理を作ってもらっていておいしくてすごいですよ!」

ゼノヴィア「木場から聞いた話だが裁縫とかも上手で掃除も素早く綺麗に出来るらしいぞ。」

元浜「そして家庭的!?や、やばい…超優良物件ではないか!」

松田「羨ましい…こんな美人が幼馴染なんて羨ましいぞおおおお!」

玲土「ふふ、私もまだまだですよ。」

そう言いながら口に手を当てて微笑む。

男子、s【「ちくしよう一誠許せねえ!」】

その瞬間、クラスとその近くにいた男子共は全員が心の中で叫ぶ。そして会話をしながら時間が経過していき、一誠がクラスへと戻ってくる。

一誠「ふー、危ない危ない、遅れ」

男子、s【「死ねえい一誠!」】

それと同時にクラスの男子が一斉に一誠へと襲い掛かる。

一誠「お、お前ら何をぬわー!」

松田「ちくしよう!お前あんな美女と幼馴染だと!?許せん!」

元浜「俺はロリ趣味だが流石にあれは羨ましすぎるぞこの野郎!」

一誠「いたたた!何が、一体何がなんなんだよ!」

その様子を遠めから玲土ら4人は眺め、話し続ける。

桐生「うわあ、すごいわねえ。」

玲士「あら、ふふふ、仲が良いですね。」

アーシア「はわ、イツセーさん大丈夫でしょうか？」

ゼノヴィア「あれは大丈夫なのか？」

そう言いながらその光景を眺めていると、扉より二人の男女が教室へと入ってくる。

男「確かここで合っていたはずだな？」

女「ええ、一誠はえーつと…あらあら、あそこでみんなと仲良くしているわね。」

その二人を見て、玲士は驚き、すぐに近づいて行く。

玲士「お久しぶりです、一誠くんのお父さん、お母さん。」

兵藤父「えつ…んん？君は…いや、その綺麗な黒髪にポニーテール…！まさか玲士『くん』かい！？」

生徒、s「…えっ!?!」

その発言に、クラスの生徒たちは再度凍りつく。

兵藤母「あらあら、こんなに綺麗で大きくなっちゃって…心配したのよ？10年前いきなり家が倒壊してしまっていて…。」

玲士「あの時は本当に申し訳ありません、実は海外へといきなり引越すことになってしまって挨拶も出来ず…それも引越したその後すぐに家が無くなっていたとも知らず…。」

兵藤父「いやあ、だが元気そうでなによりだよ玲士くん。」

玲士「ふふ、ええ。」

桐生「え、ちよ、ちよつと待って？近衛さんって男なの…？」

玲士「ふふ、ええ、私は『男』ですよ？」

男子、s「…なん…だと…!?!」

その事実を知り、一斉に男達は地面に手を付け、うなだれて落ち込む。

松田「あ、あんなに美人なのに…っっているだなんて…。」

元浜「世界とは何て残酷なんだ…!」

一誠「いっつっつ…玲士！敢えて男だって言わなかったな!」

玲士「ふふふ、ごめんね一誠、海外でもよくそう言う事もあったので試してみたくなったのです。」

一誠「全く玲士はー…でもどうして授業参観を？」

玲士「実はグレモリーの兄から教えていただいたのです。どのよう
に過ごしているか見てみたくて…皆さん仲がよろしいみたいで何よ
りです。」

一誠「な、なるほど…。」

そう話している最中、チャイムが鳴って生徒は着席し、授業が始ま
る。

一誠がリアスの像を作って簡易オークションが始まったりと何か
と騒動があったが授業は終わり、玲士は兵藤夫妻と共に人がいない広
場で会話をする。

兵藤父「…そうか、引越した後に病気で二人共…。」

兵藤母「それで傭兵にね…とても、とても大変だったわね…玲士く
ん。」

半分は嘘でもあるが半分は事実である話に二人は涙を流し玲士を
撫でる。

玲士「…ええ、ですが、それでも一誠やイリナが元気そうだなによ
りです。」

兵藤母「ええ、ちよつと変態に育っちゃったけれどもリアスちゃん
やアーシアちゃんのような可愛い子達にも好かれて孫の顔が楽しみだ
わ。」

玲士「ふふ…そうですね、昔から一誠は単純ですが誰かを助けるた
めに感情で動く方でしたが間違ったことはしていませんでしたから
ね。」

兵藤父「玲士くんにもそういう子はいないのかい？」

玲士「うーん…いない、ですね。恋愛や好きというのがどういうも
のが分からないので…。」

兵藤母「あらあら、今からでも遅くないわ、頑張つて良い人を見つ
けるのよ！」

玲士「あ、あはは…頑張つてみます。…ツ！さて、では私はホテル
に戻りますね。」

一瞬だけ視線を別の方向へ向けるが、すぐさま兵藤夫妻へと移し、

去ろうとする。

兵藤父「おや、夜は一緒に食べていかないのかい？」

玲土「ええ、それはまた今度に致します。ではお二人共お元気で。」
そう言つて一礼し、その場より去つて行く…。

第20話 駒王会議その1

授業参観から数日後…玲士は拠点にて通信をしていた。

玲士「それは駄目だな、数日に一度ぐらいは1日体を休める事だ。」
ガブリエル『そうなのですか？しかしそれでは鍛えた体が戻ってしまうのでは？』

通信相手はガブリエル。現在は依頼も無く暇であったので雑談をしていた。

玲士「逆に1日の休む時間が足りないことが問題だ。それを毎日繰り返していたら、疲労が蓄積されて動きが悪くなる。暇な日を作り一日休みにして次の日から修行の時間を少しは減らす事だ。」

ガブリエル『そうなのですね…分かりました。では駒王学園での会議が終わりましたらその日を休日致しましょう。』

玲士「ああ、それが良い…って、あそこで会議だと？」

ガブリエル『はい。サーゼクスさんから連絡はまだきていなかったのですね。二日後の夜に三勢力が集まったの会議がありました、和平の会議が開かれる予定になっています。』

玲士「…和平か、下らん。」

ガブリエル『…えっ？どうして、ですか？』

玲士「…天界は教会関連、墮天使は底辺墮天使関連、悪魔は旧魔王派に上層部関連の問題があるというのにそれが終わっていないのもかかわらず和平だと？自勢力の問題すら解決出来ていないくせに何を言っているのやら…。」

ガブリエル『それは…みなさんで力を合わせて解決すれば…。』

玲士「悪魔も、天界も、墮天使も人間も…凝り固まった無駄な思想をすぐに取っ払うのは不可能だ。トップの思想が変わったとしても、それ以外の奴等が変えられるわけなど無かろう？下級墮天使は他種族を心の中で見下し、貴族悪魔も同様、下級天使もだ、ついでに悪魔祓いに一部の教会のトップもだ。」

ガブリエル『…それ、は…。』

玲士「すまん、お前に非はないのに言い過ぎた…ガブリエル、お前

を利用したい。頼みごとがあるが出来るか？」

ガブリエル『利用、ですか？』

玲士「ああ、俺の口から言ったところでは変わらないだろうからな
…悪魔の駒に、はぐれ悪魔に関してだ…。」

ガブリエル『：はぐれ悪魔：確か王の駒を持つ主から離れた者達が
呼ばれる総称ですね？』

玲士「そうだ。はぐれ悪魔は自ら望んでなった者になるが、その中
には力に溺れなかった者もいる…過去に遭遇したはぐれ悪魔にはそ
のタイプが何人かいたからな。」

ガブリエル『：分かりました。私も会議には出席いたしますのでそ
の時に提案してみますね。私も似た様なタイプのはぐれ悪魔の方
にお会いしたことがありますので…。』

玲士「ああ、すまん…：利用することになってしまつて。」

ガブリエル『いえ…：玲士さんには助けられて、教えられてばかりで
すから、玲士さんの役に立てることがあつて嬉しいです。』

玲士「そうか…：つと、すまん。そろそろ睡眠の時間だ。」

ガブリエル『あら、そうでしたか…：もつとお話したかつたので
すがそれでは仕方がないですね、はぐれ悪魔や悪魔の駒に関しては任せ
てください。』

玲士「ああ、任せる…：ではな、ガブリエル。」

ガブリエル『はい。お休みなさい、玲士さん。』

その言葉を聞き、玲士は通信を切る。

玲士「…明後日、か…：そういうえばギヤスパアの奴が部屋から外に出
ていたな…：大方上層部がリアスの力なら扱えると判断したのだろう
が…：今のあの無能では扱い切れるわけなど無いだろうが、全く。」

そう言いながら、玲士はソファアにて睡眠をとり始める…。

二日後…：玲士は拠点にて支度をしていた。

玲士「…さて、準備は出来たな…：つと、無能からの通信か。」

そう言いながら通信を開く。

リアス『ゴースト、今問題ないかしら？』

玲士「遅いわ戯け。連絡は当日、それも数十分前ではなく数日前にしろ無能。」

リアス『いきなり酷くないかしら!』

玲士「ふん。それで、三勢力での会議についてだろうか?」

リアス『知っていたの!』

玲士「数日前にガブリエルから教えてもらってな。冥界に行っていたのだからがちゃんと連絡ぐらいしろ。」

リアス『わ、分かったわ…。』

玲士「それで…そつちに向かうがギヤスパアの奴は連れて行くのか?」

リアス『ギヤスパアは部屋に置いて行くわ。でも、どうしてギヤスパアが外に出ているのを知っているのかしら?』

玲士「独身総督がこの町にいるのを確認してから、ずっと監視していたからな。木場目当てでオカ研部室裏の庭に来ていた時に、ギヤスパアが外に出ているのを確認した。」

リアス『そうだったのね。』

玲士「さて、ではそつちに向かうぞ。」

そう言うと共に通信を切り、魔方阵を展開する。

玲士「…和やか。恐らく旧魔王派系列の奴等が攻めてくるというのに全く…。」

魔方阵に乗り、オカ研部室へと転移をして拠点より消える。

場所はオカ研部室。玲士が転移して来ると同時に、一人の少年が駆け寄ってくる。

少年「ゴーストさん!」

そして名前を呼ぶと同時に抱き付き、上目遣いで顔を見る。

玲士「おっと…ギヤスパアか。元気になっていたようだな?」

ギヤスパア「はい!」

リアス「来たわね、ゴースト。」

玲士「ああ、場所はどこだ?」

一誠「確か会議室でやるって言ってたぜ、玲士。」

玲士「そうか。」

ギヤスパー「ほえっ？ゴーストさんの本名ですか？」

玲士「…そうだな、だが一誠、俺の名を不用意に広めるなど言っただろうが、戯け。」

一誠「えっ、あつ!?ご、ごめんゴースト。」

玲士「はあ、もう遅いわ。ギヤスパー、俺が玲士である事は広めるなよ?」

ギヤスパー「はい!ゴーストさん!」

リアス「会議なのだけれど、護衛として小猫を此処に置いてい行くことにしたわ。」

小猫「…はい。任せてください。」

玲士「そうか、気を付けろよ小猫。十中八九襲撃があるだろうからな。」

リアス「えっ、どういう事!?!」

玲士「…それぐらい自分で考えろ。十分過ぎる理由があるだろう。そう言いながら玲士は魔方陣を展開し、そこから転移して才力研部室を後にする。」

リアス「えっ、ちよつと!?!会場への直接転移は失礼って。」

アーシア「い、行っちゃいましたね。」

慎士「おい…敵が襲撃してくるって知ってるってあいつまさか」

小猫「…それはないです。」

何か浮かんだように言おうとした慎士の言葉を遮り、即座に小猫が否定する。

慎士「ちよつとまだ何も言っていないだろ!?!」

小猫「…大方敵を手引きした裏切り者とでも言おうとしたんですよ?カマセ先輩。」

慎士「えっ、いや…そうだが…。」

ゼノヴィア「ほう、小猫は慎士について理解しているのか?」

小猫「…いえ、理解してはいませんが、彼のゴーストさんに対する態度で予測は簡単ですから。この人は何が何でもゴーストさんを敵に仕立て上げようとしていますので。」

一誠「なっ!? どういうことだ慎士てめえ!」

そう言いながら一誠は慎士の胸ぐらを掴み、睨む。

慎士「うつせえ! じゃあなんで敵が襲撃してくることを知っているんだよ! 手引きしてるとしか考えられねえだろうが!」

朱乃「あらあら? 彼は理由があると言っていましたわよ? その理由は何かあるはずですわ。」

慎士「だからあいつが手引きを…。」

木場「いや、そういうわけではないだろうね。襲撃がある理由にはならない。彼は裏切りはしないと明言しているからね。」

一誠「そうだ! だけど…じゃあ襲撃される理由ってなんだ?」

リアス「…っ! なるほど、和平の会議…!」

木場「なるほど、三勢力にとって重要な会議…それに対し反対の者達がいる!」

朱乃「ええ、旧魔王派…ですわね。」

リアス「小猫、ギヤスパ…: 私たちが会議に行っている間敵襲には気を付けなさい、良いわね。」

ギヤスパ「は、はいいい!」

小猫「…分かりました、頑張ります。」

リアス「私たちも急ぐわよ、恐らくあっちははれい!」

一誠「部長!」

その名を呼ぼうとした瞬間、即座に一誠が遮る。

リアス「…っ! そうだったわね…: あっちはゴーストが伝えているはず。とりあえず行くわよ、みんな。」

オカ研部員「はい!」

返事と共にドアより部室を後にし、小猫とギヤスパ以外の部員は会議室へと向かう。

第21話 駒王会議その2

時は少し遡り、駒王学園会議室。そこでは各勢力のトップが集まっていた。

悪魔勢力は、魔王サーゼクスとその『女王』であるグレイフィア。魔王セラフォルとその妹であるソーナ。そして、ソーナの『女王』である椿姫。

天界勢力は、熾天使ミカエルとガブリエル。そして、ガブリエル直轄となる近衛小隊の6枚羽の4名。

墮天使勢力は、総督であるアザゼルと銀色の髪的青年。

互いに机を囲み座っている中、部屋に魔方陣が展開され、そこに玲士が転移してくる。

アザゼル「おわっ!?!な、なんだ!?!」

サーゼクス「おや、一人で来たのですねゴーストくん。」

玲士「ああ、それとお前が俺の雇い主だろう。まさかとは思うが…あいつの眷属として来るとでも思っていたのか?」

サーゼクス「あはは…それもそうだね。では、その壁の所に立っていきな。」

玲士「了解した。」

その言葉を聞き、玲士は椿姫の隣となる少し離れた部屋の隅にて壁に背をもたれる。

アザゼル「は…こいつがゴーストか…初めましてだな。俺は墮天使の総督アザゼルだ。そしてこっちがヴァーリ、お前と同じで神滅具持ちだ。」

ヴァーリ「初めましてだなゴースト。いつか手合わせしてもらっても良いか?」

玲士「知っている。俺の使い魔がお前を見ていたからな。そしてミカエル、あなたもだ。あとヴァーリ、手合わせは周りの被害を考えろ。」

ミカエル「おや、そうでしたか。初めましてですね。数年前はガブリエルを助けていただき感謝しています。」

そう言いながらミカエルは一礼し、一緒にガブリエルも一礼する。ヴァーリ「ふっ、ならアザゼルに専用のフィールドを作ってもらえば良いんだな。」

アザゼル「おいおい…：そういう見られていた感覚はあったが、お前の使い魔だったのか…：しかしお前が、か？ガブリエルを助けたやつは黒髪の美人だと聞いていたんだがな。」

セラフォル「やつほー☆多しぶりだねゴーストくん♪」

玲士「そうだな、そう言えば聞いたぞ。またその恰好で学校に来たようだな。それとアザゼル…：その時は俺は仮面付けてなかったただだ。」

サーゼクス「ところで、リアス達はどうしたんだい？」

玲士「一度合流して、グレモリー達に警告してからこっちに来た。」

アザゼル「…ん？警告だと？」

玲士「…まさかとは思うが、何も来ないと思っっているのか？各勢力のトップがいるという絶好のチャンスに。」

サーゼクス「なるほど、そういうことか。それに関してははっきり対策はしているよ。」

玲士「そうか…。」

アザゼル「ふむ、なあゴースト。」

玲士「…なんだ？」

アザゼル「どうだ？俺の所に来ないか？悪魔の身であろうと歓迎するぜ。」

サーゼクス「アザゼル、私の傭兵を勧誘しないでくれないかな？」

アザゼル「へっ、傭兵だから良いだろう？いつかは契約が切れるんだしよ。」

玲士「…契約したいなら仲介者を介してからにしろ。シャムハザに聞けば分かるだろう。」

ガブリエル「なるほど。では仲介者さんを介せばよろしいのですね？」

アザゼル「なぬっ!？」　サーゼクス「えっ!？」

ミカエル「おや。」　セラフォル「ガブリエルちゃんも狙ってた!？」

その言葉に他トップの4人が驚愕の目を向け、声を発する。

玲土「そうだな。仲介者を介せば、誰であろうと依頼は引き受ける。その依頼が善であれば、だがな。」

ガブリエル「えっと…私はまだ分からない事もありますので教えてほしくて。」

アザゼル「あー、俺はまあその神滅具が気になってな。あの武器どっから出してるかとかが興味深いからな。」

玲土「…それぐらいなら、まあ構わんが、総督の場合はもつと部下の管理をしろ。」

アザゼル「許可は貰ったが耳がいてえな…。」

そう話していると、扉よりノックの音が聞こえる。

リアス「リアス・グレモリー、ただいま到着致しました。」

サーゼクス「来たみたいだね、入ってきたまえ。」

その返事の後、扉が開かれリアスとその眷属が入ってくる。

サーゼクス「そちらの壁に並んでくれたまえ。」

そうサーゼクスより指示され、リアスと眷属達はソーナの横に並んで姿勢を正す。

サーゼクス「では全員が揃ったという事で、会談の前提条件を1つ確認する。ここにいる者達は、最重要禁則事項である『神の不在』を認知している。」

その言葉にその場にいる全員が軽く頷く。

サーゼクス「では、全員が認知しているとして会談を始めよう。」

その言葉を合図に会談が始まり、互いにそれぞれの勢力の話をしていく。

そして、会談は進み、コカビエルの行動、各々の勢力の問題点などの話が終わり、話の焦点はゴーストへと移る。

アザゼル「さて、次に俺が一番気になっている点について聞いて良いか?」

サーゼクス「構わないよ、どうしたんだい?」

アザゼル「ゴーストについてだ。そいつが俺ら三勢力に関わってか

ら調べたが不可解な点が多すぎる。そいつは何者だ？」

玲士「…何者、か…そうだな、これでも体が化け物と言う事以外はただの傭兵なんだがな。ガブリエルと関わる前の1年ほど前から傭兵になった感じだ。」

アザゼル「…だからそこが不可解なんだよ。そんな神器を持っているなら、傭兵になる前からどこかしらの勢力からスカウトが来るはずだ。」

玲士「…なるほどな。それを言うなら俺はほとんど情報を残さなかつたから、としか言えんな。…それに、わざわざ隠している個人の情報を追求するのは失礼だと思わんのか？」

アザゼル「…あー、まあそうだな。そう言うならしようがない。」

サーゼクス「質問は終わったみたいだね、では次なのだけれど」

ガブリエル「あ、あの！私からもよろしいですか…？」

言葉を遮り、ガブリエルが手を上げる。

サーゼクス「ふむ、良いでしょう。」

ガブリエル「部外者である天使が言うのもどうかと思いますが…悪魔の駒とは本当に必要なのですか…？」

サーゼクス「本当に必要…か。我らにとっては必要な物であるが君としてはどういった意見何だい？」

ガブリエル「はい。私からしてみれば一部…いえ、はつきり言います。大半の悪魔の方が他種族の生命の理を無視し、己が欲望でその生命を冒瀆していると思います。」

サーゼクス「…ふむ、それは少々耳が痛いね。確かにその通りかもしれない。最初の頃の私の妹も『同じこと』をしていたからね。」

その言葉にリアスが目を背ける。

アザゼル「だがガブリエル、ミカエルは悪魔の駒の天使タイプを作ろうとしているのはどうなんだ？」

ミカエル「問題にしているのはそこではありませんよ、アザゼル。」
ガブリエル「そうです。問題にしているのは相手の意思を無視して転生させている方がいる事に関してです…そしてその結果として生まれたはぐれ悪魔もです。はぐれ悪魔になった者全てに責任を押し

付け、王には罰を与えないと聞きました。」

セラフオルー「それははぐれ悪魔の子たちが力に溺れて勝手な行動をしているから……。」

ガブリエル「私はゴーストさんと出会った後も何度か人間界に降り立ち、何人かはぐれ悪魔になった者と出会ったことがあります。確かに力に溺れた者もいました……ですが、中には無理矢理悪魔にされて逃げ出し……帰った先は全てが燃え尽きた村があつたと……そして私はその焼け落ちた村で遭遇いたしました。」

その言葉にセラフオルーは驚き、顔を俯かせる。

ガブリエル「彼は私に……泣きながら懇願してきました。『僕を殺してください』と……死にたくないではなく、殺してくださいと言う方ははぐれ悪魔にいるのに……全てはぐれになった方が悪いのですか……？」

サーゼクス「……それは。」

ガブリエル「悪魔の政治に口を出すのはどうかと思います。ですが……それでも、私は申します。本当に悪魔の駒は必要なのですか……？ 下級の悪魔の方を教育する場を作り、後続を育成すれば良いのではないのですか……？」

サーゼクス「……申し訳ないが、それに関しては今は答えられない。」
ガブリエル「……そうですか。」

アザゼル「……あー、まあ空気を悪くなつちまつたし話題を変えても良いか？」

ミカエル「そうですね、では神滅具を持つ3人への質問を致しましょう、よろしいですか？ 皆さん。」

ヴァーリ「構わない。」

一誠「え、あ、はい！」

玲土「……構わん。」

アザゼル「聖書の神がいなくとも廻るこの世界……神を殺す神器を持つお前たちはどう過ぐす？ ヴァーリ、お前はどうかだ。」

ヴァーリ「俺か？ 俺は強い奴と戦えればそれで良い、それ以外は無いな。」

アザゼル「はあ……全くお前は。じゃあ赤龍帝、お前はどうかだ？」

一誠「え、えっと…俺は…。」

そう言われ、考え込んでしまう。

サーゼクス「そう難しく考えなくても大丈夫だよ。君の夢を答えれば良い。」

一誠「サーゼクス様…はい！俺の夢はハーレム王になる事です！」
その答えにトップは皆微笑み、笑い、リアス達学生組は苦笑いをする。

アザゼル「は、ははははは！良い夢じゃねえか！ならゴースト、お前はどうかんだ？」

玲土「…復讐だ。」

復讐。他二人とは一線を画した明確なその言葉に、その場にいる者全員が驚愕の表情を浮かべる。

サーゼクス「…それは、誰に対してだい？」

玲土「分かん。だが…恐らく人間か元人間だろうな。」

そう言いながら一枚の写真を取り出し、机の上へ投げる。

ミカエル「ゴーストくん、それは？」

玲土「奴に繋がるヒントだ。これ以外のヒントは存在しない。」

その言葉に、トップの4人は写真を見る。

セラフオルー「瓦礫…？」

アザゼル「…ああ、なるほどな、確かにヒントだな。」

ミカエル「…ふむ、確かにこれはおかしいですね。」

サーゼクス「ああ、破碎跡以外にも切断跡もある。だがこれでどうして人間なんだい？」

玲土「三勢力のやつにこんな事をする理由が無いからだ。」

ガブリエル「理由、ですか？」

玲土「この家があった地域は一応は悪魔の自称管理地だ、だが…だからと言ってピンポイントに俺の家だけを狙う必要などない、気まぐれで壊すのに対してわざわざ1軒だけなどありえないだろう？」

アザゼル「…なるほどな。だからその時人間だった奴が犯人と思っただけか。」

玲土「ああ。」

サーゼクス「…私達でも誰が犯人かは分からない、別の質問をしよう。もし、その復讐を終えたら君はどうするんだい？」

玲士「…死ぬ、それだけだ。」

その言葉にヴァーリを除いた者達が再度驚愕の表情になる。

ガブリエル「そ、それはどうして…ですか？」

玲士「…決まっている、俺は『人間』だ、そして既に俺は死んでいる。今の俺は怨霊の様なものだ、化物の肉体のまま生き続けようなどとは思わん…だからこそ、復讐を果たした後は死に、地に還る…それだけだ。」

その言葉にガブリエルと一誠は悲しみの表情を浮かべる。

サーゼクス「…それなら」

玲士「絶対にありえん。俺は眷属になったつもりなど無い。」

サーゼクスが喋ろうとした瞬間即座に遮り、否定する。

アザゼル「…ほう、なら死ぬときはその神器を譲ってくれないか？」

また所持者を探すというのは大変だからな。」

ミカエル「アザゼル、あなたは！」

玲士「構わん、死ぬときにはこの神器を譲ってやる。」

一誠「ゴ、ゴースト!? どうして!」

玲士「再利用するというやつがいるなら死んでそのまま持つていくよりマシだろう?」

ガブリエル「…私や、アザゼルと長期契約するのは、嘘だったのですか…?」

玲士「嘘ではない。俺が復讐を果たすまでに魔王ルシファーとの契約が切れれば長期契約はする。」

ガブリエル「なら!」

玲士「…すまん。俺は人間の肉体ではなくなったという生き恥など晒すつもりはない。だから復讐を果たした後は死ぬ、それだけだ。」

アザゼル「…ほう、なら人間の肉体に戻れば生き続けるのか?」

玲士「そうだな…それなら生き続けるだろうが…戻るなど『絶対』にありえないだろうな。」

その言葉と共にサーゼクスへと視線を移し、ミカエル、ガブリエル、

アザゼルの3人も魔王を見る。

玲土「悪魔は所詮、他種族など道具としてしか見ていない。ましてや俺は神滅具持ちだ。そんな『優秀な道具』を悪魔が手放すわけなからう？」

アザゼル「なるほどな…確かにその通りだなあ？そうだろ？サーゼクス。」

サーゼクス「…確かにその通りだ。道具として見ているつもりはないが、わざわざ神滅具持ちである彼を手放すには惜しい。」

ミカエル「…今はその話題は後に致しましょう。ゴーストくん、いくら質問されたからとはいえ、その答えはこの場では言うてはいけない答えだ。」

玲土「知った事ではない。聞かれたから答える。それがどのような結果を招こうとな。」

アザゼル「…まあ、今の俺らにやあ道は一つしか残ってねえ。無駄に争っていれればいずれ共倒れだ。だから…和平を結ぼうじゃねえか。」

その言葉に各勢力のトップは頷く。

玲土「…っ！全員構えろ、敵襲だ！」

その直後、敵意に気付きそう叫んだ。その声を聞いたリアスチームを除いた者達は即座に臨戦態勢に入った。

そして、それと同時に空間の時間が止まる…。

第22話 襲撃者

周囲の時間が止まり、外にいる護衛達、そしてソーナチーム、リアスチームのアーシア、朱乃の2名が動けなくなる。

玲士「…で、何か弁解はあるか？サーゼクス？」

そう言いながら外で時を止められている護衛の悪魔、天使、墮天使に向けて銃を撃ち込む。

撃ち込まれた者は魔方阵が展開され、別の場所へと転移していく。

サーゼクス「…対策はしていたつもりだ。だが、まさか時を止められるとはね…。」

一誠「い、今は…？それも時間の停止って…。」

アザゼル「…上位の実力を持つ俺たちはともかく。ガブリエルの近衛小隊、龍の力を持つ者とそれに触れていたグレモリー、自身の時間操作を出来るゴースト。そして聖剣使いは分かるが…何故お前も動いている？」

その言葉にヴァーリを除いた止まっていない全員が一人の男へと視線を向ける。

慎士「そ、そりやあ俺だって実力があるからに決まってるだろ！」

ミカエル「…ここにいる者は全員、あなたに実力があるとは思っていませんよ。だから驚いているのです。」

慎士「んなあ!？」

サーゼクス「…ゴーストくんすまない。危険だが、頼めるかい？」

玲士「…敵の攻撃を惹きつけながら倒す、か…任せろ。」

そう言い残し、窓を割りながら外へ跳んでいき、校庭へと着地する。それと同時に空に広がった魔方阵から何人もの人間が転移し、一定時間校舎へ向けて攻撃した後に全員の動きがぎこちなく別の方向へ向き、1点だけを狙い始める。

ガブリエル「ゴーストさん、私も…!？」

天使「ガブリエル様、また説教されますので追っては駄目です！」
後を追おうとしたガブリエルを、近衛兵の天使たちが急ぎ掴み押さえる。

ミカエル「サーゼクス。何か知っているみたいですが、この力は一体？」

サーゼクス「リアスの眷属に『停止世界の邪眼』を持つ者がいるんだ。恐らく彼の力だろう…。」

アザゼル「…それもバランスブレイカー状態にしたみたいだな。」

一誠「ギヤスパーが!？」

サーゼクス「停止能力を有する者は滅多に存在しない…恐らく、敵の手に落ちたとみるべきだろう。」

木場「部長…。」

リアス「私の眷属がテロリストに利用される…これほどの侮辱は無いわ。」

そう言いながらこぶしを握り締め、怒りの表情を浮かべる。

ミカエル「ゴーストくんが先に転移させておいてくれたおかげで警護の者達は無事ですが…この弾幕ではゴーストくんが…。」

グレイフィア「逆に、こちらの転移用魔方陣はゴースト様が用意した特殊魔弾以外完全に封じられているようです…。」

アザゼル「やられたな…。」

ガブリエル「…ですが、おかしいです…あの人数にリアスさんの眷属の方を逆利用する戦い方が出来るなんて…。」

木場「…裏切り者がいる、ということですか？」

サーゼクス「恐らくそうだろうね…だが、このままじっとしているわけにもいかない。ゴーストくんにも疲労は溜まっていく。それにギヤスパークんの力がこれ以上増大すれば悪いことになる。」

一誠「サーゼクス様達まで…あいつにそこまでの力が…。」

木場「彼は、ゴーストさんと同じで変異の駒だからね。」

一誠「そうだったのか!？」

アザゼル「とりあえずハーフヴァンパイアの小僧もそうだがあつちに援軍を出さねえとな…ヴァーリ、行けるな？」

ヴァーリ「問題ないが…別にハーフヴァンパイアごとテロリストを旧校舎を吹き飛ばせば問題ないだろう?。」

一誠「てめえ…!。」

アザゼル「ゴーストもそうだったがちったあ空気読めよヴァーリ。和平を結ぼうって時によ。」

ヴァーリ「待っているのは性に合わなくてな。さて…ゴーストを狙っている魔法使いたちを倒してくるか。」

そう言いながら白龍皇の光翼を展開し、窓を突き破って外へと出ていき、禁手を展開する…。

場所は校庭。魔法使い達からの集中攻撃を避け続ける玲士の元へヴァーリが飛び寄る。

ヴァーリ「まだ問題はなさそうだな、ゴースト。」

玲士「…ああ、これぐらいなら問題はない。」

ヴァーリの背後に隠れ、飛んでくる魔法をヴァーリが防いでいく。

玲士「…お前に攻撃を集中させる、構わないな？」

ヴァーリ「構わないさ。さあ、やろうじゃないか！」

そう言いながら敵の中心へと飛んでいき。

玲士「さあ：『あいつを狙え』！」

その言葉に呼応し、玲士を狙っていた魔法使い達の視線はヴァーリへと移り、ヴァーリに向けて魔法を放ち始める。

玲士「…さて、反撃に移るとしようか。
I ^体 am ^は the ^剣 bone ^出 of ^来 my ^て sword.^る」
そう言いながら二つの双剣を投影、片方を狙撃銃に、片方を弾丸へと改造する。

弾丸を装填した後、背中に背負い、ホルスターより別の銃を取り出して射撃を開始する。

一気に大多数の魔法使いを消し飛ばすヴァーリに対し、一人一人的確に撃ち抜いて戦闘不能に持ち込む玲士、対照的な戦いながらも魔法使いはその数を減らしていく。

そう戦闘している最中、突如会議室が爆発に包まれる。

玲士「ツ!?一誠とガブリエルは無事か!?!…あいつは…確かレヴィアタンの…指示される前に、殺す…。純血の悪魔に説得など無駄なのだからな…!」

眩きながら学園外の端へ移動し、しゃがんで背中の狙撃銃をレヴィアタンへ向けて構える…。

場所はグランドの空中、防御結界を展開する三勢力のトップ陣に相対するは褐色の女性、旧レヴィアタンの血筋の者。

旧レヴィアタン「三大勢力のトップが共同で防御結界…ふふ、なんと見苦しい！」

サーゼクス「…どういうつもりだカテレア。」

カテレアと呼ばれた女性は目的を語り始める。

カテレア「この会谈の、まさに逆の考えに至っただけで『タアンツ』ぐうっ?!」

語り始めた瞬間別方向より銃撃があり、カテレアの左肩に命中する。

セラフォル「っ?!カテレアちゃん!」

カテレア「くそっ…銃撃と言う事はゴーストか!」

サーゼクス「ゴーストくんか…貫通していない…?!ツ?!待て、そのような指示は!」

玲士「人間に確実に仇なす奴め…惨たらしく絶命しろ!

アシリミテッド・ロストワークス
無■の剣製!」

カテレア「傭兵風情が!貴様からさ『ザシユツ』…えっ?な、ガツ、これはツ、そんな…?!私はまだ、セラフォルを!あああああ!『パアン』」

突如聞こえてきた玲士の声。その声を合図にカテレアの体より剣が生えていき、周囲の景色を一瞬だけ上書きして爆散する。

その光景に時を止められていない三大勢力の者達は目を見開き、啞然とする…。

啞然としながら結界を地面に着地させると同時に玲士が近寄ってくる。

玲士「魔王ルシファア、一通りの雑魚敵の殲滅は終わった。だが、やはりまだ魔方阵から」

サーゼクス「君はなんてことをしてくれたんだ!彼女を殺せなんて

私は」

その言葉を遮り、サーゼクスは怒りながら玲士へと問いただそうとする。

玲士「指示しただろうか？『敵を惹きつけながら倒す』とな？あのいきなり現れた女はお前らと敵対していた。ならば…倒す対象だ。どう倒すかは指示されなかったからこちらで考えて行動した。指示を的確にしなかったのに文句を言われる筋合いなど無い。」

しかし更にその言葉を遮り、指示内容を繰り返して、反論する。

セラフオール「だからって…だからってこんな死に方、あんまりよ！」

玲士「そうか、つと…なんだこれは？…ふむ、墮天使総督、これはお前に渡した方が良いな。」

セラフオール「の言葉を聞き流しながらそう言いながら黒い影の蛇の入った小瓶を拾いあげてアザゼルへと投げる。

アザゼル「つと、黒い蛇…？いや、この蛇はまさかぐあつ！」

そう言いながらその小瓶を見つめている最中、白い鎧に腕を切断されて小瓶を奪われる。

アザゼル「いっつ…俺も焼きが回ったもんだ…なあ、ヴァーリ？」
左腕の切断面に魔方陣を展開して止血しながら空を見上げる。

そこには魔法使いを殲滅し終え、魔方陣を掻き消したヴァーリの姿があった。

ヴァーリ「すまんアザゼル、こっちの方が面白そう『タアン』おつと、危ないじゃないか。」

玲士「…流石に見られていたら避けられるか。」

アザゼル「はあ…なあヴァーリ…一つだけ聞きたいんだが、うちの副総督のシエムハザが三大勢力の危険分子を集めている集団の存在を察知してな。カオス・ブリゲード禍の団と言ったか。」

セラフオール「危険分子を束ねるだなんて…！」

ガブリエル「その様な事を出来るとすれば相当な実力者…。」

アザゼル「で、そのまとめ役が無限の龍神…ウロボロス、ドラゴンオーフィス！」

サーゼクス「オーフィス!?!まさか神も恐れたあの最強のドラゴン

だって!？」

ヴァーリ「確かに俺はオーフィスと組んだ。だが俺もあいつも、覇権だか世界には興味が無くてな…力を利用してしようと連中が勝手にくっ付いて来ただけだ。」

玲士「ウロボロス…ウロボロスは蛇でもある…なるほどな、その黒い蛇はオーフィスの力か。」

ヴァーリ「ふ…ははは！それだけの情報でそこまでたどり着くとは流石ゴーストとでもいうべきか、そうだな。これはオーフィスの蛇と言って使用者の力を高める事が出来るそうだ、俺は興味が無いが…む？あつちは終わったようだな。」

その発言と同時に世界が割れるような音がして時が止まっていた者達が動き出す。

アザゼル「しっかしなるほどなあ…てつきりさっさと死んだカテレアと仲良くつるんだのかと思っただぜ？魔王の座を奪われた同士仲良くな。」

その言葉に各トップ陣が驚きの表情になる。

ヴァーリ「ふっ、そんなものには興味は無い、俺の名はヴァーリル」

慎士「死ねえ！」

【射線計算は出来た…ここで出せばあー！】

ヴァーリが名乗ろうとした瞬間、その後方上側に黄金の波紋が多数出現しヴァーリに対して武器が射出される。

ヴァーリ「…ふっ。」

玲士「…ほう？」

しかし、ヴァーリは避ける事すらせず魔方陣の結界を以て自身に当たる武器を全て防ぎ、玲士はヴァーリに当たらず自身に飛んでくる武器を即座に回避しガブリエルの傍へと跳ねる。

慎士「なあっ!?!ふ、防がれた!？」

ガブリエル「っ！大丈夫ですかゴーストさん!？」

玲士「ああ、問題はない。」

「…明らかに今のは俺を殺そうとしたなこいつ？あいつなら回避する

だろうと踏んで攻撃したみたいだがあいつもそれを理解して防いだな。」

ミカエル「…サーゼクス、後で話があります、今はガブリエルを退避させたい、ゴーストくんをお借りしますよ。」

「…一応は仲間ですから今は同士討ちさせるわけにはいきませぬね…。」

サーゼクス「…良いでしょう。ゴーストくん、セラフオールも一緒にお願ひします。」

ガブリエル「ミカエルさん!？」

セラフオール「サーくん!？」

玲土「…了解した、転移で退避させる。」

そう言いながらハンドガンを投影し、弾を5つ装填して自身を中心にガブリエル、セラフオール、近衛兵たちが範囲に入る様に地面に弾丸を撃ち込んでいく。

ヴァーリ「ふっ、逃げるのか?ゴースト。」

玲土「俺は傭兵だからな、指示通り動くだけだ。それにお前が白龍皇だというなら相応しい奴が来るだろう?転移するぞ!」

そう言いながら転移の魔弾を装填したスピードローダーを取り出し、地面に殴り付ける。

その瞬間、地面の銃痕が繋がって魔方陣が展開され、魔方陣の中にいた者達は別の場所へと転移する…。

場所は廃協会の地下…数日前に玲土が拠点にしていた場所へ玲土らは転移する。

堕天使「誰だ…!っ!魔王レヴィアタンにガブリエル!?それにゴーストも…」

天使「良かった…ガブリエル様ご無事でしたか。」

先に来ていた悪魔、天使、堕天使の護衛の者達は身構えるが人物が分かり、即座に武装を解除する。

ガブリエル「はい、皆さんもご無事の様で何よりです。」

玲土「転移完了…さて、今日の仕事は終わった、俺は拠点に帰らせ

てもらおう。」

セラフオルー「…ねえゴーストくん…どうして人間は助けたのにカテレアちゃんは殺したの…?」

玲士「お前らなら人間程度の反撃など余裕で防げるだろう?だが奴は腐っても魔王の血筋だ、手負いの獣は恐ろしいというからな…お前の下らん情で生き残らせて死者が出た場合、貴様はその責任を『ちゃんと』とれるのか?」

セラフオルー「うっ…。」

ガブリエル「…ですが、あの殺し方は、あんまりです…。」

玲士「…すまん、流石にあれはやりすぎか…確実に仕留められる方法をただけだが…次からは気を付ける。」

セラフオルー「なんだろう…私とガブリエルちゃんの扱いの差が酷い気がする…。」

玲士「気のせいだろ、ではな。」

そう言い、玲士はその場を後にする。

ガブリエル「…皆さん、すいません。少し、一人にさせてもらってもよろしいでしょうか?」

近衛兵「…あの男の事、ですか?」

ガブリエル「…はい。」

近衛兵「分かりました、ですが…『それ』をすると決めた際は他トツプの方にもちゃんと話を通しておくようにしてください、でなければ墮天使の総督らへんが追求するでしょうから。」

ガブリエル「皆さん…ありがとうございます。」

そう言いながら一礼し、ガブリエルは玲士の後を追うように部屋を後にする。

セラフオルー「…みんなはゴーストくんについて知ってるの?」

近衛兵「ガブリエル様と我ら近衛兵、ミカエル様は正体についても知っている。だが、教える事はしない、特にあなたは口というか口調が軽すぎるから信用出来ないからだ。」

セラフオルー「…そっか。」

その後、サーゼクスから騒動が終わった事の連絡が来るまで沈黙は

続いた…。

第23話 協力者

駒王会談襲撃から翌日、玲士は拠点にて魔王ルシファーと通信をしていた。

玲士「…要件は何だ？昨日の文句なら通信を切るぞ。」

サーゼクス『それについてはちゃんと指示してなかったからと言う事で割り切るよ、今回は別件でね…。和平を結ぶ際にアザゼルをオカルト研究部の顧問に据えたいと思ってるね、彼ならみんなを鍛える事も出来るし禍の団に対する牽制にもなる。』

玲士「…それで？」

サーゼクス『君の本名を彼に教えておきたいんだ、トップで彼だけが知らないからね。それに君の幼馴染である一誠くんは思ったことを口にするタイプだ、君の事をポロっと滑らせる可能性が高いと思うがどうだろうか。』

玲士「…確かにそうだな、良いだろう。だが…ちゃんと口止めはしておかないと…分かるな？」

サーゼクス『もちろんだとも、では通信を切るとするよ、これからミカエル達と3人で協定の調印をする話し合いをしなきゃいけないからね。』

玲士「分かった、ではな。」

そう言い、通信を切り、ベッドへと寝そべる。

玲士「打痕、切断跡…そして俺への攻撃…あいつが、あの男が家族を殺したのか…？辻褄が合う…だが理由が分からん…それもあの年齢でそんなことをする理由が…例え女だとしてもその年齢でそんな事を思うわけもない…一体、どういう事なんだ…？」

一人、ベッドの上で呟きながら瞳を閉じる…。

場所は駒王学園会議室、そこには悪魔、天使、墮天使のそれぞれのトップが集まっていた。

サーゼクス「待たせたね、ゴーストくんからの許可もとれたから彼についての情報を教えるよ。」

アザゼル「お、本当か？聞いた話じゃあいつの情報管理に関しては厳しいからしいかな、仲介者にも聞こうとしたが絶対に売らないって言われたから無理だと思ってたぜ。」

サーゼクス「まあ、そうだね。それと彼の情報だが広めたら誰であろうと殺しにかかるって言ってたからね。」

ミカエル「え、えつとそれでしたらガブリエルは大丈夫なのですか…？私は彼女に教えてもらったようなものなのですが…。」

サーゼクスの言った内容に対し、ミカエルは困った顔をしながら問いかける。

サーゼクス「それに関しては大丈夫だと思うよ、彼はガブリエルとも交流があるみたいだからね。」

アザゼル「もしかしたら墮天させるかもしれない可能性なのにその芽は摘まないんだな？ミカエル。」

顎に手をやり、にやにやしながらミカエルを見据えながら問いかける。

ミカエル「…そう、ですね。確かにその通りなのでしょう…ですが、彼はガブリエルに正しい責任感を、それに伴って好奇心が生まれ、向上心というものを与えてくれた、以前までの彼女はただ毎日を言われた通りにこなしているだけでした。」

アザゼル「まあ、そうだな…今までのガブリエルは言われただけをこなしているだけで自身を顧みなかった所もあるしなあ…ま、だから今まで墮天の可能性なんて存在しなかったわけなんだが。」

ミカエル「ええ、それにガブリエルは気づいてはいないでしょうけれど彼に惹かれている、もしも墮天の可能性を理由に彼を殺してしまえばガブリエルは恐らく彼の後を追うでしょうからね…。」

サーゼクス「…彼はそこまでの事をしたのだね。」

ミカエル「ええ…。」

アザゼル「…で、話が逸れちゃったがあいつの正体は一体誰なんだ？」

サーゼクス「ああ、そういえばそうだったね、彼の本名は近衛玲士、10年前までこの町に住んでいた元人間だ。」

アザゼル「ほう？ そうなのか。」

ミカエル「彼については名前だけだが知っていた時に私たちも調査しましたが…赤龍帝である一誠くん、そして教会の戦士であるイリナくんの幼馴染であるという事…そして10年前に家族と一緒に死亡扱いされていたということぐらいしか分かりませんでしたね。」

アザゼル「…なるほどな、それでその問題が出るのがお前の妹の眷属であるあいつ、か。」

その言葉に他の二人が頷く。

サーゼクス「ガブリエルがゴーストくんに会わせて欲しいと訪問してきた時に彼はすさまじい形相でゴーストくんを睨んでいた…その時の私はゴーストくんの事が嫌いだからそんな顔をしていたのかと思っていたが…。」

ミカエル「禍の団の襲撃…そしてヴァーリ・ルシファアの裏切りの時に彼の攻撃…。」

アザゼル「あんなんすぐ分かるつてのにな、バレないようにするなら下側からも包囲するように出せつてもんだ。」

サーゼクス「…だね。」

ミカエル「…ですね。」

アザゼル「だが分からない事が多すぎる、あいつは何故ゴーストの奴を狙うんだ？」

その言葉に他の二人は答える事が出来ず黙り込む。

アザゼル「…あの写真は確か10年前の物だよな、だが…それは奴が小学生の時に行動したことになる。」

サーゼクス「…あの時の管理者は別の者だが…確かその時は冥界の方に呼び出されていて留守にしてたはずだ。」

ミカエル「…この事は玲士くんには伝えるのですか？」

サーゼクス「…いや、まだ伝えなくても彼は気づいているだろうからね。それに…慎士くんは既に仲間から怪しまれている、この事を伝えて妹の眷属の中で不和を大きくしたくないからね…。」

アザゼル「ま、それもそうだな…直接なんでゴーストを狙う？ なぁなんて聞いたとしても素直に教えてくれるわけもねえしな。」

ミカエル「そうですね…では、今後は彼には一応注意をするという事でもよろしいですね？」

アザゼル「任せろ、さて…じゃあちゃんとした調停を結ぼうじゃねえか、俺の所は神器を安全に切り離す研究とついでに部下の管理を。」

ミカエル「ついでじゃなくてそれもちゃんとしなさい、私の方は教会の大司教達のちゃんとした管理と聖剣などの各神話への返還を。」

サーゼクス「私の方はまだ難しいが悪魔の駒、そしてはぐれ悪魔に関する改定を主とし、三勢力で和平を結ぶ。」

そう言いながら三人は紙に名を書き、書き終えた瞬間、紙は空中にて巻かれて封をされる。

アザゼル「さあて、終わった事だし俺は歓楽街にでも行くとしようかね。」

ミカエル「…はあ、全くあなたは…。」

サーゼクス「ははは、では私はリアスの元へ行くとしよう、今回の事を伝えないとね。」

そう言いながら3人は部屋を後にする…。

…場所はどこか部屋の中、多数の機械、画面に囲まれた男は電話を取る。

仲介者「はいこちらコードネーム、ジ・ゴーストミーデイエーター。今回の要件は傭兵依頼？それとも情報かい？」

ガブリエル『あ、あの…私です。今、お時間はよろしいでしょうか？』

仲介者「おや、ジブリールさんじゃないかどうしたんだい？すまないが彼についての情報は売れないし搜索依頼は別の者に回すことになるぜ？」

ガブリエル『…今回のお話は玲土さんについてです。』

仲介者「ツ…その声、気づいたんだな？周りには誰もいねえな？ガブリエルさんよ。」

ガブリエル『…はい、問題ありません。ここは私の仕事部屋で今は

誰も入らない様にしてあります。』

仲介者「…そうか、で…あいつについてどうした。」

ガブリエル『彼が…彼が復讐を果たした後についてお聞きしました…。』

仲介者「…聞いたのか…そうか、ならすまねえな、俺じゃあ無理だ…。」

ガブリエル『そんな…！あなたは彼の相棒ではないのですか…！』

仲介者「…本当にすまねえ…俺はあいつの相棒で仲介者だが…それだけだ、それだけでしかねえんだよ…！俺はあいつに返しても返し切れない借りがある…だけどそれでも俺じゃああいつを思いとどまらせる事は出来ねえんだよ…！」

ガブリエル『…そう、でしたか…。』

仲介者「…ガブリエルさんよ、頼みがある…。あいつを、あいつの想いを変えてくれ…俺はあいつに会いに行く事が出来ねえ…幼馴染でもその想いを変える事が出来なかった…だからよ、会いに行けるお前さんに頼むしかねえんだ…頼む、あいつを死なせないでやってくれ…！」

ガブリエル『仲介者さん…分かりました、どうすれば良いかは分かりませんが、頑張ってみます！それで別のご相談なのですが…実は彼の———』

ガブリエルがしようとしていることを細かく説明する。

仲介者「あ…なるほどな、なら〇〇町の〇〇番地にある廃墟に行ってみ『ビジョン』いつでええええええええええ！』

その発言をした瞬間、全身に激痛が襲い掛かる。

ガブリエル『ちゆ、仲介者さん大丈夫ですか!?!』

仲介者「だ、大丈夫だ…約束を破ったペナルテイみたいなものだから気にしないでくれ…。」

ガブリエル『そ、そうでしたか…そ、そこへ行けば、よろしいのですね?』

仲介者「ああ、そこにあるはずだからな…。」

ガブリエル『分かりました、探してみますね。』

仲介者「すまねえな…ゴーストの事、よろしく頼むぜ…。」

ガブリエル『はい!』

その返事と共に通信が切れ、仲介者は煙草に火をつける。

仲介者「いつつ…全く、あいつも罪作りな奴だなあ…あんな別嬪と互いに気付いてない相思相愛だというのに…なあ玲士…あんなにもお前を想ってくれている奴がいるんだぞ…だからよ…自分の人生を楽しんでくれや…。」

男は一人、複数のモニターを見ながら作業を再開する…。

第5章 冥界合宿のヘルキャット

第24話 夢、そして冥界行き列車。

場所は駒王駅の地下、そこに存在する悪魔用の冥界行きホームのベ
ンチにて一人、玲土は昼寝中であり、夢を見ていた…。

大体4か月ぐらいに一度見る鮮明な夢、一人の勇氣ある凡人とその
仲間達による時代を巡り救う旅の物語、短いものもあれば長いものも
あり、今回の夢は短^外い夢^伝であつた。

前回にも見た戦いの祭典、その続編なのだろうか、様々な英雄達
がそこら辺から獣や人形、骨など敵を集めチームを組み、戦いを始め
る。

生前からの付き合い、死後の英霊としての付き合い、所属する国で
の繋がりなど様々なチームが戦い、予選を超え、本戦を超えて選ばれ
た7組が決勝にて何度も戦いあう。

そして、優勝したのは一人の凡人が率いる英霊たちのチーム。

優勝した彼は主催者であるかつて暴君と呼ばれた女性により7つ
の特別な対戦カードを提示される。

一戦目、コルキスの魔女とその若かりし姿の2名と理想の女性美を
持つ女化した男により構築されたその戦闘限りの再現された肉体を
持つ半人半神の英雄。

二戦目、影の国の女王に無理やり連れてこられ、霊基をいじられ本
気を出せる肉体にされた男とその師匠による演武。

三戦目、再度理想の女性美を持つ男による改造にて自身の宝具をそ
の戦闘に限り完全に使えるようになった1000の人格を持つ暗殺者
と他の代である暗殺者2名による数の暴力。

四戦目、戦乙女から逃亡していた竜殺しの男を捕獲、霊基改造し、本
来の英霊として呼ばれていた場合の体にして用意した伝説の魔竜再
臨。

五戦目、欲しがった男が嫌いな女と共に参加しているのを発見して
激昂し、本来の英霊としての力を取り戻したケルトの女王と彼女より

生まれ落ちた兵士達による特殊な戦い。

六戦目、本来なら別の者が戦う予定ではあったが今までの戦いを見て昂った英雄王が召喚の術式を超え、世界の抑止限界ぎりぎりの本来の実力を出して、挑戦状を叩きこみ、暴君が気に入った為に急遽組まれた世界最古の英霊との戦い。

七戦目、主催者である暴君とその我儘に率いられた5人の英雄との戦い、様々な戦闘スタイルを持つ者達と一人の凡人とその仲間達との戦い。

全ての戦いにて何度も負けはしたが少なき知恵を絞り、対策を考えて一戦一戦、超えていき仲間達にて更なる結束を生んでいき、戦いの祭典は終わりを迎えて夢も終わりを告げて目が覚めていく。

目を開けると同時に、奥のエレベーターの扉よりグレモリーチームとシトリーチーム、そしてオカ研の顧問となったアザゼルが出てくる。

アザゼル「ん？ゴースト来ねえなど思ってたが先にこっちにいたのか。」

玲士「俺は基本魔方陣で行き来するからな。…さて、来たみたいだから俺は先に乗っているぞ。」

そう言いながら列車の扉より中へと入っていく。

匙「え、えっと大丈夫なのか？あれ。」

ソーナ「問題ありませんよ、彼はグレモリー眷属としてではなくグレモリー夫妻の客人として誘われていますので。」

一誠「そうなんですか？」

リアス「そうなのよね…お父様とお母様は彼を気に入っているのよ、私の家庭教師の様なものとしてね。そして客人として呼ばれた時はこうして一緒に列車に乗っていくのよ。」

ゼノヴィア「なるほど、初めて出会った時とかも説教とかしてたが家庭教師みたいな面もあったのか。」

慎士「…思いつき私怨ぶちまけてた気がするんだが…。」

朱乃「それはリアスが遅すぎただけですもの、しようがないですわ。」

リアス「うぐつ…とりあえず私たちも乗るわ。」

そう言いながらリアスが一人そくさと列車に乗り込み、それに続いてリアス眷属とアザゼルが乗り込んでシトリーとその眷属は別の車両へと乗り込む。

全員が乗り込んでから数分後、列車はゆっくりと走りだす。

列車内は豪華な装いでテーブル席やカウンター席などがあり、椅子やソファなど背もたれがある物ない物様々である。

リアス、朱乃、アーシア、ゼノヴィア、一誠は同じテーブル席に座り、小猫とギヤスパが別のテーブル席へと座る。

木場と慎士がカウンター席へ座るが、最初に慎士が小猫の傍へ座ろうとして殴られたためにカウンター席にいる。

そして玲士は別の車両のテーブル席にてアザゼルと同席している。

アザゼル「…なあゴースト？兵藤達とトランプはしないのか？」

玲士「…俺に遊んでいる暇など無いからな。」

アザゼル「おいおい…まあいいさ、それでお前さんは新人悪魔の会合へは行くのか？」

玲士「会合はお偉方の無能上層部や魔王、後は将来有望と言われてる新人とその眷属達が行く場所だ、傭兵である俺が行く場所ではない、たとえ魔王ルシファーに要請されたとしてもな。」

アザゼル「ほーう、今ので聞き返さないという事は事前に言われたのか？」

玲士「ああ、『出てみないか？』と言われている、もちろん断ったがな。」

アザゼル「ま、そうだろうな。しっかし…お前さん料理とか以外の集中できるもの作ったらどうだ？女だったらいい店紹介するぜ？」

玲士「結婚出来てないお前に言われてもな。というか最初に女を紹介しようとするな、お前の事だから神器とかだと思っていただぞ。」

アザゼル「ぐつ、う、うつせえ！お、俺だって好きで独身してるわけじゃねえよ！…つたく。」

玲士「それと俺はまだ17だ、年齢的に結婚はアウトだ。」

アザゼル「そういえばそうだったな…なあゴースト、もしもの話だからそんなことは無いと言わずに答えてくれよ？復讐を終えた後に人間に戻ったらお前は何かしたい？」

玲士「何がしたい…か、はつきり言うとするなら『分からない』だ。そんな事を思ったことすら無かったからな…何をすれば良いのか予想が出来ない。」

アザゼル「なるほどな、傭兵のまま生き続けるのも良しだが、辞めてなにか別の事を始めるも良しだ、お前の相方もそつちを望んでるらしいな。」

玲士「あいつめ全く…。」

アザゼル「ははは、さて…俺は寝るとするかね、お前さんはどうするんだ？」

玲士「…俺も寝るとしよう、する事もないしな。」

そう言いながら目を瞑り、眠り始める。

アザゼル「…やれやれ、先は長いか。」

そう言いながらアザゼルも眠り始める…。

第25話 グレモリー邸来訪

：電車に揺られること数時間、特に何事もなくグレモリー領駅に到着する。

各々は降車しようと扉から出た瞬間。

使用人、s 「二リアスお嬢様、お帰りなさいませ!!」

大量の花火が上がり、待機していた執事やメイドたちが一斉に頭を下げる。

それに対し一誠とアーシア、ゼノヴィアは口を開けて啞然とし、ギヤスパーは大人数に驚きゴーストの後ろへと隠れる。

そうしていると皆が見知っているメイド、グレイフィアが一步前に出る。

グレイフィア「お帰りなさいませ、リアスお嬢さま。道中、無事で何よりです。そしてゴースト様もきていただき感謝します。」

リアス「ただいまグレイフィア。あなたも元気そうだなによりだわ。」

玲士「…ああ、あいつは元気にしているか？」

グレイフィア「ええ、貴方が来るのをとても楽しみにしておりますよ。」

玲士「そうか…。」

グレイフィア「馬車を用意しておりますのでお乗りください、グレモリー家の本邸までこれで移動します。」

そうしてグレイフィアに案内されて駅構内から出るとそこには数台の馬車と巨大な馬が待機していた。

一誠「で、でっけえ…これで移動するんですか…？部長。」

リアス「ええ、そうよ。イツセー、アーシア、ゼノヴィアは私と一緒に乗るわ、この三人は不慣れでしょうから。」

グレイフィア「ではゴースト様、こちらへ。」

そう言い、グレイフィアは一番端の馬車まで行き、扉を開ける。

アーシア「ゴーストさんは一緒じゃないのですか？」

裕斗「そうだね、ゴーストさんは僕たちとは違って客人と招待され

てきてるから別の馬車なんだよ。」

玲士「ギヤスパー、お前は小猫や木場と同じ所に乗れ、良いな。」

ギヤスパー「ううっ…分かりました。」

そう言うときギヤスパーは落ち込みながら裕斗の傍へと移動し、玲士はグレイフィアの案内した馬車へと移動し乗り込む。

それを皮切りにリアスとその眷属達はそれぞれの馬車へと乗り込む。

全員が乗り込み、座るのを確認し、馬車は動き出す。

電車と同じ様に馬車に揺られること数十分、馬車の窓よりグレモリー本邸が見えてき始める。

そして馬車はグレモリー邸の門前に止まり、使用人によって馬車の扉が開かれる。

使用人「お待ちせしました、ゴースト様。グレモリー本邸到着です。」

玲士「分かった。」

そう言つて降りると既にリアス達はグレモリー本邸へと入つていた。

場所はグレモリー邸内、扉を開けて屋敷内に入つたりリアス達に小さな人影が走り寄ってくる。

???「リアスお姉さま!お帰りなさい!」

その小さな人影、紅髪の少年はその言葉と共にリアスへと抱き着く。

リアス「ただいまミリキヤス、大きくなったわね。」

アーシア「部長さん、その子は一体…?」

慎士「なんとというか魔王ルシファー様に似ているような。」

リアス「ふふふ、そうね。この子はミリキヤス・グレモリー。お兄様、サーゼクス・ルシファー様の子供で私の甥なのよ。」

一誠「そ、そうなんですか!」

リアス「ええ、ほらミリキヤス。挨拶をして。」

ミリキヤス「はい!ミリキヤス・グレモリーです。よろしくお願い

します!」

そう言い丁寧に挨拶し終わると同時に周りを見始める。

そうしていると再度屋敷の扉が開き、玲土が屋敷へと入ってくる。

ミリキヤス「あっ!ゴーストさん!」

その姿を見たミリキヤスはリアスの横を抜け、ゴーストへと抱き着く。

玲土「む?おっと…元気にしているようだな、ミリキヤス。」

ミリキヤス「はい!あ、あのゴーストさん…今回もあれを頼んでよろしいですか?」

玲土「構わん、夕食に出せば良いか?」

ミリキヤス「はい!やったー!」

無邪気に喜ぶミリキヤスにリアスは渋い顔を浮かべ。

リアス「…どうしてゴーストはこうミリキヤスに懐かれているの?」

そう小声で呟くとその言葉が聞こえていた一誠達は一人を除き苦笑いしか出なかった。

ミリキヤスを連れて屋敷内を歩いていき、階段が見える場所まで来ると一人の女性が降りてくる。

亜麻色の髪を持ち、リアス・グレモリーと同年齢ぐらいの穏やかな瞳の女性、その女性がこちらを見つけると歩み寄り。

???「帰ってきていたのねリアス、そしてゴーストくんもいらっしやい、いつもリアスが迷惑をかけてるわね。」

玲土「…そう思うなら管理者にせず冥界の学校に通わせる、失態のし過ぎだ。」

???「あら手厳しい。」

リアス「ちよ、ちよつとゴースト!」

一誠「あ、あの部長…この方は部長のお姉さんですか?」

リアス「…私のお母様よ。」

その言葉に新参である一誠、アーシア、ゼノヴィアの3人は眼を見開き。

一誠「お、お母様あああああああ!」

一誠に限っては叫びをあげる。

玲士「うるさいぞ、一誠。」

一誠「ご、ごめん…って、いやでもどう見ても若すぎでしょう!」
リアス「悪魔は歳を経れば魔力で見た目を自由に出来るの。お母様はいつも今の私ぐらいの年齢好きなお姿で過ごされているのよ。」

アーシア「そ、そうなんですネ。」

ヴェネラナ「ふふ、初めまして。私はリアスの母、ヴェネラナ・グレモリーですわ。よろしくね、兵藤一誠くん。」

一誠「は、はい!よろしくお願ひします!部長のお母様!」

玲士「俺は準備に取り掛かる、ではな。」

そう言いながらミリキャスの頭を少し撫でていき別方向へと歩いていく…。

場所はキッチン、コックたちが忙しく調理しており、玲士が中へ入ると一人の男性が即座に玲士の元へ歩み寄り、一礼する。

???「よくぞいらつしやいました、ゴースト様、タルトの仕込みはこのような感じでよろしかったでしょうか?」

そう言われ、視界に映るシロップ漬けにされている果実を目にして一考し、口を開く。

玲士「…ふむ、バツチリだコック長、これなら俺がない時にミリキャスが欲しがっても満足できるドラゴンアップルのタルトが出来るだろう。」

コック長「ははは、それは良かった、ミリキャス様が時々欲しがってジオテイクス様にゴースト様をすぐに召致出来ないか聞いておりましたので。」

玲士「時々あいつからグレモリー家への来訪に関して連絡来ると思ったらそういう事だったか…あの親ばかりかめ。とりあえず今回は見る限りで一切手伝わん、アップルのカットの仕方は以前に教えたはずだ、出来るな?」

コック長「はっ、お任せください。お前たち!手の空いたものはドラゴンアップルを取り出せ!」

料理チーム「了解！」

その掛け声とともに調理の人員を割いてドラゴンアップルを大きめのまな板の上へと移す。

玲土「さて、お手並み拝見といくか。」

そう思いながら見物しているとコック長は羽を広げ、普通のリンゴよりも何回りも大きいドラゴンアップルを普通のリンゴの切り身サイズに均等にカットしていく。

そうして数分後、そこには均等にカットされたドラゴンアップルの山が広がっていた。

玲土「…お見事、本当に俺の手はもう必要ないな。」

コック長「は、はは…柔らかくなっていたとはいえやはり緊張しましたな。あとは盛り付けた後に焼いて冷やすだけですな。ゴースト様はご夕食は如何されますか？」

玲土「客ではあるとはいえ一緒に食事をする気はない、いつもの部屋にもってきてくれ。」

コック長「分かりました。これからもミリキヤス様やリアス様の事をよろしくお願いします。ゴースト様。」

玲土「…ああ、ではな。」

そう言つて玲土はキッチンをあとにし、グレモリー邸でいつも寝泊まりする客室へと向かい始める…。